

變つてゐた！ 最早コボオは一年もまへからパリにゐなかつた！ その居處さへ知つてゐる人がなかつた！ その一座もちりちりばらばら、或者は彼とともにパリを去つて田舎に赴き、或者はデュランを中心にアトリエ座を作り、或者はジュベールを中心としたコメディ・ド・シヤンゼリゼエの團を作つてゐるといふ噂ではなかつたか！

自分は消え失せた期待のまへに茫然と立ち盡したと言つていい。しかも、何故コボオはその一座を離散しパリを背にして淋しい田舎に引き込むことになつたかの理由を詳しく聞き知つた折の自分は、衷心彼の爲めに祝盃を擧げなければならぬ感動さへも覺えたのであつた。……

一體わがコボオは何が故に多年手鹽にかけたヴィーユ・コロムビエ座を解散して田舎落ちをするに到つたのか？

先づ世の常の人の口にする説明に依れば、芝居『生れた家』Maison nataleの不成功が不人氣が、コボオをしてこの最も悲壯なる決心をなさしめた原因なのであるといふ。『生れた家』はコボオ自身

の作品であつた。しかも彼はこの『生れた家』の上演に、初めて自己の作品を自己が演ずるといふ初経験を試みたのであつた。加へてこの作品こそは、彼が十年間の長い歲月に亘る勞作と冥想の結果に他ならないものであつたとさへいふ——その作品が、世間から冷たく迎へられたのだ。幾多の迫害と艱苦とに屈せずしてヴィーユ・コロムビエ座を今日までにしたのは偏に彼の雙手の力であつたのから考へて、彼がかうした一座解散の舉へ出たといふのは、當時この冷たい世評が如何に大きな打撃で彼を打つたかが何人にも容易に想像せられよう。——といふのである。勿論、この説明は一見如何にも世人の臍に落ちさうな理由ではある。

然し、眞のコボオの友人は、かかる理由で——かゝる個人的な、自尊心の満足といふやうな理由でコボオともあるものがこれほど重大なる決心をする筈がないことを當初から信じたものであつた。果然その推測に間違ひはなかつた。決して自作の不成功不人氣といふやうな所から來たのではなく、全く常人の想像以外の所にあつたのであつた。

それは何であつたか？

他にもない、彼が今まで善しと選んで歩みを續けて來た路が實は間違つてゐたと感じたからであ

るのだつた！ 自分ではそれを知らずに、自然長い間憂める者や誹る者やの聲に動かされるともな
く動かされて辿つて来た路が、眞の自分の踏み行くべき路ではなかつたことに気が付いたからであ
つた。しかしわがコボオは、間違つたと気が付いて尙且つその歩みを續けるやうな人間ではな
つた。彼は間違つた歩みを一步をすら運ぶ『雅量』がなかつた。彼はその瞬間に立ち停つた。その
瞬間に踏み馴れた舊道に背をそむけた。彼はこの突然の轉身が世人をして彼れの『生れた家』の不
人氣と關係あるが如く邪推せしめることがあるのを知らないではなかつた。然しこの際藝道の眞の
精進のほか他に法則を知らうとしてゐない彼にとつては、かうした世間の陰口などは問題ではな
かつた。彼は世間に對し文字通り一言の挨拶も聲明も辯解も試みようと思はずに黙々として一座を解
散しパリを退去するに到つたのである。……

○

彼はパリを退去して何處へ何をしに行つたか？、それは長い間の謎であつた。噂は噂を生んでい
ろいろの事が傳へられたが、眞實の所は容易に判らなかつた。それが漸くのことと眞相らしいもの

がパリに傳へられることになつたのは昨年の暮近いことであつたらしい。

ブルギーギユと言へばポルドオと並んで葡萄の美酒を産む土地として名の高い所だ。コボオが『都
落ち』をしたのは實にこの地方であつた。詳しく言ふならば、パリ・ヂジョンの國道に沿ふたボオ
ヌの町に程近いピナルの小村の一軒小屋であつたのである。

然し彼はたゞ一人ではなかつた。ヴィーユ・コロムビエの一座は解散されたが、其一座のなかで別
して彼の心に近い者だけが數人彼の後に従ふこととなつたのである。

かうして彼が、パリの空氣が襲ふて來ないこの佻しい田舎の一軒屋で數人の弟子をあい手に何を
しやうとしたか？——彼の言葉を借りて言ふならばそのしやうとした仕事は『創造的ルネッサンス
の運動を有効に指揮』するといふことに外ならなかつたのである。または、『勞作の一機關を創設』
するといふことに外ならなかつたのである。換言すれば、劇場改革の素志を遂げやうとしたものに
外ならなかつたのである。

この小人數の一座の平素の仕事としては、勿論研究であつた。が、それと共に村から村へその
『興行』を持ち廻ることが食ふ爲にも、旁研究の爲めにも必要であつた。曾てパリの華やかな脚光燈

のまへで艶やかに着飾つた観客を相手に興行を續けてゐたこれ等の役者たちは、いまや葡萄摘みのつくるはぬ粗野な男女たちを観客として、太陽のさんさんと振りそぐ大氣のなかでその技藝を現すことゝしたのである。而して彼等の上演狂言も、最早パリでのやうに『テナシテイ號』や『スルパタの死』やてはなくて、古い喜劇——殊にモリエール邊りのものを、極めて古い様式のまま、演ずるといふ有様であつた。『この喜劇の古い様式のなかにこそ、永遠の「笑」の法則がある！』——コボオは、さう感じてゐたのであつた。それ計りてはない。彼自身告白してゐるやうに『これ等のものを演ずる時、田舎の陽氣な人々も全く抱き合ふやうに感じる……』のであつた。これほど素朴で強い喜びは、他に多く想像しがたい。——

この素朴で誠實な観客。この風景の明媚な地方。この葡萄の美酒、そしてモリエールの永遠の「笑」の法則。——コボオとその少數の一座は、パリで到底得られないものを、こゝでは安々と捉へることができたのである。

「……庭で用ひる椅子が一杯に並んでゐる布製の大きなバラック劇場。奥には探照燈で照し出す舞臺ができてゐて、観客席とボナールの描いた幕で隔てられてゐるその高い舞臺のうへから、役者は部屋一杯に働きかけるのだ。……先づそこで三日間芝居を打つ。出し物は、お極りの喜劇のほか、何か即興的の一幕を加へる。かうした疲労と興奮と歡喜と苦惱との三日間がすぎる。と續くのは楽しいいろいろなアドヴェンチュアの三日間である。ところが、これは天氣のい、時だけの話で、不幸にして初日から千秋樂の日まで、ひつきりなしの嵐といふやうな時がある。さうなると、雨水は遠慮なしに場所のなかに這入りこんで来て、観客連の足まで浸すといふ騒ぎとなる。雷が芝居の眞最中に電燈を消してしまひ、蠟燭を運んで來るまでの薄暗がりのなかを、役者たちは平氣で芝居をしつづけるといふやうなこともある。……三日間の興行で、よし雨が降る日はいつてゐても、二千人の観客は遣つて來るのである……」

これは、サン・トニといふ男がアルサスの地方新聞に書いたのをパリのある夕刊新聞で轉載した、それを更に自分が要譯したわけである。

コボオを親しくパリで見たことがある日本の芝居愛好者の人々にとつて、かうした短い記事でも

數數の盡きぬ感慨の種とならぬことはあるまい。

○

そのコボオがバリへ來たのだ。彼の田舎での生活が、さては遡つて彼の抑々の都落ちの真相までが、うすうすと人々に判りかけて來た時に飄然とバリへ遣つて來たのだから、新聞なぞが天下の大事件のやうに騒ぎ立てるに到つたのである。

が、コボオの都入りは、人々が待ち望んでゐるやうにバリに再び腰を据ようといふ所から來てるのではなかつた。それ所か、却つて彼は『バリの莫迦な生活は、二度と遣るつもりはない！』といふすげない言葉で、訪問のある新聞記者に酬るてる位である。彼は、食ふために一週間に一度だけは興行し、あとの六日間は全然その同志と技藝の研究に没頭できる生活より以外には、もう彼の心を牽く何物もないと言つてゐる。そうした場合は、田舎を措いて何處にあらう！

○

然しさうかと言つて彼はこのバリで彼を心から愛し惜む幾百幾千の人々のあるのに無頓着ではゐられなかつた。彼は、かうした人々の愛に酬るるためから言つても、いづれそのうち一座を率ゐる數日間の興行をしにこのバリへも來るのであらうことをそれとなく洩らしたのであつた。

それ計りではない親しい友だちの強い懇請があつたとは言へ、彼はその短期日のバリ滞在を利用して二度も公開の朗讀を遣つたのである。その孰れもセクスピアの朗讀で一つは『マクベス』一つは『リア王』であつた。

いづれバリへも一座を連れて來る折があらう！——かうしたや、果敢ない希望を人々の胸に投げ込んだだけで、この二回のセクスピア朗讀ののち、わがコボオは再びブルギーユの小村をさしてバリを去つてしまつたのである。

自分は勿論、わが新ヴィーユ・コロムビエ一座がバリの脚光燈のまへに立つてあらう折には手拔りなく遠い日本の芝居愛好者に通信を認めるであらうことをお約束するが、その折は何日來るか——神ならぬ身の知る術もない次第である。(一九二六・三・一八)

流行兒ピランデロ

——名優ピトエフの『アンリ四世』

国立劇場のコメデイ・フランセーズにイブセンの『ヘツダ・カブラー』がかつた。この國では國立劇場にかうした外國の翻譯ものなぞがかゝるといふことは、よくく珍しい出來事なのである。それだけに、この作品それ自體に對し、さてはそれに出演する俳優たちに對し新聞なり雑誌なりの烈しい賛否の議論は容易に絶えはしなかつた。が、こゝでは、そうした興味多い議論も、一切紹介するの暇はない。たゞそうした議論のなから自分がこれから書かうとすることに關係のある言葉だけを、こゝに書き抜きすることに止める。

それはかうである。——『……今更イブセンの脚本でもあるまい。わけて彼の作品のうちでさし

て傑作とは認め難い『ヘツダ』の上演でもあるまい。この人が如何に當時の劇壇の革命兒だつたにせよ、この人の死後に現はれてゐるわがフランス劇場のそれこれの名篇を想ふても見よ！ 兎に角に、イブセンの時代は過ぎてしまつた。今日強ひて外國の作家を拉し來るとならば、むしろピランデロをこそ選ぶべきであらう。イブセンの時代といふものがあつたならば今はピランデロの時代ではないか！』而して、この論者は結んで言ふ。——『今日漸くイブセン物を上演しつゝ、あるわがコメデイ・フランセーズは、今後十年を経て初めてピランデロを上演するの光榮を有することゝなるであらう！』

ピランデロとは如何なる人であるか。事新しく自分が説き出すまでもなく、伊太利劇壇の巨星——と云ふよりも、恐らく現在世界各國の劇壇を通じての傑れたる作家と目せられてゐる人であることは遠い日本でも既にその名作『六人の登場人物』の譯本が頒布してゐるといふことだけでもそれと推測し得らるゝ所であらう。イブセン以後、世界の劇作家はこのピランデロに止めを刺すこと

が當つてゐるかどうかは知らない。兎も角もこのパリーに於いてのピランデロ熱は、想像の外にある。今日ピランデロを語らざれば、芝居の話が人前で出来ぬと言ふ言葉も、左して誇張でもあるまい。外國物と言へば（わけて劇場では）冷淡極まる取扱ひを受けるのが例になつてゐるこの國だけに、このイタリーはシチリアの人ルイジ・ピランデロの流行といふものは、何と言つても、近來の大出來事の一つであるに違ひない。

藝術座（テアトル・デ・ザール）では目下ピトエフ夫妻が『アンリ四世』をやつてゐる。アトリエ座（テアトル・ド・アトリエ）では『夫々理窟はある』（シヤツカン・サ・ヴェリテ）をやつてゐる。更にルネツサンス座（テアトル・ド・ラルネツサンス）では『裸の者に着物を着せる』（ヴェチール・スー・キ・ソン・ニユー）をやつてゐる。パリーにいくら劇場の數が多いにしても同時に三箇所であつて同じ作者のそれも外國人の物をやるなどといふことは餘りレコードのない出來事である。パリー人が羽毛のついたロープや焦茶いろの帽子やと一緒にわがピランデロをも『ラ・モード』のなかに押し込んでしまつてゐるのは、思へば無理もない話である。

○

名のみ聴くことは久しく未だ親しく拜見したことの無い名優ピトエフ夫妻をも兼ねてこの機會に見ることにして、藝術座に『アンリ四世』を見物に出掛けたのは、今から一週間ほど以前のことである。西條八十君も一緒にあつた。

アンリ四世といへば、まぎれもない歴史物のやうだが、實は假裝行列の折にアンリ四世に扮して折悪く落馬しその爲めに腦を打つて痴呆になつたといふ男のこゝを取扱つたものなだから、その題目からして既にピランデロ式だとも言ふことができやう。

扱て腦を打つたこの男は、己れの姿を見廻して、自分こそはまぎれのないアンリ四世（十一世紀のドイツの皇帝で、ローマ法王グレゴリー何世かの勸を蒙り雪のなかを三日三晩法王の門前で立ち暮したといふその人だ）と思ひ込んでしまふ。然しこの男は富裕な家に生れてゐるので、周囲の者がわざ／＼その爲めにそれらしい部屋も作つてやれば、夫々に國務大臣やら何々侯爵やら何々公爵夫人やらも作つてやり、一切アンリ四世の生活と信じられる生活を送らせることができたのであ

る。この變挺な生活が十何年ほども變りなく續いて行くのである。

所が、一體この男の落馬の因はと言へば、實は當時戀敵であつたある男の仕業だつたのだ。その折の戀人は、今はその男の持物となつてゐることは、言ふまでもない。

この戀人が、その出來事があつてから十何年経つたある日のこと、何々侯爵夫人としてアンリ四世の許に伺候する。所が當時の古めかしい服裝を身に纏つてはゐるけれども、その女性が他ならぬ自分の戀人であるといふことは痴呆な腦の彼にも直ちにそれと感知することが出来る。この面會に引續いて彼の腦裡には次第に落馬のことが、落馬以前の生活のことが、落馬以後の生活のことが臚げながら浮び出して來るのであるのみならず、この女性が今は己れの戀敵の持物であり然も自分の落馬がこの男の仕業であつたといふことをも、傍の人々の私語のなかからそれと知るに到るのである。十何年もの永い眠りから眼が覺めたのだが、彼にはアンリ四世として送つて來た今迄の長い生活を打破してしまふ氣力が無い。結局この日以來虚偽の生活とは知りながらも依然アンリ四世として日一日を偽造の國務大臣やら侍従やらを相手にして送つて行くこと、なるのである。かくして、歲月は更に二十年を経過する。さうしたある日のことアンリ四世は、恒例に依つて上

流社會の人々を接見したことがあつたが、そのなかには、例の戀人の侯爵夫人もゐたが、それよりも、彼の女に伴はれてゐる娘のフリダといふのがあつたのである。その娘は、當時の、——彼の落馬當時の若い戀人だつた母親に、それこそ瓜二つであつた。それに、彼の女の服裝までが、あの當時の戀人の假裝そのまゝではないか！ それを見たアンリ四世の彼は、燃え上る青春の熱情と戀敵に對する復讐の念と一生を棒に振つた後悔の念との混淆した烈しい激動を受けて一切の理性の力を失つてしまひ、矢庭に腰に佩びてゐる皇帝の長劍を抜いてその席に列つてゐる戀敵の男を一突きに突き殺してしまふ。がこの復讐が終るや血の滴る長劍を侍従に渡し、彼は再び玉座に着きアンリ四世となりすましてしまふ。かくして一時眞實の生活に足を踏み入れた彼は再び、虚偽に立ち戻つて悲喜劇的な生活を續けて行かうとするのである。

これで幕は下りる。アンリ四世に扮したのは、言ふまでもなくピトエフで、ピトエフ夫人は、戀人の娘フリダに扮する。

かうした筋書だけを書いただけでも、この『アンリ四世』が従来の数多い脚本と比べると大分粗ひ所が違つてゐることを、慧眼なる讀者は感知せられること、思ふが、わけて親しくこの芝居を見た自分にとつては優に一つの新しい驚異でもあり類のない感動の種でもあつたのである。が、その新しい驚異、類のない感動とは一體何であるのか？ 強てそれを一口に言ふならば、表面機智と皮肉との連發のやうでありながら、實は涙に充ちた憐憫の感情と人生に對する強い熱情とに溢れてゐるといふ、不思議な『美』に充たされてゐることである。舞臺に動いてゐる人物が、一見皮肉極まる作者の人生哲學の代辯者の様ででありながら、しかも滴る、ばかりに血も涙もある生き、つた人間になりきつてゐるといふことである。さうだ、何よりも人間であるといふことである。境遇に押しおれ、しかも境遇を押し返し、更に境遇に押し流されてしまふ、強いやうで弱い、賑かなやうで淋しい、人間といふものが、そのまゝに舞臺の上に泣き聲と笑ひ聲とを立てながら動いてゐるのである。従つてその皮肉、その警句も、例へばバーナード・ショウに見るがやうな、主として理智から頭腦から湧いてゐる逆説的好みからは極めて遠いものである。それは血で燃たぎつてゐる心臓から突いてきた涙の皮肉であり情熱の警句である。また例へば、イブセンに見るやうな、理路整然たる

個人對社會の葛藤、對峙といふが如き堂々たる問題劇の看板を立て、あるやうな性質のものでもない。解決がつきさうで決して解決のつかぬ人生の亂れた佻しき姿そのもの、生きたまゝの描寫であり縮圖なのである。兎に角に人々は『アンリ四世』を見ながら、苦笑と憐憫と喜劇と悲劇との感情の波を水をかふるやうに一時に味はせられるのである。かうした感銘を與へる芝居は、他に鳥渡あるまい。

ピトエフの藝は、明晰と均齊と並に趣味とを何よりも尊しとなすフランスの多くの俳優のなかには容易に見出し難き烈しき熱情と凄じき變化との展開を飽くまでも見せて呉れる。『アンリ四世』に現れてゐた虚偽と眞實のなかに次々と生る、苦痛と忍従と後悔と憤怒と陰險と露骨との繪巻物を、これほどまでに生々と一身に示し得る俳優が、ピトエフ以外に多くあらうとは、自分には信じられない。彼のフランス語には、耳觸り以上のひどいロシア訛がある。彼の舞臺の上の動作には、熱情以上のひどい粗野さがある。が、それにも係はらず彼の藝は此等の缺點を飛び越えて——否、

此等の缺點をもそのまゝの藝の上に重加して、ピランデロの描きたる殘虐なる悲喜劇的人物を、文字通り躍如たらしめる。蓋し、現代の傑れたる俳優の一となすを憚らない。但し、その妻ルドミラ・ピトエフ（人々のなかでは、ピトエフその人よりもこの女優を更に傑れたりとして推賞してゐるものが尠くないと聴く）は、不幸にしてこの『アンリ四世』にあつて全く端役を勤むるに止まり、自分の折角の豫期を充して呉る、に至らなかつた。これは、他日を俟つのほかない。……

見終つて外に出る。出口より吐き出さる、人の波のなかにあつて今更伊太利の女性の觀劇に來れるもの、多きに氣が付く。金髮黑瞳、流石に美女に豊なる邦である。漸くこれ等の群より出て暫く西條君と肩を並べて歩く。『實に面白いねえ。一通りピランデロのものを見て行きたいものだねえ。』——西條君は頻りにこの伊太利の作品に傾倒して別る、まで終に一言もわが伊太利の金髮黑瞳には及ばなかつたのである。（一九二五・三・二三）

ポール・モーラン

——近業『艶やかなる歐羅巴』——

『夜ひらく』『夜とさす』の作者ポール・モーランが、佛國外務省の役人であることは、今更らしく披露するまでもあるまい。彼がついこの頃までケードルセーの外務本省で、これも小説『シーグフリー』とリモージュ人の作者として人氣おさく、モーランにも劣るまじく見えるジャン・ジロドゥーの部長の下に情報部次長を勤めてゐたといふ事柄も、知る人は知つてゐるであらう。そのモーランが、シヤムの佛國公使館附書記官に任せられ、本任公使の任命になるまで當分バンコックにあつて公使の職を代理するといふ報道を新聞のうへで自分が見たのは、二三週間もまへのことであつたらうか。おや／＼と思つてゐるうちに、モーラン代理公使は、既にシヤム指してフランスの土地

を離れたといふ記事が二三日まへの新聞に載つてゐるのに眼が付いた。この機會に日本を經由して新任地に赴くといふ事實をもそれとなく聞き知つた。若しその通りならば、この通信が日本に届く頃わが『夜ひらく』の作者は、恐らくは『トーキョーの夜』を『ギンザの夜』を遺憾なく踏破してゐる時分に當るかも知れない。

○

然し自分がこゝに彼モーランに關してこの短信を認めようとしたのは、直接かうした機會を用ゐんとしたが爲めではなくして、實は彼の近業『艶やかなるヨーロッパ』(『Europe galante』)が市場に上つたのを機會と把んだものに他ならぬのである。即ちこの短篇小説集は、一九二一年以來一年毎に必ず一冊づつ、著作を刊行するのを例としてゐるこの作者の、一九二五年度の著作に當るわけだ、それがこゝ、二三週間ほどまへ市場に出たからといふ意味合に他ならぬのである。然も、新聞の廣告に依れば、この『艶やかなるヨーロッパ』は旬日にして既に五十版を突破したとさへ言ふ。よしそれが所謂新聞廣告に過ぎないとしても、彼の新作が可成りに文壇の視聽を集めつゝ、あることだけ

は、諸新聞雑誌の批評を見てもそれと肯くことができる。従つてかうした機會にモーランを語ることは、取りも直さず佛蘭西の今日の文壇の『あるもの』を語ることもなるであらう。自分の執筆の動機は、多くこゝを出てない。

○

『艶やかなるヨーロッパ』は『三面鏡』『ロガトキヌ博物館』ほか十數篇の短篇を輯めてゐる。『夜ひらく』『夜とさす』を初めとして彼の從來の著作の一切と同じくこの篇中に描かれたる世界は、大戦後の混沌たる世界である。國境と人種との錯綜したる新世相であり新情相である。その筆致は、例に依つて例の如きモーラン式の變通自在を極めたる曲藝である。從來彼の作品を好んだ者にとつては、恐らくこの新作も喜んで讀まることの極めて確なるものであらう。

自分はこゝにこの數多いこの新作短篇を一々解説する暇も持たないしまたその興味をも有しない。が新奇なるものに對して他國にも例を見ない極度なる熱心さを有する日本の讀書子にとつて、程なくこの書の邦譯を自由に手許に置き得る日の來るであらうことは自分の想像に苦しまざる所て

ある。従つて、自分は安堵してこの書の解説をこの未來の邦譯に譲り、こゝでは單に自分の讀後の感想の一二を書き認めることとする。

○

『艶やかなる歐羅巴』の題名は、かの『夜ひらく』を手にしたことのある者にとつては、實に誘惑に充ちたものだと言つていい。開卷前既に讀者は、この作品のなかには定めし『夜ひらく』にも増して大戦後の糜爛し唐顔した情痴の『艶やかなる』世界が陽氣で奇抜なる筆をもつて描かれてゐるものと、合點するに相違あるまい。かくいふ自分も亦その一人に他ならなかつたのである。

開卷第一の『三面鏡』は、先づ先づ註文のごときものである。然し、續いて來る『ロガトキヌ博物館』に移る。續いて更に『レナンの快樂』に移る。以下何々。漸次篇を追ふて讀み來る毎に、開卷前の豫見は著しく的外れてあつたことに氣が付く。的外れとは何か？

『夜ひらく』『夜とさす』に於いて快活さと陽氣さをもつて情痴の世界に嬉戯してゐたかに見える作者は、この『艶やかなる歐羅巴』に於いては、何故かひどく考へ深くひどく陰氣臭くなつて來た。

考へ深くとか陰氣臭くとか言ふのが語弊があるならば、鋭くなつてき嚴肅になつてきたと言つてもいい。兎に角、そこに描かれてゐる大部分の世界は艶やかなる歐羅巴といふよりもむしろ『陰慘なる歐羅巴』と言ふのが、事實に近い氣がせられる。的が外れたとは、この意味に他ならないのである。

○

この前後の著作を、モーランの『進化』と認めるか、『墮落』と認めるか？

自分はひそかに『進化』だと認める。『夜ひらく』『夜とさす』は、自分にとつては如何に楽しい讀物であつたにしろ、その斬新奇抜な表現の仕方以外には、——彼の巧な話方以外には、さして教へられる所がないのを不満とせずにはゐられなかつた。言はゞ自分は、手先足先の器用な輕業師の藝當を、嘆賞するやうな氣持で向つてゐた。巧なトリックを用ゐて作り出してゐる活動の映畫を、眺めてゐるやうな感じで向つてゐた。それがこの『艶やかなる歐羅巴』になると、むしろ手先足先の器用さよりは、頭のなかの眞の働きの敏活さをさては明徹さを想見させられるといふ所まで行つて

る。善かれ悪かれ彼自身の人生の批評がかなりのかつきりさで出て居る。陽氣に歌ふ代りに混亂と陰慘との人生の姿相を鋭い眼付で凝視し初めてゐる。

確かにモーランは、進歩したのだ。但し、この進歩をモーランの爲めに悲しまうとする讀者は、世上必ずしも鮮くはあまい。

これは單に『艶やかなる歐羅巴』に付いてのみ言ふのではなく、從來の彼の作品についても言へることであるが、モーランはこの書に於て（わけてフランス文壇に於ては從來偉大なる役割をつとめてゐた）異國情調（エクゾテイズム）といふものを無残にも破壊して了つた殊勳者（？）であることを示してゐるのを見る。といふ意味は、從來『夢』と『郷愁』との對象となり詩に小説に僅がれの念をもて美しく悲しく歌はれ描かれてゐた遠い異邦なるものが、モーランによつて、極度の距離まで縮められて、（といふよりもむしろ、フランスもロシアもアフリカも日本もまるで明確なる區別がないまでにされて了つたと言つた方がいゝ）その間に『夢』も『郷愁』も何もなくなつて、あるのは何處も彼處も似通つた現實だけといふことになつたといふことである。フランス人もモスコでイタリーベルモットの杯を口にしながらトルコの女と遊ぶ。その翌々夜はベルリンでロシ

ヤの女とアメリカン・バーに出掛ける。最早何處に、ビエル・ロチの香けき嘆きがあらうぞ、況んや、ユーゴの、シャトブリアンの、ヴィニエのあえかなる溜息があらうぞ。然し、飛行機を用ゐれば、世界の一周も旬日にして爲し得る世のなかつたのだ。モーランがその文章で世界を一周するのに十ページしか費さなかつたとして、否、十行しか、十字しか費さなかつたとして、何の抗ふ所があらう！

然も、モーランは嘗てある人の問ひに答へて次の如き言葉を吐いてゐる。（詳しく見たい人士は、フレデリック・ルフェールの『……と一時間』“Une heure avec……”の第二卷卅一頁以下を翻へされよ。因みに云ふ。この書第一第二の兩卷を、佛蘭西文壇の今日を眞に知らんとする人士にお勧めする。）『……異國情調（エクゾテイズム）といふのは、まあ着色寫眞です。それは、エクゾテックといふ言葉の示す通り、自分以外にある、遠い場所にある所のものを、文學の役に用ゐるやうとすることです。自分を捨てて、遠くをとらうといふのです。所が、私の狙つてゐるものは、

これとは全く反對なものなのです。自分等自身と他人との間に新しい關係を創らうといふのです。我々の國と他の國々との間に正確で不斷なる關係を創らうといふのです。……』

モーランに従へば、政治や商工業やが現在の國際的な關係に立たせられると全く同様の趣旨で、文學も須らく國際化せねばならぬといふのである。異國情調とか郷土藝術とかいふものは、南蠻渡來とか國產獎勵とかいふ種類の舊世紀の『國家主義』時代の產物で、今後は是非とも博大なる『國際主義』といふ新時代の旗旌の下に進まねばならぬといふのである。彼は、この己れの主義に名を付けて『世界主義』(コスモポリティズム)(それとも一視同仁、四海兄弟主義と譯した方がいかも知れぬ)と叫んでゐる。蓋し、文學の國際聯盟論者に他ならない。異國情調、郷土藝術、國民文學、民族藝術といふがごとき頑迷保守なる國家主義に基因する舊思想を討つは、常に彼の素志でなければならぬ。――

○
杳かにバリーにあつて聴く。堀口君の邦譯『夜ひらく』市に出ててより、わが日本の新時代を背

負へる諸士の間モーラン張りの文章を遣る者頼に雨後の筍の如く繁きものありと。これ固より文學の國際化を意味する次第で、著者モーランの素志の一片も不取敢こゝに實現したものとて、彼の爲めにはわけて欣快事なりとせない譯には行かぬ。唯惜むらくはバリーと東京と土地遠隔の爲め、此等の諸士が徒に文章の末技に於いてのみモーランを學ぶに止まり、その精神に於いても彼に倣ひて、或ひは國際主義を唱へ、或ひは異國情調征伐、郷土藝術撲滅の勇敢なる戰爭にも従事しつゝ、ありや否や、その詳細を知悉するを得ないことは、この上ない憾みの極みである。その形だけを眞似るに止まることを稱して猿真似とかいふ。わが日本の新時代の諸士が、モーランの猿真似をなしつゝ、あるに止まるか然らざるか、モーランの日本來遊を耳にする今日一しほ自分の念頭を徂徠しつゝ、ある疑問の一つであると言はなければならぬのである。(一九二五・七・二)

日本から歸つた三人

——ヴィルドラック、ブノア及びモーラン——

○

半歳を隔てない位の短い期間にフランスの名だたる文學者が三人も、日本の土地を踏んで來てゐる。一夕これ等の文學者を一堂に集めゆつくり食事でも俱にしなから日本の印象を聞くことができたら、何かのためにならないものでもあるまい。——かう考へ付いた自分は、早速その企ての實行にかゝらうとした、處がその企ても、考へ付くが早いか、實行不能であることが判明した。第一に、シャルル・ヴィルドラックは、日本から戻るが早いか、七月はじめ忽ちにパリをあとに、地中海に面したサン・トロペスの彼の別墅へと家族をまとめて出掛けてしまつた。十月のはじめにならなければバリへ戻らないと言ふ。次にポール・モーランは、シヤムで痛めた健康を恢復する爲め、

○

外務省の方を一年だけ休職にして貰つて、靜養してゐるといふ。かうした彼を、晚餐へ引張り出すといふことは、すこし禮儀にもとる。残るところは『アトランチード』のビエル・ブノア一人だ。この人は、ちやんとパリにもゐるし、また病氣でもない筈だ。この人ならば來て貰へるだらう——さう考へて、最初の企ては全く畫餅に歸したがせてこの人だけでもと取り敢ず日を選んで案内状を出して見た。返事はすぐ來た。よろこんで何ふといふのである。ところが、その指定の日の前日になつて、突然使ひの者が來て自分に渡した彼の手紙に依れば、急に病氣にかゝり到底明日は何へそうもない、何とも遺憾の至りだ、いづれ快癒次第、御挨拶の爲め參堂する、といふのではな

いか。結局、自分の今回の企ては差當り全部瓦解といふことになつてしまつたのである。

○

然しながら、この三人を『一堂に集めて』日本の旅の話の聽くことは、右の通り失敗に歸してしまつたものの、各自の日本に關する感想は、既にいろ／＼の形で自分に知れてはるのである。——先づ、ヴィルドラックの日本印象は、十日ほどまへリュ・ド・セエヌの彼の自宅に晝餐に招かれ

たときに、その口から親しく聞くことができた。尤もその日の彼の話を聴いてから数日後、日本から届いた『東京朝日』のうへで、彼が日本を立ち去るに臨んで書いた感想の一文を読み、當日の彼の話が、ほとんどその感想文と相違してゐないことを知つた。従つて自分はこゝに今更めて彼の日本觀を讀者に傳へる必要を感じないが、一二その話のなかの主眼とも見えるものを茲に記して見よう。

彼は日本に趣いて殆ど *depaysement* (異郷にある心の侘しさ) を感じなかつたといふことを、何度となく繰返して言つた。その理由として彼は、日本に於ける人と人との間の優しい禮儀 *Politesse* がさうさせるのだ、と結論してゐる。ピエル・ロチが、日本人の *Politesse* を感嘆してゐるのは、彼の書物を読むだ者の知つてゐる通りであるが、ヴィルドラックの觀察はこの *Politesse* が、ロチの見てゐるのとは違つて、更に深い社會的感情から來た高く貴いものであると、なしてゐるらしく見えるのである。

彼は、また、日本に於けるアメリカニズムの侵入を語つた。然しその侵入にも拘らず、日本本來の生活が嚴乎と存在してゐることを知つて、『大變安心した』と言つた。思ひのほかには日本の傳統は強い、決してアメリカニズムには破壊されまい、——かうも言つた。

日本の歌舞伎座は、彼には全くの驚異であつたらしい。殊に文樂座の人形芝居を見てその感想を一層深くしたらしい。彼は、いづれこの歌舞伎劇の感想を雑誌『テートル』に書くつもりだと語つた。兎も角、彼の從來の劇作に親しんで來たものにとつて、彼の將來の劇作が、歌舞伎劇に依つて何等かの變化を受けるであらうといふことは、全くの謎としか言ふことができない。それだけに、彼の今後の劇作は、自分にとつて他事ならぬ興味がある。(彼は、クローデルが、歌舞伎座劇の非常な讚嘆者であることを語つた。クローデルの場合は、ヴィルドラックの場合とは大部違ふやうに自分には考へられる。クローデルにはもともと歌舞伎劇にあるやうな様式の美や荒唐な思想やが存在してゐるやうに思ふ。)

書齋が終つて皆がサロンで喋り合つてゐるときあるフランス人のマダムがそのサロンへ通されて來た。『日本の旅はいかゞでした? いろいろ愉快なこともまた不愉快なこともあつたでせう?』かう言ふ新來の客の言葉に對してヴィルドラック夫婦は、『不愉快なこと? ちつとも! 實にい、旅でした!』と抑へながら、二人して掛け合ひのやうに東京での京都での奈良での楽しい印象をこの

マダムに語つてゐるのを、自分は横合から眺めながら、さうだ、この二人は全く日本に満足してゐるのだ、日本の眞の友人がこゝに出来たのだ！と獨語せずにはゐられなかつた。La découverte du Japon est Passionante (日本の発見は、感激に値ひする)——彼が、日本にゐるとき自分に寄せた手紙のなかのこの文句が、そゞろに思ひ出されたのであつた。……

彼の日本印象記は、いづれ脱稿ののちは雑誌『イリュストラシオン』に掲載せられるはずであると言ふ。自分は、彼の日本觀について再び讀者に書く日があるかも知れない。

○

ポール・モーランの日本印象記は、『土地以外何物もなし』“Rien que la terre”といふ題名で十日ほどまへパリの書肆グラッセから發賣せられた旅行記(それはフランスを出帆しアメリカを経由し次いで日本、支那さてはマニラに渡り、續いて任地たるシヤムに赴き、約二ヶ月逗留、病を獲て歸佛の途に就き、印度洋を経由し地中海にいたるまでの彼の旅行記である)のなかの二十頁ほどがそれである。章を別つこと七つ、『横濱』『日光』『中禪寺の夜』『京都』『奈良』『大阪』並に『内海』これ

である。

これ等の印象記を通じて見たるモーランは、結局日本好きを以て結論することができやう。(尤も彼は、日本人の無限の生殖力については頗る不安の眼を見張つてゐる!) 尠くとも、隣國の支那に對して持つた感情とはそれこそ霄壤もたゞならぬものがあるやうに見える。

勿論モーランは、ヴィルドラックのやうに La découverte du Japon est passionante などと卒直におのれの情懷を紙上に洩らすやうな男ではない。彼の感情は彼の文章のやうに隱顯し明滅する。而して、好んでその感情の冷たさを誇らんとするが如き、同じく外交官にして小説家であつたスタンダールの夫れと相類するものがある。従つてモーランの『日本好き』は、決して素人判りがするやうに素直なものではない!

見よ、『京都』の節で、當時の宮庭文藝の隆盛を書いた序に、『その時の最も長い詩がこれである。

——『瀧をとめたのは誰だ?、葉だ。楓の葉だ。』——と二行にも足らぬ言葉を並べてゐる。最も長い詩 Le plus long poème は、すこしひどすぎる。それから續けて『そのほかに平安朝時代の如何にもホイトマン張りな Si Whitmanesque 詩がある』とわざと註を加へて引いてゐる二行の

和歌(?)がある。『松と鶴とは、幾千年以來の伴侶だ!』たゞこれだけだ、これにホイットマン張りなぞといふ大袈裟な言葉を持ち出して來るところが、モーラン張りだとも言へやう。兎も角、この調子で彼は日本を見廻してゐるのである。

然し、モーランのこの『土地以外何物もなし』の一卷は、單純なる文藝價值以外に、更に大きなものを持つてゐるやうな氣がする。それは、簡単に言へば『東洋對西洋』といふ問題である。この問題は、今のフランスの思想界に於いては流行の一つとも言へるほど論じつゞけられてゐる題目だ。東洋人の一人として親しく西洋に身を置いてゐる自分にとつては、それこそ他事ではなく興味ある題目である。此題目に、此モーランの著書が、更に一つの大きな論點を提供したかの觀が見えるのである。

聽けばモーランは、目下頻りに『生ける佛』“Bouddha vivant”とかいふ題の大規模な小説を構想中だといふ。その内容としては、直接に東洋對西洋といふテーマが取扱はれる筈だといふ。いよいよ自分にとつては、鶴首される報知でもある。

彼の見た東洋對西洋の問題。——これも日を更めてまた日本の讀者に語る折があらう。

○

ビエル・ブノアの日本滞在は随分短かつたらしいが、それにしてもヴィルドラックの渡日をあれほど歓迎した日本の文壇(の一部?)が、ブノアの歓迎には全く無關心であつたらしいのは、奇異な感じがされぬでもない。言ふまでもなくブノアは今のフランス文壇では人氣男だ。ヴィルドラックを知らぬフランス人はあつても、おそらくブノアの名だけでも知らぬフランス人は、どんな田舎へ行つてもあるまい。ブノアを日本文壇に持つて行けば菊池寛氏所に當らう。ヴィルドラックは、さしづめ尾崎喜八氏邊の所である(こゝで尾崎氏を引合ひに出したのは、一つには、ヴィルドラックが、自分に向つて同氏を極力推賞したからでもあることを含んで頂きたい)。これだけ言へば、ブノアを追ひ廻さなかつた日本の新聞なりさては文壇なりに奇異な感じがされると言つた自分の言葉が、讀者に理解されること、思ふ。

さて、そのブノアがパリへ着くと早々日刊新聞『ル・ジュールナル』に、『旅のノート』として『予が日本に到着して觀しところ』といふ題下に、その短い印象を公にしてゐる。それと前後し

て、週刊新聞『文藝書報』のうへに、彼との會見記事がのつて居り、主として日本及び支那に關する彼の感想談が掲げられてゐたものである。これ等の文章を通じて彼の日本印象を窺へば、これ亦日本に對し好感を持つてゐると言ふことができやう。『日本では人々は英語しか話さない。それに反し支那ではフランス語が頗る普及してゐる。従つて、支那ではフランス語で道を尋ねても、人が返事して呉れるが日本ではさうは行かぬ。併しながら、それでゐてフランス人は日本では實に手厚くもてなされる。そこへ行くと、イギリス人やアメリカ人は、さうは行かない。……』と『文藝時報』の會見記者に彼が露骨に語つてゐるやうに、彼も亦ヴィルドラックのやうに日本にゐてひどく depaysement は感じなかつた一人らしい。

但し彼の日本に對する好感は、(それは恐らく好感に違ひあるまい) ある點で眞眞の眞眞倒しを遣り兼ねない個所もなくはない。即ち、彼に従へば、日本は今や『擽猛なる偉大さ』 Grandeur farouche にあるといふのである。——といふのは、非常な勢ひで海軍の擴張を遣り、アメリカを打ち負かさんと努力しつゝ、あるといふのである。ハワイを取り、マニラを取り、支那を殖民地にせんと企圖しつゝ、あるといふのである。トルコがイスラム諸國でやつてゐるやうに、プロシアがゼルマン系

の諸國でやつてゐるやうに、日本は佛敎國東洋を統一せんとしつゝ、あるといふのである。しかも彼は、神戸に着いて、直實、敦盛の故事を追憶しこの優雅にして英雄的なる叙事詩こそいみじくも日本をシムボライズしてゐるとなし、上のごとき擽猛なる日本精神をつゝ、む素衣の美しさをゆかしく讚へやうとしてゐるのである。

ブノアは、彼の作品を読んだことのある人の總てが知る通り言はゞ單純なる文學者肌の男ではなない。一種の政治思想なり文明批評なりを、はつきりと持った男である。(さう言へば、今度も日本から滿洲に渡り、奉天で張作霖と會見したり、さては支那の各地でフランスのカトリック僧侶の布敎状態などを調べたりしてゐる。)それだけに、彼の日本觀はヴィルドラックやモーランやとは全然異つた立場でなされたものである。彼も亦、歸來支那を題材とした長篇の小説を構想中であると傳へられる。いづれ日本に關する小説の現れる日もないではあるまい。いづれ近く彼と逢ふことになつてゐる今日、彼の日本觀を更に詳しく聽くことを得るのが楽しみであるとともに、その日本を題材にする小説の執筆が彼の將來の計畫のなかにあるか否かを尋ねるのも、彼に逢ふ興味の一つである。——

○
ヴァイルドラック、モーラン、ブノア——かうした氣質も作風も思ひ切つて違つた三人の文學者が、同じ日本を見て作り出した夫々の印象記が、結論に於いていづれも日本を好ましき國土であるとなしてゐることは、(支那と比較して!) といふ條件が附いてゐるとしてもである。) もとより愉快だ。それぞれ盛名のある作家だけに、彼等の筆によつて好ましき日本の姿相が限りなく遠く擴がることを考へれば一層の愉快である。自分がいまこの三人の夫々の印象をこゝに記して來たのは、遠く異郷にあつてわが生國の善き事を聽く悦びを、それとなく心から洩さうとしたためにほかならない。(一九二六・七・一一)

佛蘭西文壇に於ける『日本』といふもの

——『或る女』『ユキサン』其他——

○
死んだ有島武郎氏に『或る女』といふ長篇小説があることは、人の皆知る通りである。ところが、この小説が最近佛譯せられ、“Cette femme-là” といふ題の下に市場に出ることゝなつた。今から廿日ほどまへのことである。

この佛譯がその譯者メーボン氏の手から自分の手許にも寄贈せられて、まだ三日とは經つてゐないと思はるる頃であつた。(自分は白狀する、その時自分は未だこの頁をすら切つてゐなかつた) ある機會で、最近日本から來られた水野鍊太郎博士ほか日本人の數人に、佛蘭西の元老議員及び代議士五六人を加へた晝餐會の末席に自分も加はることゝなり、酒の酔ひも加はりお互何かと陽氣に話

し合つてゐた時であつた。座の中央にゐたアルベル・ミヨー氏 A. Milhand が——此人は急進社會黨の幹部の一人て目下下院の外交委員會の副委員長をやり最近「エリオ」内閣の外務次官となつてゐる。——何の話の拍子か「Cette femme-là」を口にしてゐるのが不圖自分の耳にはいつた……自分は思はず聞き耳を立てた。聴くと、氏はこの小説を「昨日か讀んだといふのである。『實に面白い！ 實によく書けてゐる！』」自分が聞き耳を立ててゐるのを逸早く見付けたミヨー氏は、フランス人に通例のあの表情のある眼と聲とで、こつちに向き直つて話し掛ける。そして、今までの話を結ぶやうに、「ほんとうにその國を理解するには、その國の小説を讀むのが一番いい……」と、一寸同意を求める形で、すぐ隣席の水野博士の方を振り向いたものである。

○

アルベル・ミヨー氏は、今も言つたやうに下院の外交委員會の副委員長だ。この人が有島武郎氏の『或る女』を讀んだのも、その告白の通り日本を理解する一助として言はゞ『商賣柄』これをなしたのに過ぎないのであつて、別段感服するにも當らないし、まして不思議がるには當らないて

あらう。しかも今自分がわざ／＼それを取り出してこゝに書いて來たといふのは、他ならぬ、この一事が外國に居住する日本人には始終念頭を往來する肝要なる問題であるからである。

といふのは、外國に於いて刊行される日本の小説なり評論なりは、そのまゝ外國の一般讀者にとつて日本を理解する唯一の方法ともなつてゐるといふことである。歐羅巴を旅する日本の旅人が誰しも感じるやうに、是等の旅人は彼等外國人の眼には、常に全日本を背負ふて旅してゐるものなのである。旅人のなす悪事善事は、そのまゝに全日本人の悪事善事であるがごとくに、彼等外國人にとられてゐるのである。それと同じやうに、——いやそれよりも更に強く、外國で刊行される日本の著作は、それこそまぎれもない日本其まゝの縮圖であると人々に受け取られるのである。

まして、日本の著作で外國語に譯されて市場に現はれるといふやうなことは、實にすくない。それが、一層世の一般の讀者をして、一冊の日本小説を手にしてこれが眞の日本であるとの結論を下さしめることとなるのである。勿論日本人の手で書かれたものは、たとへ醜怪見るに堪えないものでも飽まである『日本』を示してゐることは事實である。その點に於てこれは『日本』ではないとは抗辯できない。然し、モンマルトルの踊り場の、さてはアルセル・ルパンのアヴァンチュールの

現はしてゐる『佛蘭西』以上に、ほんとうの『佛蘭西』が、——ユーゴーとバルザックとパスカルとの『佛蘭西』が、ベルトルローとボアンカレとパストゥールとの『佛蘭西』が存在してゐるやうに、日本にも下らない『日本』のほか、ほんとうの『日本』が存在してゐるはずである。この自明の理を見ることなく、手當り次第に掴み取つた一冊の書冊を手にしてそれが日本の全部であるごとく考へられるといふことは、日本人にとつて頗る心外である。

とは言ふものの、この場合眞に心外なのは、實は彼等外國の一般讀者ではない。彼等はたゞ無知だといふだけである。何が眞に心外か？ それは言ふまでもなく、日本それ自體である。更に端的に言へば日本の文壇それ自體である。彼等は兎もすれば最早日本は歐米の模倣時代を脱したと言ひ今後は眞に日本固有の使命に到達せざるべからずと言つてゐる。更に勇ましい人達は、歐米の崩壊とこれに代るべき東洋文明の據頭をさへ高調しやうとしてゐる。これは勿論いい。然も彼等は更に一步進んで、かくて眞の日本を、——眞の東洋精神を、歐米——とのみ言はず廣く世界各國に公示せんとの當然の意氣ありやといふに、殆どこれを見るを得ないのである。否その意氣はあるかも知れないが、その用意は遺憾ながら全然これを缺如してゐると言つてもいいのである。世に影辨慶と

いふ言葉がある。これこそまぎれもない影辨慶でなくて何であらう……。

遠く祖國を離れ異郷の空に日を送る身にとつて、最も沁々と感ずることは、如何に日本が外國人のなかに知られること僅なるかといふことである。軍艦の噸數と陸軍の師團の數と狡智なる商人の多きことを以て、いつまでも日本の説明となして置かうといふならばいざ知らず、すくなくも日本持てる——さては東洋の持てる眞の美しき物大いなる物の存在を示さうといふほどの熱意が若し日本の人人にあるならば、方法はこれなきを憂ひまい。自分は、文壇の人々が相率るてその著作を外國に送り出さるる日の到來を鶴首して俟つものである。

○

有島氏の『或る女』を語つて、思はず筆が岐路に外れた。それ計りではない、讀みやうに依つては自分の上に書いた感想が、何となく『或る女』の翻譯の出現にケチでもつけるがごとくとられぬでもあるまい。然し自分の眞意はそれどころか『或る女』の出版に衷心から感謝してゐるのである。第一に『或る女』が日本現代文藝の爲めに氣を吐くものであるからである。第二には——これがむ

しる此際より重要である——日本の現代の女性を世界の『謎』から解放して呉れるからである。——

『日本』それ自體が世界の『謎』であることは上にも書いた通りである。軍艦と陸軍の兵力と小高い商人の存在とを除いては、日本は常に西洋にとつて不思議なる『謎』である。しかもその謎は、對象が日本の女性となるときには、全く針を立てる餘地もないほど完全なるものとなるのである。

この繰返し止まざる反覆をまたしてもはつきりと描き出して呉れた小説にエレン、フォレスト女史 Ellen Forest の『ユキサン』“Yuki-San” (バリーブロン書肆出版) といふのがある。つい一二ヶ月まへに店へ出た計りのものである。この『ユキサン』にとつて一層濃く示された日本の女性の『謎』が、有島氏の『或る女』に依つて惜しげもなく打破されたといふことにもなるのである。時機から言つても、『或る女』の上梓は頗るよかつた。……

『ユキサン』の著者は、その名の示すごとくフランス人ではなくてオランダの婦人である。最初オランダ語で著はし、ついで著者自らフランス語に直して出版するに到つたものであるといふ。しかもそのフランス語は、自分の見るところでは優に一家をなすものである。また、この書に描かれたる日本の事物に關する知識は豊富でもあり同時に正確でもある。篇中挿む所の日本語も、大部分

はそれぞれその所を得てゐる。勿論著者は身親しく日本にあつたことは推するに難くない。

『ユキサン』の筋を言ふとかうである。和蘭陀の若い娘が兩親と一緒に横濱に往つてゐる。彼女がわざわざ日本までやつて來たのは、日本の古典なり歴史なりを研究してその本來の精神を知らうといふが爲めであつた。彼女は先づ日本語を覺えるため、且つは親しく日本の若い娘たちに接しやうために山の手のフェリス女學校に入學する。そこでユキサンといふ若い娘と懇意になる。朝夕となくユキサンの家に入り出して、日本の生活といふものを漸次知つて來る。ユキサンとも可成り打ち融けた仲になる。——が喜怒哀樂を明瞭に現し總てを合理的に組み立てて行かうとするこのオランダ娘にとつては、悲しいのに依然微笑をたゞよはし、抵抗しなければならぬ場合に脆くも折れてしまふこのユキサンの心底は、謎といふほかはなかつた。二人の交情が進んで行けば行くほど、此謎は解きたいものとなつて行くのであつた。「ふたりは一緒に泣くことはない！」かうオランダ娘は二人の交情を考へて、その間に越えがたいギャップのあることを痛感する。

ユキサンに戀人がある。然しそれはクリスチャンなので到底兩親の許可を得る望みはなかつた。従つてユキサンはそれを一言も兩親にほめかしたことはなかつた。兩親は好縁と思ふある青年を

物色してそれをユキサンに見合はせることとする。ユキサンは微笑して見合ひに赴く。そしてすぐと話は極つた。が、繰返していふ、ユキサンには戀人があつた。結局ユキサンは、兩親に對する唯一の抗辯の意味で、この戀人と華嚴の瀧で死ぬことに極める。が、ユキサンは負傷はしたが、死に損つた。然し兩親は、ユキサンの負傷を、偶然の危禍といふことにして、そのまゝ見合ひした青年にかたづけれることにする。ユキサンは、依然微笑したまゝ、その青年にかたづいて行つた。

ユキサンの新家庭は幸福であつた。子供が生れた。今はユキサンは子供と夫とにかしづいてしづかな日を送つて行つた。

オランダ娘には、ユキサンの氣持なり行動なりは、到底理解し得ないことであつた。それは、そのまゝ、『西洋』對『東洋』といふ問題であつた。彼女は、また一方日本語の難しいのに疲れてゐた。これだけの努力をしてそれだけの効果があればであるが、彼女は日本の文藝や思想や、それだけの努力を拂ふ價値があるかどうかを怪しむはじめてゐた。支那や印度やには偉大なる思想もあり哲學もある。然し日本には？……殊に今日の日本の思想や文藝や、一切歐羅巴の模倣以外に何物もなかつた。要するに *Il ne reste pas grand' chose au Japon* (日本には大したものは残つてゐない)

いのである。彼女は、二ヶ年の滞在ののち、深い失望のなかに日本を離れることに極める。……『ユキサン』の一卷はかうした『日本』への幻滅で終つてゐる。

○

エレン・フロレスト女史に依れば日本の女性が歐羅巴人の眼に飽まで『謎』であるのは要するに彼等がその人間的の感情なり思想なりを慘酷に傳統の力で(女史はわざわざシキタリといふ日本語を入れてゐる)挫いてしまつてゐるからである。従つて、歐羅巴人から見れば、彼等には熱もなければ叫びもなく、單に形式一點張りの冷たい化物の様にも感ぜられる。勿論彼等がその日常生活を彩る器用な繊細な手藝なり心づかひなりは、一個の藝術品ともいふべきほど美しいものであつて、實に魅力的ではある。然し、それは取りも直さず彼等がその感情その本能を壓潰せられてゐる結果自然生じ來つたものに外ならない。——とかういふのである。

自分は、この日本女性觀が、どの程度まで當を得てゐるか否かを、今こゝで問題にしやうとは思はない。たゞこゝで言ひたいのは、日本の現代の女性には、かうした從來の傳統の力の下にその感

情なり思想なりを押し潰されないので、——否その傳統の力が強かつただけに一層激しく（歐羅巴邊よりも！）その傳統の力から解放されやうとしてゐる者がすくなくならず居ないであらうか？ といふことである。

有島氏の『或る女』が、現代の日本女性を描き出して果して餘蘊のないものであるか否かは別としても、尠くとも『ユキサン』の描いた『謎』の日本女性のほかに、かゝる『西洋風』な『現實的』な日本女性のタイプも嚴存するといふことを一般の歐羅巴の讀者に知らしめた點では、何と言つても、一つの效果であつたと言はざるを得まい。

○

世界の人間同志が互に手を繋ぎ合つて行かうといふのならば、お互の間に存在する誤解を芟除するのが先づ第一の義務である。例へその誤解が善意から來るにしても誤解は畢竟誤解たるを失はない。我々は相互に『謎』を霧散せしめるを要する。『幻影』を——さては『異國趣味』を、取り拂ふを要する。そして明るい太陽の下で相互に顔を——その美しい部分のみならずその醜い部分までも

はつきりと直視し合ふを要する。

それには、現代の日本文藝を海外に紹介するといふことが一番捷徑である。況んや、日本と違つて文藝を以て婦女子のさては文學青年の玩弄物とはせず、直にそれを以て其國の實情を知る羅針盤ともなさんとするアルベル・ミヨー氏のごとき人々を有する國柄に於いては、尙更のことであらう。

勿論、日本に於ける現代文藝はその題材の選び方なりその手法なりに、甚だしく歐羅巴の影響を持つてゐることは否定できない。従つて此等を読む歐羅巴邊の讀者は或は失望の語氣を洩らし、或は進んで多少輕蔑の感想を抱かないものとも限らない（これはこゝに言ふ失望、若くは輕蔑といふ意味からでないことは明かであるが、例へばクロードル氏のごときは何日ぞや『文藝時報』の記者に對して、日本の現代小説が實にチエホフの作品に類似してゐることを物語つてゐる。また昨年巴里で翻譯刊行された谷崎潤一郎氏の脚本『愛すればこそ』を読んだヴァイルドラック氏は、ひどくドストイフスキー張りて純粹に日本のものといふ氣がしないとの感想を自分に語つたことがある。然し、何から何までバタ臭くなりつゝ、ある日本の現代生活に於いて文藝だけが除外例となり得るわけのものではない。否文藝こそかゝる時代の先鋒としていい意味でも悪い意味でもバタ臭くなつてい

い筋合のものかも知れぬ。兎も角、日本を目して何日までもロチの『お菊夫人』の世界とハーンの『怪談』の舞臺だと考へてこれを特殊扱ひにしたがる歐米人に對し、ほんとうの日本の生活が、根本にはさして歐米邊とは變つてゐないといふことを知らせてやることは、今日の我々の最も大なる義務の一つと考へるのである。かくして、彼等の頭にこびりついてゐるロチとハーンを歌磨の日本を、ゲーシャ・ガールの日本を『バタフライ』の日本を、——『謎』と『幻影』の日本を拂ひ取つてやり、ほんとうの、ありまゝの我等の日本を示してやることのできるのである。さうした曉になつて我々は初めて安心して歐米人と顔を直面しながら語ることがができる。そこから理解と同感とが生れなければ、最早何處にも生れる所があるまい！

現代日本文藝の海外紹介。——自分の眼から見ればそれは決して閑事業ではないのである。——

(一九二七・七・二五)

ドビュッシーの音楽と其中に泛んでゐる『日本』

○
ロマン・ロランが名著『今日の音楽家』を讀んだことのある人は、そのなかの『クロード・ドビュッシー』なる一章の劈頭を飾つてゐる句を覚えてゐるに相違あるまい。——

『一九〇二年の四月三十日、パリに於ける「ペレアスとメリザンド」の初めての演出こそは、佛蘭西の音楽史上最も重大なる出来事の一つであつた……』

その『ペレアスとメリザンド』がオペラ・コミックの舞臺に現はれてから、二十五年の歲月が何日の間にか経つてしまつた。この四分の一世紀の間に、『ペレアス』の名は、佛蘭西の樂壇とのみは言ふまい、世界の樂壇のうへに、最早何人も消すことができぬ深い刻痕を刻み込むこととなつたのである。一九〇二年の出来事は、ロランの言ふ『佛蘭西の音楽史上の最も重大なる出来事』であつた

に止まらず、世界を通じての重大なる出来事の一つともなつたと言つてよかつたのである。今日の
繪畫が、例へばセザンヌを外にしては理解できないやうに、今日の音樂は『ペレアス』の作者を度
外しては到底これを想像することができないのである。ワグネルは十九世紀を閉ぢた人だと言へる
のなら、わがドビュシイこそはまことに二十世紀を開いた人なのであつた。

○

その『ペレアス』を自分がはじめてオペラ・コミックの舞臺で見たのは、忘れもしない今から六年
の昔一九二〇年の耶蘇降誕祭の當夜であつた。その折の自分の感想はと問はれるならば、正直の所
自分はある困惑を感じる。その感想を自分は當時の日記にも書き記して置いた。——『カルメン』
や『バタフライ』や『ラクメ』や『フォースト』や『アイダ』や『タイス』や、さてはワグネルの
諸作やと、とてもひどい違ひだ！ 同じオペラといふ區別のなかに入れてしまふには、あまりに何も
かも違ひ過ぎる。ワグネルの作品がオペラの『革命』だと言ふけれど、ドビュシイのこの作品から
見るならば、まだまだ一般のオペラの區分のなかに押し遣ることができやう。歐羅巴の土地を踏ん

てから未だ程もなかつた當時の自分にとつて、一般のオペラさへもが未だほんたうに會得できさう
もなかつた際に、——どうやら會得し得るやうな氣持が展げかゝつて來た際に、かうした變つた作
品にぶつたといふことは、何としても間違つかぬ譯には行かなかつた。

しかし、それでゐて、この變つた作品のなから響いて來る聲のなかに、自分の魂を靜かに撫
でるものがあるのを感じない譯には行かなかつた。自分に親しい、深い、慰めに充ちた、柔かな、
羞らひ氣味の聲が、そこから湧いて來るのを、覺えないではゐられなかつた。さうした聲は、到底
ほかのオペラや音樂やから、自分が受取つたことのないものであつた……

自分は、それから引續いて二度ほど、この『ペレアス』を見に出掛けた。その一度は、折柄在巴
中の音樂家の小松耕輔氏が一緒であつた。その折自分は、恰度前夜にワグネルの『トリスタンとイ
ソルデ』を聴いてゐた。幕間に、あのオペラ・コミックの歴史に充ちた明るい廊下を二人は肩を並
べながら、どんなにワグネルの『冗舌』と『誇張』とを蔑し、ドビュシイの『沈黙』と『自然』
とを讀へたことであつたらう。耶蘇降誕祭の夜自分が初めて『ペレアス』を見たときの困惑の感情
は、當時最早心から去つてしまつてゐた。自分が『ペレアス』に對し持つ感情は、たゞ親しみと深

い愛着とがある許りになつてゐた。

數年経つて再び渡佛した自分は、『ペレアス』の上演の機會をもとより缺かしはしなかつた。そのなかでも、最近に聴くことを得た『ペレアス』は、ペレアスに扮するメリー・ガードンの出演とゴローに扮するデュフランヌとアケルに扮するヴィーユとの出演に加へてオーケストラの指揮に當るためアンドレ・メッサジエの出演まであつたといふことは、二十數年前の『ペレアス』初演當時の重なる顔觸れをそのまゝ、そろへることができた歴史的の出來事であると言はれてゐるだけに、自分のこの作品に對する感銘の度は別して深からざるを得なかつた。『ペレアス』の音楽史上に於ける地位の確認、——と言ふよりも、單に自分の心に於けるその存在の確認だけでも、最早微動もしないものとなつてしまつたのであつた。

○

しかしながら自分は、こゝで今更らしく『ペレアス』の讃歌を書かうとしてゐるのではない。前記ロマン・ロランの『今日の音楽家』のなかの秀れた頁が物語つてゐる以上に、さては、アンド

レ・スュアレスが數年前『音楽評論』の特別號『ドビュッシイ號』に寄せた名文章が物語つてゐる以上に、この自分が何を附け加へることがあらう？ たゞ何人にとつても、ドビュッシイの作品を語るには、先づ第一にこの『ペレアス』を持ち出さなければなるまい。自分が、こゝに『ペレアス』を書き出した意圖も實にこれに他ならない。そこには、ドビュッシイの全部がある！——と、信じられるからに他ならない。

さて、この『ペレアス』が極東の一人に與へた何よりの感銘は、それが實に我等に、近いといふことであつた。『日本的』であると言へば語弊があるが、兎も角、一般の西洋音楽の持つ味ひとは杳かに相違し、むしろ我々日本人が傳統的に有するある藝術感と甚だ近逼してゐることを感じさせられるのであつた。即ちこれを端的に言へば、一般の西洋音楽が、その外面的、饒舌的、説明的、朗讀的である點に於いて日本の音楽の先天的な約束と全く相容れぬほどの相違があるのに、この『ペレアス』に現はれてゐる音楽の姿相と言ふものは、甚だしく内面的、沈黙的、暗示的、印象的であつて、その點むしろ我々の藝術感と一致することが多いと言はざるを得ないのである。『ペレアス』が、歐羅巴の音楽のうへに『革命』を持ち來したといふこと、——殊には、一九〇二年の春の初演

に當り觀客と批評家とから手ひどい嘲笑と罵詈の聲を浴びせられたといふことも、西洋音樂と關係の淺い我々日本人にとつては、むしろ意外の出來事のやうな氣さへ起らざるを得ぬのである。おそらく日本に生を享けたる者にして苟くも素直なる耳を持つ程のものなら、『ペレアス』は何等の『努力』を要せずして理解し得べく、これに反し、たとへば『トリスタン』を『ローエングリン』をさては『フォースト』を『リゴレット』を理解し得たりと自信する爲めには數段の『努力』を必要とすべし、と斷ずることは果して間違ひであらうか？……

○

しかしながら、『ペレアス』上演といふが如き機會を當分持ち得さうもない遠い極東の讀者に、長々と『ペレアス』に泛べる『日本』の姿を物語することは、氣の引けぬことでもない。よし、それならばもつと手軽な所に其實證を選み出さう。短かい洋琴曲、さては短かい歌曲、——さうしたものなら、ステージのうへのもを聴けないまでも、蓄音器のレコードから容易に聴くこともできやう。『チルドレンス・コーナ』。この名を持つ六つの洋琴曲は、ドビュッシーの曲のなかでもわけて人

々の耳に親しいものである。この簡素で、快活で、そのくせ靜かな無邪氣な小兒曲を、たとへばこの國の名洋琴家コルトー邊の手で入れられたレコードでも聴いて見るがいい。そのなかでも、わけて『コーリウ・オグス・ケーキ・ウォーク』の曲か、さては『小さな牧者』の曲かを聴いて見るがいい。そこに踊り微笑んでゐるものは、そのまゝ、我々日本の世界のものだ。さう言へば、『ケーキ・ウォーク』などは、そのまゝ、日本の琴のなつかしい音色すらある！何もこゝで他の音樂を引合に出さないでもいいが、試みに同じ子供の世界を描き出したシューマンの洋琴曲『子供の謝肉祭』を聴いて見るがいい。ドビュッシーの泛び上らせてゐる世界が、如何に我々のものであるかが、その二つを並べ聴く何人にも厭應なしに判つてくるであらう。——

それから、彼の數々の詩的な『プレリユード』。あの『沈める本寺』。あの『ミストレル』。あの『西風の見て來たもの』。あの『雪の上の足音』。あの『月の光』。その他何々。それ等の洋琴曲に盛られたる情景こそは、そのまゝ、時には一幅の匂やかなる浮世繪であり、一幅の寂びたる文人畫であり、さては和歌・俳句の持つ世界でもある。自分は、かくのごとき我々の感情に近き『西洋音樂』の存在は、これを他にして他に想像することすらも出來ない。

歌曲についても、再び贅する必要はあるまい……

ドビュッシーの亡くなったのは、戦争の終る年（一九一八年）の春のことである。恰度戦争中巴里の町に日を送つてゐた島崎藤村氏は、その當時書いたものなかで、彼ドビュッシーを親しくガヴオの樂堂で見た日のことを書いてゐる。それは何でも彼が自作を洋琴で演奏した折であつたらしい。

自分の記憶に間違ひがなければ、その日藤村氏は、折柄獨逸から巴里に逃れて來た河上肇及河田嗣郎の兩博士をこの音樂會へ連れて行つた。二人は、わけてこの年配の日本人が大方さうであるごとく矢張り『西洋音樂』が好きではなかつた。藤村氏は、氣乗りのしない二人を強て引張つて行つた形であつた。ところが、音樂が終つて外へ出てきたとき、この二人の博士が藤村氏に洩した言葉はと言へば、感動と感謝とに充ちたものであつた。——と、氏は書いてゐる。

それ許りではない。藤村氏は、その日ドビュッシーの洋琴をきながら自分はそゞろあの杵屋の長唄を思ひ出した、とすら書いてゐる。

『佛蘭西だより』のなかで、また『エトランジュ』のなかで、藤村氏が書き記してゐるかうした感想なりかうした出來事なりは、自分にとつて全くたゞごとではない。藤村氏が世の所謂音樂通でないだけ、氏のかうした感想は一しほに尊い。河上、河田兩氏が『西洋音樂』の嫌ひな人だけに、尙更その感動の事實には、大きな意味が含まれてゐる。自分は、安心してそれを援用して自分の論證の味方とすることができると。——

ドビュッシーの音樂が、如何にしてかくまで我々の心に近いのであらうか？ これをいま音樂美學（？）の立場から見に行つたならば、いろいろの説も立ち得るであらう。そのことは、勿論肝腎のことでもあり、また興味あることでもある。然し、自分はこゝでかうした廣い且つ深い問題を取扱はうとは思つてゐない。

たゞこゝで自分が問ひかけやうとするのは、これほど我々日本人の心に近い作品を産み出したド

ビラシイが、何かの機會で、我々の邦の音樂を聞いたことはなかつたであらうかどうかどうであらう、といふ謎である。勿論彼の音樂の形のうへに日本音樂の痕らしいものが存在してゐるとまでいふわけではない。(たとへば誰しも知るプチニの『バタフライ』のやうに。)たゞ、彼が何かの機會に、あの暗示的で印象的な三味線音樂なり琴なりを耳にしたことがあつて、——この國の印象派の畫家たちが北齋なり歌麿なりの版畫を眼にしたやうに、——その藝術制作のうへに強い暗示を受け取つたといふやうなことが、全然無かつたとも言へぬ氣がしてならないのである。

自分の抱いてゐるかくのごとき疑問は、おそらく彼の傳記を根氣よく涉獵して見れば、すぐ解決がつく所のものであるかも知れない。否それよりも、生前彼と親しかつたアンドレ・メツサジエなりシヤルル・ケ克蘭なりガブリエル・ピエルネなりの音樂者を訪ねて親しく訊ねて見たならば直ぐと判る所のものであるかも知れない。然し、或ひはドビュシイだけが深い心なかにおさめてゐる祕やかな經驗だけで他人にはそれまでは判らない事柄かも知れないといふ氣もする……

どつちみち、今までのところは、ドビュシイが日本の音樂を聞いたことがあつたか否かは、自分にとつて全く解き得ない謎である。

○

さうした謎が自分の頭のなかを今更らしく低迷してゐた時、實に意外の「發見」を自分はすることなつたのである。

今から二三ヶ月まへに巴里の有名な樂譜屋であるデューランといふ店から「一樂譜出版者の思ひ出』『Quelques Souvenirs d'un Editeur de musique』と題した本の第二卷が發賣された。著者はこの樂譜屋の主人で、一方相當秀れた音樂者でもあるジャック・デューランといふ人である。自分は昨年さくねんの末すえかに出たこの書の第一卷を偶然買つて讀んで見て、そこに書かれてゐる十九世紀末から二十世紀頭初にかけての數々の佛蘭西樂人及び樂壇の消息や出來事や興味深く感じたものだつた。第二卷が發賣されたことを知つた自分は、早速買ひに出掛けた。それは世界大戰の始まる數年すうねんまへから大戰を経てつい最近一九二四年にいたるまで約十五年に亙る手記しゆきよりなつてゐる。自分は目次を辿つて行つた。大戰中の思ひ出の章をずつと追つて行くと、『ドビュシイへの最後の訪問』といふ見出しが眼に付いた。自分は早速その本文に眼を通しはじめた。……

戦争中巴里の町にゐたドビュッシイの心の深い数々の悩みを語る筆者のペンは、感慨なしには讀むことができない。自分は稍々夢中にそのペンの跡を追つてゐた。その時である。思ひもかけぬ『發見』が、自分を待ちかまへてゐたのは！ 自分は、便宜上その『發見』をかくしてゐる文章の一節をそのまま、抜き書きしよう。――

『……自分はいまありありとドビュッシイの仕事部屋を眼に浮べる、それから、ボルト・ドーフイヌの近く、ボア・ド・ブローニユ通りにあつた彼のきれいな住居を眼に浮べる。彼が自分にあの美しい作品を、あの不思議なアルモニイを聴かしてくれたのは、實にこの部屋に於いてであつた。ドビュッシイは、こゝで、冬も夏のやうに草花にかこまれて仕事をしてゐた。それらの花で部屋が一杯になつてゐた。それこそ響きの源をなした色の交響樂であつた。この花の景色を思ひ浮べると自分の心のなかにボードレルの詩が泛ぶ。――

Les Sons et les Parfums tournent dans l'air du soir. (響きと匂ひとは暮方の空氣のなかにめぐる。)

この詩こそ、ドビュッシイが、その洋琴曲であるすばらしき『プレリユード』の一つにその題として置いたところのものである。

彼の部屋は、一番階下にあつて、窓が廣々としてゐるので光線が一杯にはいつた。その窓は、家敷の周圍を廻つてゐる庭に向いてゐた。ドビュッシイがああ数々の傑作を書いた大きなテーブルのうへには、すぐれた様式の日本美術品が一杯であつた。それらの美術品のなかでわけても彼の愛蔵物は、瀬戸物の臺であつた。彼はその臺を『おれの偶像 Fetichéだ』と言ひ、引越しの都度それを持つて歩くは勿論、それを眼中にしなければ仕事ができないとまで言つてゐた。彼は幾度自分に對して、田舎へ出掛けるとき大きなテーブルを持ち運ぶことが厄介であると、こぼしたことであらう。それに彼は、居を換へるのが嫌ひだつた。彼はまたその眞四角なピアノを愛してゐた。この樂器こそ、彼が選びぬいたところのものであつた。……この部屋のなかに、また自分は、すさまじく狂騰する浪を描いてゐる北齋の色刷が何枚もあつたのを想ひ浮べる。ドビュッシイは、この浪に對し、わけて特別な愛を持つてゐた。彼がああ『海』La Merを作曲しつゝあつた間、この北齋の浪に絶えずアンスピレされてゐた。彼は自分たちに對し、この作品を印刷に附するとき、表紙にこの北齋の浪を

入れて貰ひたいと頼んだものであつた。

あゝ、これら一切のことは遠い昔のことになつてしまつた！ 然しその時の流れもこれを鎮めることができぬふかい感動をもて、自分の思ひをこゝに移さう……』『一樂譜出版者の思ひ出』九一—九三頁)

ドビュッシーの音楽のなかに、日本音楽の姿を探さうとしてゐた自分は、思ひもかけずこの偉大なる樂聖のなかに日本の美術がひそんでゐたことを知つたのである。自分の其折の驚ろきとまた歡びとは、この文章を讀んで呉れる人々の推測にまかせる。兎も角、ドビュッシーの音楽が、我々極東からはるばると遣つて來た旅人の胸にかうも沁みてゐたといふことは、決して偶然といふ計りではなかつたのである。彼の心のなかに、最早何人も疑ふことのできないはつきりとした『日本』の姿が存在してゐたのだ。自分の心に宿つて解けようともしなかつた謎が、今やそれとなく解けかからうとしてゐるとさへ感ぜずにはゐられないのだつた。——

○

然かも偶然は、この『發見』に次に更に第二の『發見』を自分に齎すに到つた。それは、この五月發行せられた雑誌『音樂評論』Revue musicale の特別號『クロード・ドビュッシーの青年時代』La Jeunesse de Claude Debussy を閲讀して行く際ゆくりなく見出したある章句であつた。

巴里の大管絃樂團の一つであるコンセル・コロンヌの指揮者でもあり、且數々の殉情的な名曲の作者でもあるガブリエル・ピエルネ Gabriel Pierné 氏の名は、おそらく佛蘭西現代の音楽を口にするほどのものには、洩らすを得ない所のものである。このピエルネ氏はドビュッシーとは幼時からの友だちであつた。ほんの二頁ほどに過ぎないが、このピエルネ氏は、前記の『音樂評論』の特別號の爲めにドビュッシーの年少時代の追想を寄せてゐるのだつた。

恰度わが『ペレアス』の作者が、羅馬賞を貰つて永遠の都にその若い日を送ることになつた折、ピエルネ氏自身も同じ土地に日を送つてゐたのであつた。ドビュッシーのこの羅馬到着は、一八八五年のことであるから、恰度二十二三歳のまだほんの若い青春時代のことである。この羅馬滯

在時代の若いドビュッシーをピエルネ氏はどう見たか？ それはほんの數行にしか書き現はされてる
ない。――

『……ヴァイラ・メデシスの建物のなかでお互集つて住んでゐたのではあつたが、彼ドビュッシーと
その友人たちとの間にはほんたうの親しさといふものが存在してゐなかつた。彼はひとりぼつちで
あつて、我々と一緒になることを避けてゐた。彼は絶えず外へ出てゐた。そして、古物屋を歩き廻
つては、日本の小さな骨董品をうんと買い集めてゐた。この日本の小さな美術品に、彼は夢中にな
つてゐた。食事のとき以外には、人々は彼の姿を見かけることができなかった……』〔音楽評論〕
五月號二頁)

これが『發見』でなくて何であらう。自分はすでにデューラン氏によつてドビュッシーがその晩
年まで――五十六歳で亡くなるその間際まで日本の美術品を愛好して措かなかつた事柄を知ること
ができた。然るに今はピエルネ氏によつて、彼が二十二三歳のうら若き日にはや日本の美術に、(彼

の周囲の音楽の友だちとの友情にも増して、否、おそろく羅馬そのものにも増して！)心を牽かれて
ゐたといふ事實を知ることができたのである。この二つの記事からすくなくとも我々は、ドビュッ
シーが三十餘年に亙るその制作期間、日本美術に對する愛好の念が終始熾んであつたと、判斷する
を躊躇しないのである。否、若し我々が一層大膽なる推測をなす勇氣があるならば、ドビュッシーは
その一生を通じて最も愛したるものは(彼自身の音楽は勿論これを推し)日本美術品であつたとす
ら結論し得るであらう。いづれにもせよ、彼にとつて日本の美術品は決して氣まぐれな好奇心の對
象ではなかつたことは、何人もこれを認むるを憚るまい。それだけに彼の作品のなかにこの『日本』
の姿がそれとなく泛んでゐることがむしろ當然であることも亦敢へて疑ひはあるまい。

○
それにしても世に人の心の働きばかり不思議なるはない。北齋があゝの浪の畫を描くとき、どうし
て彼に、他日佛蘭西の樂人がその畫からまばゆき傑作を産みいだすよすがを探し求めることがあら
うと氣が付かうぞ。名もない極東の工匠の手になつた陶器の臺が、それからそれへと無數の人の手

を経て思ひがけなくこの香かな土地の樂聖の手に渡り、朝夕この人の眼にあやされながら、その制作を鼓舞するつとめをなすに到つたとは、よし神様でもどうして豫知できやうぞ。ドビュッシーの出現は、近代音樂の革命であると言はれてゐる。すくなくもワグネルを代表者とした獨逸音樂の『侵入』に對する佛蘭西音樂の『獨立』の聲だとせられてゐる。この大きな事業のうちに、——『日本』のルヌのすさまじい戰場のかげに優しいコクリゴの花が微風にそよいでゐるやうに、——『日本』の小さな優しい姿が支へてゐたのだ。世にこれほどの不思議が意味のふかさが、どこにあらうぞ！『藝術に國境なし』といふ言葉は、この場合、餘りに味がなさ過ぎる。我々はたゞあのカムパニラの暮方に形は見えずして響き合ふ鐘の音のやうな人の心の不思議に驚ろきたい。(一九二六・六一二)

佛蘭西の音樂時代

——ニツチエの見たる『カルメン』——

○
(千九百十五年、——と言へばかの世界大戰が勃發して歐羅巴の天地が砲煙につまられたその翌年に當るわけであるが、その年の三月、佛蘭西はリオンの町で音樂に關する講演會が開かれたことがあつた。その講演會は特に『佛蘭西音樂の爲めに』といふ名を冠せられてゐた。言ふまでもなく、砲煙の間に獨逸と相見ることになつて以來、火のごとき熱情をもつて、この音樂の方面に於ても自發的に自國のものを愛護し育成し進んでは廣く世界に喧傳せしめやうとする決心が佛蘭西の上下に充ち溢れてゐた。このリオンの講演會もさうした決心の一つの現はれてあつたことは勿論であつた。

この講演會は三月から六月に到るまでの間に十二回に亙る講演を續けたのであつたが、その最初の講演者は、リオン法科大學のユヴラン教授であつて、氏は『佛蘭西音樂と獨逸音樂』といふ總括的な題の下に、かの獨逸の哲人フリードリッヒ・ニッチェに依りて裁かれたるワグナーとビゼーとの音樂なるものに付いて最も精彩ある紹介と解説とを爲したのである。

自分はこゝに當時の資料に依つて、同教授の講演の一端をこゝに略説することにしたい。尤もその講演は、前記したやうに砲煙の立ち罩むる空の下で試みられたものであるだけにそのなかに勢ひ過度にわたると思はれるほどの愛國心の沸騰を見ないわけでもないが、それとても決して事實それ自身までも曲けて語るといふやうなことは、幸にしてこれを見ることができない。而してこの一席の講演に依つて我等は略正確に佛蘭西音樂の精髓を知り、併せてわが『カルメン』の作者の佛蘭西音樂史に於ける地位、並びに彼の音樂の特質なるものをも會得することができるやうに思はれる。これ自分をして先づ、以下に書き記すこの講演の抄譯を以てわが愛するビゼーの藝術の研究の一助となし、併せて彼を産み出した佛蘭西音樂の精華をば紹介する一助ともなさんと思はしめたわけである。

尙序乍らこの講演のなかに説かれてあるが如く、ニッチェがはじめて伊太利はジェノアの町にビゼーの『カルメン』を聴いたエピソードと、それ以來彼の口から續けさまに洩れるに到つたビゼーの藝術に對する深い讃頌の言葉については、敢てこのユヴラン教授を俟たずとも、ビゼーに關する總ゆる批評、紹介のなかに必ず現はれる所であると言つても差支へはないほどに彼地に於ては周知のことである。殊に、自分が獨逸を旅してゐた砌、一夜ドレスデンのオペルンハウスで『カルメン』を見た時なぞはそのプログラムのなかにまで慇懃このエピソードが書かれてあつたのを見て、それが獨逸であるだけに、一しほの感興を覺えたことすらもあつた位である。また、嚴正無比容易に世の毀譽の言葉に耳を傾けないあの學究的なジエ・コムバリユの大著『音樂史』第三卷のなかに於ても、このニッチェのビゼーに對する言葉をば最も權威あり適確なる評言の一つとして採用してゐるのを見ることが能きる。

何れにせよ、ビゼーの音樂を愛するものにとつては、このニッチェのエピソードと、その評言とは到底看過することができない所のものであると言つていい。而して、以下に略述せんとするユヴラン教授の講演は、實にこの事實を最も剴切に最も周到に取扱つたものとして、何人も

更めて啓示さるることが決して尠少ではないであらう。

○

『カルメン』の作者ジョルジュ・ビゼーに對し、本國たる佛蘭西に於て幾多の傑れたる批評若くは讚頌の言葉があることは、言ふまでもないことである。然しながら、是等の數多い傑れた言葉も、聽く者に依つては、——この場合即ち佛蘭西以外に血を享けたる者に依つては、兎もすればそれが無意識の間にか若くは故意にか身最眞の色彩を帯びてゐるかのやうに感じられるものである。従つて、自分（ユヴラン教授、以下これに倣ふ）は、かゝる誤解を些かにても生ぜしめんことを避けるため、こゝに最も適當なる國土の人を裁判官として連れ來ることにしやうと思ふ。その最も適當なる國土の人といふのは、即ち獨逸のフリードリッヒ・ニッチェその人である。彼ニッチェが單純に獨逸人といふのみならばこの際左して裁判官としての榮譽を携はせるわけには行かないかも知れない。然しながら、彼こそ實に第十九世紀に於ける獨逸の最も代表的なる且最も偉大なる哲學者として獨逸が今日全世界に對して誇つてゐる所の巨人である。そのみではない、彼は樂聖リヒャルト・ワグ

ナーの斷金の友として、彼の音樂の爲めには當時全力を擧げてその紹介と辯護と解嘲とに努め、ワグナーの偉大を認めざる世間に對して敢然挑戰するのを辭さなかつたほどの經歷を有した人でもあつた。かくのごとき生國と資格と經歷とを有する人の眼に、佛蘭西の音樂なるものが如何に映つたか、わがジョルジュ・ビゼーの音樂が如何に映つたかを調べて見るにも優して、世に『公平なる批評』はあり得ない。若しこの人にして佛蘭西音樂の長處を、またビゼーの音樂の美點を認めたとしたならば、我々は安んじてその讚頌の言葉に全價値を置いても差支へはないこと、思はれる。自分が、こゝに特に佛蘭西音樂——わけてビゼーについてのニッチェの批評の内容を語らんとしたのは、實にこの意味に出でたに他ならない。

やう。

ニッチェがバーゼルの大學の教職に就いたのは二十四歳の時であつたが、その折にワグナーは、すぐそばのトリールプシエンの隱所に棲つてゐた。カートル・カントンの湖水の側である。この時代のワグナーは恰かも嵐をくぐつて漸く港に着いた船のやうに平和と豊饒とに充ち満ちた楽しい日を送

つてゐたと言つてもよかつた。リストの娘であり、フォン・ビュロー伯の夫人であつたコジマをば自分のものとすることができたのも此頃であつた。彼はこの閑寂と幸福を楽しみながら、大作『ニールンゲンの指環』を作曲にかゝつてゐた。

ニッチェはこのトリブッシエンの親しい客となつて、忘れがたい楽しい日の数々をばワグナー夫妻と俱に過したのであつた。ずつとあとになつて（それはワグナーと絶交することになつてからのことだが）彼はその『この人を見よ』の著書のなかでかう書いてゐるのを見ても、その折の二人の濃やかな交情のことが判るであらう。即ち、——「自分は、他の数多い人間的交渉については大安賣をしてもいい。然しながら、あのトリブッシエンの月日だけは、什麼價格でも自分の生涯から賣り放さうとは思はない。あの信頼の月日、あの静かな月日、あのすばらしい會合の月日、そしてあの深い眼尖……」とかう書いてゐる。

二人は飽きることなく語り續けては、お互の思想が益々近く接してゐることをば確めるのであつた。未來の藝術、單一なる藝術に對する綜合せる藝術、音楽と詩と劇と造形美術との渾然と融和する新らしき藝術、——かくのごとき藝術に對する新信念が、同時にその胸を貫いて流れ行くこと

をお互に感じ合つた。かゝる藝術こそ實にその根を希臘の土壤のなかに持つてゐるもの、従つて、その希臘の後繼者たる獨逸の土壤の上に美はしくも咲き出づべきものといふ信念を、二人は軌を一にして抱いたのであつた。恰かもエスキロスかピンダロスかのごとくに、ワグナーは己れの民族と世界とを祝福するに此かの躊躇もしなかつた。一方またニッチェはニッチェで、『悲劇の發生』なる著書に手を着けはじめやうとして、ゲルマン民族こそ希臘民族の文化の後繼者に他ならぬことを心から喜びとし誇りとして感じてゐたのであつた。あゝ、光は嵐について現はれる！ この北歐の空の下の霧を通して眩しい太陽の光が顔へ出す！ おゝ、何といふ奇蹟！

かうして『獨逸人』たることを最も幸福なりと信じてゐたニッチェの照り輝いてゐる心のなかに、ある雲翳が暗い影を投げるやうになつたのもまたこの時期であつたことは、興味深い。その一つは、書物に依る経験であつた。即ち、ある夕、コジマ・ワグナー夫人の手から、讀んで見よとて佛蘭西語のまゝのモンテーギユの著作を貸し與へられたことがある。更にある時は、スタンダールの著作を與へられたこともあつた。彼は其處には大して注意を向けるといふつもりもなかつたが、自然に心に宿つた印象は強いものがあつた。獨逸以外の、——即ち彼には無價値の國土とも見える佛蘭西

といふ所にかくも美しくいいものが存在してゐたのだ！……書物のほかには、更に事物の経験があつた。即ち、千八百年の普魯戦争がそれだつた。普魯西の戦勝は、其國人を狂喜せしめたことは言ふまでもない。然るに従來獨逸人たることを何よりも誇りとしてゐた彼ニツチェは今は反對に戦敗國佛蘭西に對して限りのない同情が浮んで來るのを禁めることができなかつた。當時彼が友人のゲルズドルフに對して書き送つた書翰のなかの一節にかうした文句がある。——「まつたく、自分は近代の普魯西なるものは、文化に對して頗る危険のものであると信じられる」。更に後に到つて、彼は普魯西兵に依る巴里の火事のことを耳にして長嘆して言つた——「戦争。わが最も深き惱み。あゝ、ルーヴルの火事」

戦争が済み、平和が戻つて來た。ニツチェが世の中を見る眼は變つて來た。今までとは變る眼で新らしいに四圍を眺め廻したのであつた。彼は今更らしくワグナーを眺めた。が、ワグナーは依然として幸福なる満足に充ちてゐて、些かも變つた所が見られなかつた。ワグナーは、あだかも傷ける獅子を足蹴にでもするかのやうに、今や巴里の降服について、ある新曲を創り始めてゐる所であつた。彼の樂才を一向に認めて呉れないその巴里の降服を——然しながら心の優しいニツチェには、

かゝることが一つの惡としか感じられなかつた。かうして、二人の間には、眼に見えずして、漸次にある障壁が生じて來たのであつた。然しながら、ニツチェはワグナーに對しても、また何人に對してもかゝることを告げやうとはしなかつた。現にその翌年（七十一年）に現はれた『悲劇の發生』のなかに於ても彼はワグナーに對して變らぬ熱情の證をさげてゐるのを見ても判る。

やがて、ワグナーは所謂崇拜者の群から勧めらるるまゝに、心には無限の計畫と希望とを抱きながらトリブツシエンの閑居を去つてバイロイトへと移ることにした。彼の心には最早過去にありしごとき争闘もなくまた貧困もなかつた。野心、名譽、光榮、——彼はひたすらにその燦光の宮殿へと急ぐばかりは餘念もなかつたのである。

それを心に慘ましく寂しく感じながら、ニツチェは孤り後に残つてゐたわけであつた。恰度ワグナー夫妻がトリブツシエンを立つ前日のこと、ニツチェは二人に別辭を述べんが爲めバーゼルから遣つて行つた。そして、今はがらんとしてゐる大きな部屋のなかに残つてゐる大きなピアノに向ひ限りなき心の悲しみを即興曲として弾き出した。ワグナー夫妻も引越の仕事から手を離して、その悲曲に聲も無く耳傾けた。そして、その曲のなかにありありと過去の苦しみの聲をば聴き知つたのであ

つた。されどやがて最後のピアノの音とともに沈黙が三人の上へ落ちて来た時に、あ、昔の友情も最早消えはてたことを、それとなく誰しも感じたといふ……。

事實ニツチェはこれを限りて、以前のごときワグナーをば再びバイロイトに於て見ることは無くなつてしまつた。あの希臘の理想を越えてゐた高貴な超俗的な藝術家は失せてしまつて、今バイロイトにあるものは、たゞ生活の爲めに闘ふてゐる強健なる職人に過ぎないのではないか！ 併しながらニツチェはワグナーに對するかゝる觀察が一つの誤りであるとして、その幻滅したる索漠たる心を幾度轉廻しやうと努めたか知れなかつた。この間のニツチェの心の悩み苦しみを知らうと思ふものはその書翰を讀むに若くはない。それは、まことに最上の戀愛悲劇のみが持つ烈しき心のドラマの展開であると言へやう。愛と憎みとの争ひ、——その苦しみは渦を巻いてニツチェを苦しめた。

ニツチェの二十時代に書いたワグナーに關する論片は上の心の悩みをそのまゝに反映してゐる。たとへば、『獨逸人に宣告す』といふ一文のなかでは熱烈なる調子を以てワグナーの爲めに世俗の蒙を啓くに努めてゐる。かと思ふと一方、内心に於ては密に彼の作品が『根本的に無秩序で、喘息的で、無信仰的で、貪慾で、畸形で、且高貴さを缺いた、……要するに退屈な』ものではないか知ら

といふことを自語しないではゐられなかつた。

然しながら決定的の危機は遂に來た。彼はかう書いてゐる。——『自分はこゝから離れやう。こゝに止まつてゐるといふことは餘りに莫迦げてゐる。……何處へでもいゝ、兎に角こゝを離れてしまはう。こゝにあるものは總て自分には堪へられない……』かうして、彼は實際にバイロイトを去つてしまつた。間も無く公刊した彼の『餘りにも人間的な』といふ著書のなかにはこの苦々しい興褪めたる心持を明かに描き出してゐる。ワグナーも、それを忽ちに感じ、諒解した。

千八百七十七年、ニツチェはバイロイトから——ワグナーから永久に別れてしまつた。同時に、それは叙情詩にも、藝術にも別れることであつた。すくなくとも彼はさうした氣持であつたのだつた。

ニツチェの心は暗澹たる夜にも比すべきものであつた。否、單に心のみではなかつた。七十九年頃には彼の肉體の健康は極度に傷められて、全身麻痺の病状さへも呈するに到つたほどであつた。かうした絶えまない肉體上の苦惱。それに孤獨。友情も、仕事も、音楽も消失してしまつた生活。……彼はとうとうバーゼルの教職も抛つてしまつて、光りと沈黙とを探すが爲めに、南の國への旅に

出ることにした。絶望が、この遁れ道を彼に訓へて呉れたわけであつた。

まったく彼には伊太利が新しい力をもつて眼のまへに現出したやうなものであつた。従来獨逸の至上を信じてゐた彼にとつては、伊太利なるものは殆んど眼中になかつた邦土であると言つてもよかつたのだ。その伊太利が今や、傷いた彼の心と眼とに向つて彼の嘗て知らなかつた爽やかな優しい薬をば注ぎ掛けやうとしてゐるのであつた。彼はアルプの高峰から地中海の岸邊に亘つて、思ふまゝなる漂ひの旅を續けた。夏は大概エンガーデインのシルス・マリアで目を送つた。そのほかは、リヴィラの海岸で、——ジノアで、ラッパロで、ルタで、サン・レモで、マントンで、さてはニステ、目を送つた。彼は深い眼光をもつて、地中海の住民が如何に明敏であり、また如何に自然であり、人生そのものに對して如何に朗らかな心を抱いてゐるかを、聾と諒解することができた。

彼の健康は必ずしも善い方にはならなかつたが、その苦しみは彼の意固地な意志を柔らげるやうになり、嘗てない靜穩な心を抱き得るやうになつたのも、またこの『地中海』の色と光との齎らした効果と言はねばならなかつた。彼は自分の運命を愛せんとするまでに到つたのであつた。Amor fati——この言葉は、彼のモットーともなつた。

恰度かうした折であつた。ジノアの町に滞在してゐた彼はある夕方のこと、不圖して劇場の入口をくぐつて見た。それは千八百八十一年のことであつた。その劇場では、ある佛蘭西の作品を上演してゐた。——が、その作品の名もまたその作者の名も嘗て彼の聽いたことがない所のものであつた。

その作品は、その作者は何といふ名であつたか？ またそれを見た時の彼の感想は如何であつたか？ それを彼は、弟子なるペーテル・ガストに宛てた手紙のなかでかう言つてゐる。——『すてきだ、君、僕はすばらしい發見をした。ジョルジュ・ビゼー（一體どんな男だらう？）の歌劇で、『カルメン』といふのだ。それはメリメの小説から來たもので、精神的な、強力な、所々頗る感動的なものだ。ワグナーも路を迷はせることが能きなかつた眞の佛蘭西の天才だ、ベルリオールへの純粹なる弟子だ……僕はこの『カルメン』が現在存在してゐる總ての歌劇のうちで最もすぐれてゐるやうにさへ感じられる……』

この異常な感動の言葉を見て、或は人はニツチエの氣紛れを思ひ浮べるかも知れない。が、時とともに日とともに、彼のこの第一印象は確められて行くのであつた。現に、千八百八十八年、即ち彼

が初めて『カルメン』を見た年から七年も経つて、尙かうした言葉をば書き記してゐるのを人々が見ることが能きる。

『この頃、このビゼーの音楽は、自分に對して、自分が嘗て知らなかつた感覺を興へて呉れる。それは自分をして自分自身から飛躍させて、解説させて呉れる。自分をして、何となく高い高い所にあるやうな氣を起さして呉れる。自分を強く強くして呉れるやうな氣を起さして呉れる。て、自分はきまつてその音楽を聴いた晩（もう續けさまに四回も『カルメン』を聴いてゐるが）の翌くる朝などは、精力と發見物とに心が充ち溢れてゐるやうに感じる。まつたくすさまじい作品ではないか。恰かもずつと自然な世界のなかに水泳ぎでもしてゐるやうな氣を起させられる……。』まつたくニッチェはビゼーを通して、はじめて今まで探し廻つてゐた自然といふものを握ることができたのだつた。純なる自然、聖なる自然、それこそは、到底ワグナーの音楽のなかに求め得べからざるもの、そして、それこそは佛蘭西音楽の特質に他ならぬものであつたのだ——黄橙のはげしい匂ひとともに拉丁の土壤から立ちのぼつてゐるこの音楽、それは、——その純らからて熱烈な『聲』は、あのバイロイトの人工的な『聲』と較べて、何といふ大きな差異であることか。それこそは、直ちに、その土壤を、自然を、生命を現はしてゐる所のものであつたのだ！ニッチェは、かうして、こゝに初めて、眞の生命の音楽を知ることができたのである。

然しながら、謙抑なデリケートな性情を裏けて來たニッチェにとつては、かゝる告白を直ちに公表することは躊躇せられた。ワグナーとの交情が切れてから十二年も経つたにも拘はらず、尙且彼はさうした涙の多い柔しい性情の故に、公には容易に非難と失望との聲を洩す氣にはなれなかつた。然しながら、終に、あらゆる障礙物は除かれなければならぬといふことを痛感すべき日が彼に遣つて來た。ニッチェは、世を辭すべきまへに果さざる可からざる義務を、——己れの良心と、世界とに對して爲さざる可からざる義務を、今更のごとく感じた。彼は、遂に、決心して立つた。一步一步彼は熱情を増しながら、『僞神』ニッチェに對しての苦き戦闘をば開始した。先づ出たのが『ワグナー事件』のパンフレットであつた。ついで、ワグナーの作品『神々の黄昏』を皮肉にもぢつた『偶像の黄昏』といふ名のパンフレットを出した。最後には、『ニッチェ對ワグナー』と題する文集と『この人を見よ』といふ告白とを出した。これ等の著書が公刊されて間もなく、彼は恰も良心と世界とに對してその義務を果し盡したかのごとく、今は死の手にと捉はるるに到つたのである。詩人

ハイブリット・ハイネの言葉を借りるならば、彼ニッチェは、ワグナーから、獨逸から解放されるとともに、今度は最終の苦惱にと捉へられてしまつたのである。千九百年の八月二十五日、彼はこの世を去つた。

上に書き記したエピソードは、極めて簡單な心のドラマの現はれに過ぎないけれど、然し最も深き暗示に充ちてゐる、と言つていい。我々はこのエピソードから十分の教を引き出さなくてはならない。然るに、從來ニッチェに對してある偏見を有してゐる人達が、彼のかうした事實、——佛蘭西音樂の美を讃頌し、ビゼーの爲めにワグナーをも捨つるに到つたその事實を強ひて諒解し難いやうにとつてゐることは甚だ奇怪の沙汰であると言はねばならぬ。ある者は、ニッチェの變説なるものを説明するに、極めて些細な陋劣な理由をもつてゐる。彼は嫌惡すべき性格を持つてゐて、ワグナーがあゝ世間的に成功したのを嫉んでゐたのだなどとも言ふ。また或者は、彼がゴジマ・ワグナーに對して密かに戀慕の心を抱いてゐたなどとも言ふ。また或者は、彼は全身麻痺の病患に襲はれてからは、頭腦に變調を來して、所謂『全價値の轉倒』を生ずるに至つたのだなどとも言ふ。然しながら、これ等の説が殆んど一笑にも値しないことは、容易に説き明すことができる、即ち、これ

佛蘭西の音樂時代

——ニッチェの見たる『カルメン』——

(千九百十五年、——と言へばかの世界大戰が勃發して歐羅巴の天地が砲煙につ、まれたその翌年に當るわけであるが、その年の三月、佛蘭西はリオンの町で音樂に關する講演會が開かれたことがあつた。その講演會は特に『佛蘭西音樂の爲めに』といふ名を冠せられてゐた。言ふまでもなく、砲煙の間に獨逸と相見ることになつて以來、火のごとき熱情をもつて、この音樂の方面に於ても自發的に自國のものを愛護し育成し進んでは廣く世界に喧傳せしめやうとする決心が佛蘭西の上下に充ち溢れてゐた。このリオンの講演會もさうした決心の一つの現はれてあつたことは勿論であつた。

この講演會は三月から六月に到るまでの間に十二回に亙る講演を續けたのであつたが、その最初の講演者は、リオン法科大學のユヴラン教授であつて、氏は『佛蘭西音樂と獨逸音樂』といふ總括的な題の下にかの獨逸の哲人フリードリッヒ・ニツチェに依りて裁かれたるワグナーとビゼーとの音樂なるものに付いて最も精彩ある紹介と解説とを爲したのである。

自分はこゝに當時の資料に依つて、同教授の講演の一端をこゝに略説することにしたい。尤もその講演は、前記したやうに砲煙の立ち罩むる空の下で試みられたものであるだけにそのなかに勢ひ過度にわたると思はれるほどの愛國心の沸騰を見ないわけでもないが、それとても決して事實それ自身までも曲けて語るといふやうなことは、幸にしてこれを見るのができない。而してこの一席の講演に依つて我等は略正確に佛蘭西音樂の精髓を知り、併せてわが『カルメン』の作者の佛蘭西音樂史に於ける地位、並びに彼の音樂の特質なるものをも會得するこゝとができるやうに思はれる。これ自分をして先づ、以下に書き記すこの講演の抄譯を以てわが愛するビゼーの藝術の研究の一助となし、併せて彼を産み出した佛蘭西音樂の精華をば紹介する一助ともなさんと思はしめたわけである。

尙序乍らこの講演のなかに説かれてあるが如く、ニツチェがはじめて伊太利はジェノアの町にビゼーの『カルメン』を聞いたエピソードと、それ以來彼の口から續けさまに洩れるに到つたビゼーの藝術に對する深い讚頌の言葉とについては、敢てこのユヴラン教授を俟たずとも、ビゼーに關する總ゆる批評、紹介のなかには必ず現はれる所であると言つても差支へはないほどに彼地に於ては周知のことである。殊に、自分が獨逸を旅してゐた砌、一夜ドレスデンのオペルンハウスで『カルメン』を見た時なぞはそのプログラムのなかにまで態々このエピソードが書かれてあつたのを見て、それが獨逸であるだけに、一しほの感興を覺えたことすらもあつた位である。また、嚴正無比容易に世の毀譽の言葉に耳を傾けないあの學究的なジェ・コムバリユの大著『音樂史』第三卷のなかに於ても、このニツチェのビゼーに對する言葉をば最も權威あり適確なる評言の一つとして採用してゐるのを見ることが能きる。

何れにせよ、ビゼーの音樂を愛するものにとつては、このニツチェのエピソードと、その評言とは到底看過することができない所のものであると言つていゝ。而して、以下に略述せんとするユヴラン教授の講演は、實にこの事實を最も剴切に最も周到に取扱つたものとして、何人も

更めて啓示さるることが決して尠少ではないであらう。

「カルメン」の作者ジョルジュ・ビゼーに對し、本國たるフランスに於て幾多の傑れたる批評若くは讚頌の言葉があることは、言ふまでもないことである。然しながら、是等の數多い傑れた言葉も、聽く者に依つては、——この場合即ちフランス以外に血を享けたる者に依つては、兎もすればそれが無意識の間にか若くは故意にか身最眞の色彩を帯びてゐるかのやうに感じられるものである。従つて、自分（ユヴァン教授、以下これに倣ふ）は、かゝる誤解を些かにても生ぜしめんことを避けるため、こゝに最も適當なる國土の人を裁判官として連れ來ることにしやうと思ふ。その最も適當なる國土の人といふのは、即ち獨逸のフリードリッヒ・ニッチェその人である。彼ニッチェが單純に獨逸人といふのみならばこの際左して裁判官としての榮譽を携はせるわけには行かないかも知れない。然しながら、彼こそ實に第十九世紀に於ける獨逸の最も代表的なる且最も偉大なる哲學者として獨逸が今日全世界に對して誇つてゐる所の巨人である。そのみではない、彼は樂聖リヒアルド・ワグ

ナーの斷金の友として、彼の音樂の爲めには當時全力を擧げてその紹介と辯護と解嘲とに努め、ワグナーの偉大を認めざる世間に對して敢然挑戰するのを辭さなかつたほどの經歷を有した人でもあつた。かくのごとき生國と資格と經歷とを有する人の眼に、フランスの音樂なるものが如何に映つたか、わがジョルジュ・ビゼーの音樂が如何に映つたかを檢べて見るにも優して、世に「公平なる批評」はあり得ない。若しこの人にしてフランス音樂の長處を、またビゼーの音樂の美點を認めたとしたならば、我々は安んじてその讚頌の言葉に全價値を置いても差支へはないこと、思はれる。自分が、こゝに特にフランス音樂——わけてビゼーについてのニッチェの批評の内容を語らんとしたのは、實にこの意味に出でたに他ならない。自分は論旨の徹底を圖る爲めに先づベンをニッチェとワグナーとの美しくい交情から起すことにしやう。

ニッチェがバーゼルの大學の教職に就いたのは二十四歳の時であつたが、その折にワグナーは、すぐそばのトリブッセンの隱所に棲つてゐた。カートル・カントンの湖水の側である。この時代のワグナーは恰かも嵐をくぐつて漸く港に着いた船のやうに平和と豊饒とに充ち満ちた楽しい日を送

つてゐたと言つてもよかつた。リストの娘であり、フォン・ビュロー伯の夫人であつたコジマをば自分のものとするのができたのも此頃であつた。彼はこの閑寂と幸福を樂しみながら、大作『ニールンゲンの指環』を作曲にかゝつてゐた。

ニッチェはこのトリブッシエンの親しい客となつて、忘れがたい楽しい日の數々をばワグナー夫妻と俱に過したのであつた。ずつとあとになつて（それはワグナーと絶交することになつてからのことだが）彼はその『この人を見よ』の著書のなかでかう書いてゐるのを見ても、その折の二人の濃やかな交情のことが判るであらう。即ち、——「自分は、他の數多い人間的交渉については大安賣をしてもいい。然しながら、あのトリブッシエンの月日だけは、什麼價格でも自分の生涯から賣り放さうとは思はない。あの信賴の月日、あの靜和な月日、あのすばらしい會合の月日、そしてあの深い眼尖……」とかう書いてゐる。

二人は飽きることなく語り續けては、お互の思想が益々近く接してゐることをば確めるのであつた。未來の藝術、單一なる藝術に對する綜合せる藝術、音樂と詩と劇と造形美術との渾然と融和する新らしき藝術、——かくのごとき藝術に對する新信念が、同時にその胸を貫いて流れ行くこと

をお互に感じ合つた。かゝる藝術こそ實にその根を希臘の土壤のなかに持つてゐるもの、従つて、その希臘の後繼者たる獨逸の土壤の上に美はしくも咲き出づべきものといふ信念を、二人は軌を一にして抱いたのであつた。恰かもエスキロスかピンドロスかのごとくに、ワグナーは己れの民族と世界とを祝福するに些かの躊躇もしなかつた。一方またニッチェはニッチェで、『悲劇の發生』なる著書に手を着けはじめやうとして、ゲルマン民族こそ希臘民族の文化の後繼者に他ならぬことを心から喜びとし誇りとして感じてゐたのであつた。あゝ、光は嵐について現はれる！この北歐の空の下の霧を通して眩しい太陽の光が顔へ出す！おゝ、何といふ奇蹟！

かうして『獨逸人』たることを最も幸福なりと信じてゐたニッチェの照り輝いてゐる心のなかに、ある雲翳が暗い影を投げるやうになつたのもまたこの時期であつたことは、興味深い。その一つは、書物に依る經驗であつた。即ち、ある夕、コジマ・ワグナー夫人の手から、讀んで見よとて佛蘭西語のまゝのモンテーギユの著作を貸し與へられたことがある。更にある時は、スタンダールの著作を與へられたこともあつた。彼は其處には大して注意を向けるといふつもりもなかつたが、自然に心に宿つた印象は強いものがあつた。獨逸以外の、——即ち彼には無價値の國土とも見える佛蘭西

といふ所にかくも美しくいいものが存在してゐたのだ！……書物のほかには、更に事物の経験があつた。即ち、千八百七十年の普佛戦争がそれだつた。普魯西の戦勝は、其國人を狂喜せしめたことは言ふまでもない。然るに従來獨逸人たることを何よりも誇りとしてゐた彼ニツチェは今は反對に戦敗國佛蘭西に對して限りのない同情が浮んで來るのを禁めることができなかった。當時彼が友人のゲルズドルフに對して書き送つた書翰のなかの一節にかうした文句がある。——『まったく、自分は近代の普魯西なるものは、文化に對して頗る危険のものであると信じられる』。更に後に到つて、彼は普魯西兵に依る巴里の火事のことを耳にして長嘆して言つた——『戦争。わが最も深き悩み。あゝ、ルーヴルの火事』

戦争が濟み、平和が戻つて來た。ニツチェが世の中を見る眼は變つて來た。今までとは變る眼で新らしいに四圍を眺め廻したのであつた。彼は今更らしくワグナーを眺めた。が、ワグナーは依然として幸福なる満足に充ちてゐて、些かも變つた所が見られなかつた。ワグナーは、あだかも傷ける獅子を足蹴にでもするかのやうに、今や巴里の降服について、ある新曲を創り初めてゐる所であつた。彼の樂才を一向に認めて呉れないその巴里の降服を——然しながら心の優しいニツチェには、

かゝることが一つの悪としか感じられなかつた。かうして、二人の間には、眼に見えずして、漸次にある障壁が生じて來たのであつた。然しながら、ニツチェはワグナーに對しても、また何人に對してもかゝることを告げやうとはしなかつた。現にその翌年（七十一年）に現はれた『悲劇の發生』のなかに於ても彼はワグナーに對して變らぬ熱情の證をさ、げてゐるのを見ても判る。

やがて、ワグナーは所謂崇拜者の群から勧めらるるまゝに、心には無限の計畫と希望とを抱きながらトリブツシエンの閑居を去つてバイロイトへと移ることにした。彼の心には最早過去にありしごとき争闘もなくまた貧困もなかつた。野心、名譽、光榮、——彼はひたすらにその燦光の宮殿へと急ぐほかは餘念もなかつたのである。

それを心に慘ましく寂しく感じながら、ニツチェは孤り後に残つてゐたわけであつた。恰度ワグナー夫妻がトリブツシエンを立つ前日のこと、ニツチェは二人に別辭を述べんが爲めバーゼルから遣つて行つた。そして、今はがらんとしてゐる大きな部屋のなかに残つてゐる大きなピアノに向ひ限りなき心の悲しみを即興曲として弾き出した。ワグナー夫妻も引越の仕事から手を離して、その悲曲に聲も無く耳傾けた。そして、その曲のなかにありありと過去の苦しみの聲をば聴き知つたのであ

つた。されどやがて最後のピアノの音とともに沈黙が三人の上へ落ちて来た時に、あ、昔の友情も最早消えはてたことを、それとなく誰しも感じたといふ……。

事實ニツチェはこれを限りて、以前のごときワグナーをば再びバイロイトに於て見ることは無くなつてしまつた。あの希臘の理想を趁うてゐた高貴な超俗的な藝術家は失せてしまつて、今バイロイトにあるものは、たゞ生活の爲めに闘ふてゐる強健なる職人に過ぎないのではないか！ 併しながらニツチェはワグナーに對するかゝる觀察が一つの誤りであるとして、その幻滅したる索漠たる心は幾度轉廻しやうと努めたか知れなかつた。この間のニツチェの心の悩み苦しみを知らうと思ふものはその書翰を讀むに若くはない。それは、まことに最上の戀愛悲劇のみが持つ烈しき心のドラマの展開であると言へやう。愛と憎みとの争ひ、——その苦しみは渦を巻いてニツチェを苦しめた。

ニツチェの二十時代に書いたワグナーに關する論片は上の心の悩みをそのまゝに反映してゐる。たとへば、『獨逸人に宣告す』といふ一文のなかでは熱烈なる調子を以てワグナーの爲めに世俗の蒙を啓くに努めてゐる。かと思ふと一方、内心に於ては密に彼の作品が『根本的に無秩序で、喘息的で、無信仰的で、貪慾で、畸形で、且高貴さを缺いた、……要するに退屈な』ものではないか知らといふことを自語しないではゐられなかつた。

然しながら決定的の危機は遂に來た。彼はかう書いてゐる。——『自分はこゝから離れやう。こゝに止まつてゐるといふことは餘りに莫迦げてゐる。……何處へでもいゝ、兎に角こゝを離れてしまはう。こゝにあるものは總て自分には堪へられない……』かうして、彼は實際にバイロイトを去つてしまつた。間も無く公刊した彼の『餘りにも人間的な』といふ著書のなかにはこの苦々しい興褪めたる心持を明かに描き出してゐる。ワグナーも、それを忽ちに感じ、諒解した。

千八百七十七年、ニツチェはバイロイトから——ワグナーから永久に別れてしまつた。同時に、それは叙情詩にも、藝術にも別れることであつた。すくなくとも彼はさうした氣持であつたのだつた。

ニツチェの心は暗澹たる夜にも比すべきものであつた。否、單に心のみではなかつた。七十九年頃には彼の肉體の健康は極度に傷められて、全身癱瘓の病状さへも呈するに到つたほどであつた。かうした絶えまない肉體上の苦惱。それに孤獨。友情も、仕事も、音楽も消失してしまつた生活。……彼はとう／＼パーゼルの教職も抛つてしまつて、光りと沈黙とを探すが爲めに、南の國への旅に

出ることにした。絶望が、この遁れ道を彼に訓へて呉れたわけであつた。

まつたく彼には伊太利が新しい力をもつて眼のまへに現出したやうなものであつた。従来獨逸の至上を信じてゐた彼にとつては、伊太利なるものは殆んど眼中になかつた邦土であると言つてもよかつたのだ。その伊太利が今や、傷いた彼の心と眼とに向つて彼の嘗て知らなかつた爽やかな優しい薬をば注ぎ掛けやうとしてゐるのであつた。彼はアルプの高峰から地中海の岸邊に亘つて、思ふまゝなる漂ひの旅を續けた。夏は大概エンガーデインのシルス・マリアで日を送つた。そのほかは、リヴィラの海岸で、ロージエノアで、ラッパロで、ルタで、サン・レモで、マントンで、さてはニステ、日を送つた。彼は深い眼光をもつて、地中海の住民が如何に明敏であり、また如何に自然であり、人生そのものに對して如何に朗らかな心を抱いてゐるかを、聾と諒解することができた。

彼の健康は必ずしも善い方にはならなかつたが、その苦しみは彼の意固地な意志を柔らげるやうになり、嘗てない靜穩な心を抱き得るやうになつたのも、またこの『地中海』の色と光との齎らした効果と言はねばならなかつた。彼は自分の運命を愛せんとするまでに到つたのであつた。Amor fati——この言葉は、彼のモットーともなつた。

恰度かうした折であつた。ジエノアの町に滞在してゐた彼はある夕方のこと、不圖して劇場の入口をくぐつて見た。それは千八百八十一年のことであつた。その劇場では、ある佛蘭西の作品を上演してゐた。——が、その作品の名もまたその作者の名も嘗て彼の聞いたことがない所のものであつた。

その作品は、その作者は何といふ名であつたか？ またそれを見た時の彼の感想は如何であつたか？ それを彼は、弟子なるペーテル・ガストに宛てた手紙のなかでかう言つてゐる。——『すてきだ、君、僕はすばらしい發見をした。ジョルジュ・ビゼー（一體どんな男だらう？）の歌劇で、『カルメン』といふのだ。それはメリメの小説から來たもので、精神的な、強力な、所々頗る感動的なものだ。ワグナーも路を迷はせることが能きなかつた眞の佛蘭西の天才だ、ベルリオールへの純粹なる弟子だ……僕はこの『カルメン』が現在存在してゐる總ての歌劇のうちで最もすぐれてゐるやうにさへ感じられる……』

この異常な感動の言葉を見て、或は人はニツチェの氣紛れを思ひ浮べるかも知れない。が、時とともに日とともに、彼のこの第一印象は確められて行くのであつた。現に、千八百八十八年、即ち彼

が初めて『カルメン』を見た年から七年も経つて、尙かうした言葉をば書き記してゐるのを見ることが出来る。

『この頃、このビゼーの音楽は、自分に對して、自分が嘗て知らなかつた感覺を與へて呉れる。それは自分をして自分自身から飛躍させて、解説させて呉れる。自分をして、何となく高い高い所にあるやうな氣を起さして呉れる。自分を強く強くして呉れるやうな氣を起さして呉れる。で、自分はきまつてその音楽を聴いた晩（もう續けさまに四回も『カルメン』を聴いてゐるが）の翌くる朝などは、精力と發見物とに心が充ち溢れてゐるやうに感じる。まつたくすさまじい作品ではないか。恰かもずつと自然な世界のなかに水泳ぎでもしてゐるやうな氣を起させられる……。』まつたくニッチェはビゼーを通して、はじめて今まで探し廻つてゐた自然といふものを握ることができたのだつた。純なる自然、聖なる自然、それこそは、到底ワグナーの音楽のなかに求め得べからざるもの、そして、それこそは佛蘭西音楽の特質に他ならぬものであつたのだ——黄橙のはげしい匂ひとともに拉丁の土壤から立ちのぼつてゐるこの音楽、それは、——その純らから熱烈な『聲』は、あのバイロイトの人工的な『聲』と較べて、何といふ大きな差異であることか。それこそは、直ちに、その土壤を、自然を、生命を現はしてゐる所のものであつたのだ！ニッチェは、かうして、こゝに初めて、眞の生命の音楽を知ることができたのである。

然しながら、謙抑なデリケートな性情を稟けて來たニッチェにとつては、かゝる告白を直ちに公表することは躊躇せられた。ワグナーとの交情が切れてから十二年も経つたにも拘はらず、尙且彼はさうした涙の多い柔しい性情の故に、公には容易に非難と失望との聲を洩す氣にはなれなかつた。然しながら、終に、あらゆる障礙物は除かれなければならぬといふことを痛感すべき日が彼に遣つて來た。ニッチェは、世を辭すべきまへに果さざる可からざる義務を、——己の良心と、世界とに對して爲さざる可からざる義務を、今更のごとく感じた。彼は、遂に、決心して立つた。一步一步彼は熱情を増しながら、『僞神』ニッチェに對しての苦き戰鬥をば開始した。先づ出たのが『ワグナー事件』のパンフレットであつた。ついで、ワグナーの作品『神々の黄昏』を皮肉にもぢつた『偶像の黄昏』といふ名のパンフレットを出した。最後には、『ニッチェ對ワグナー』と題する文集と『この人を見よ』といふ告白とを出した。これ等の著書が公刊されて間もなく、彼は恰も良心と世界とに對してその義務を果し盡したかのごとく、今は死の手にと捉はるるに到つたのである。詩人

ハイリッヒ・ハイネの言葉を借りるならば、彼ニッチェは、ワグナーから、獨逸から解放されるとともに、今度は最終の苦惱にと捉へられてしまつたのである。千九百年の八月二十五日、彼はこの世を去つた。

上に書き記したエピソードは、極めて簡単な心のドラマの現はれに過ぎないけれど、然し最も深き暗示に充ちてゐる、と言つていゝ。我々はこのエピソードから十分の教を引き出さなくてはいけない。然るに、從來ニッチェに對してある偏見を有してゐる人達が、彼のかうした事實、——佛蘭西音樂の美を讃頌し、ビゼーの爲めにワグナーをも捨つるに到つたその事實を強ひて諒解し難いやうにとつてゐることは甚だ奇怪の沙汰であると言はねばならぬ。ある者は、ニッチェの變説なるものを説明するに、極めて些細な陋劣な理由をもつてゐる。彼は嫌惡すべき性格を持つてゐて、ワグナーがあゝ世間的に成功したのを嫉んでゐたのだなどとも言ふ。また或者は、彼がゴジマ・ワグナーに對して密かに戀慕の心を抱いてゐたなどとも言ふ。また或者は、彼は全身麻痺の病患に襲はれてからは、頭腦に變調を來して、所謂『全價值の轉倒』を生ずるに至つたのだなどとも言ふ。然しながら、これ等の説が殆んど一笑にも價しないことは、容易に説き明すことができる、即ち、これ

らニッチェの所謂『變説』は決して突發的に生じ瞬間的に行はれたものではなくして、長い年月の間實に徐々として行はれたといふ一事によつてである。あのピエル・ラッセル氏の『ニッチェの音樂思想』なる著書のなかの言葉を用ゐるならば、彼の思想の變移は『理論的必然』に他ならないのである。決して突飛な飛躍や傾向やがあつたのではなくて、水の流るゝがごとく自然に、緩徐としてその思想的道程を辿つたわけなのである。この道程に眞に眼を注ぐ者ならば、上記の説者の口にするやうな卑賤な個人的動機といふがごとき問題は、容易に消滅してしまつて、たゞ、藝術的創造のなかに於ける誠實の問題のみが残るわけであらう。

今ニッチェのワグナーに對する非難を考査して見ると、以下のごとき三つに分れるやうに思ふ。即ち、ワグナーの音樂には感情がないといふこと。次には、人間味がないといふこと。最後には誠實さが無いといふこと。——この三つである。而して、ワグナーに缺如してゐるこの三つのものこそ、實に佛蘭西音樂總體に、——わけてわがビゼーに何よりも豊かに存在してゐる所のものなのである！ 従つて、ワグナーへの三つの非難の言葉は、そのまゝ、ビゼーへの讃頌の言葉となるわけである。

先づ第一に、感情の缺如。ワグナーは、世の事物によつて感動せしめることがなかつたやうに見える。嘗て一度も深い感激が彼を揺り動かしたことがなかつたやうに見える。まつたく彼は、柔和を持たず、慈愛を持たず、純朴さを持たなかつた。戀なるものも、彼にあつては、肉慾の域を脱してゐなかつた。如何にも彼は利己主義で、頑固であるらしく感じられる。従つて、彼の音楽には單に理知と意志としか存しない。心、——感情といふものは、彼には全く缺けてゐる。

第二には、人間味の缺如。これは上記した第一の缺如と相關してゐる。感情なるものがワグナーに缺如してゐるといふことは、彼が人間といふものに興味を有しない爲めに他ならない。情熱を持ち、歡喜を持ち、悲哀を持つてゐる具體的の人間に對して、彼は些かも興味を持つてゐなかつたらしい。だからワグナーの描いたヒーローやヒロインやは何れも我々が知つてゐる男や女やとは何等共通の所がないと言つていい。それ等の衣裳の下には、肉も骨も神経もないと言つてもいいかも知れない。肉體もなければ、固有の生命といふものもないのだ。あるのはたゞ抽象的の「觀念」に過ぎないのだ。この觀念といふものは、獨逸人の好んで用ゐる所であるけれど、それは、精確と明瞭と密度の何れをも缺いてゐる朦朧なる怪物に他ならない。所が、ワグナーの「觀念」なるものは、

これ計りではない、妙に様子振つた所をさへ持つてゐる。それはワグナー信者に言はせると「哲學的系統」に遵つてゐるといふのだ。否、信者だけではない、ワグナー自身その「全集」中に於て、自分の描かんとするものは、觀念それ自身にあらずして觀念の約束、觀念の豫約であること、言はゞ將來に對して企てられたる觀念の企圖であること、換言するならば、創造前にかくあるべしと見做さるる世界、即ち混沌界を描かんとするものであることを、説示してゐる。(第八卷二十頁) かくる骨つばき觀念學に對して、何人が切實に共鳴し同感することを眞に期し得やう？ まつたくワグナーは人をして泣かしむることも、また笑はしむることもない作者であると言はねばならぬ。あのヴォタンにしてもベックメッセルにしても、些かでも純な觀客の心のなかに、生々とした、悲しみの、さては悦びの感動をば起さしたことがあつたであらうか……

最後には即ち誠實の缺如。頭腦にて作られたる音楽、抽象的なるこの音楽、——それこそは言ふまでもなく偽りの音楽であらねばならない。抑も誠實なる音楽といふものは、作者が思ひまた感じた所のものを正しく表現したものに他ならない。然るにワグナーの音楽はまつたくこれに反する。彼は、この世界から己れの受けたものとは全く異なる所のものを表示してゐる。即ち「お芝居」を、こ

の世に提供してゐるのだ。彼の音楽とわれ等が住むこの現實との差は、言はゞ、畫布と森林のごとく、若くは、瓦斯燈と太陽のごときものと言へるであらう。世に幻畫なるものがあるごとくに、幻樂なるものもまたあり得る。即ち、ワグナーの幻樂なるものは、たゞひたすらに、對偶法から、誇張法から、さては默説法から、生れ來る耳の些細なる動搖をば來さしめんとするにある。——即ち、世の所謂『功果』なるものを生ぜしめんとするにある。この『效果』の偏執こそは實にバイロイトに於けるあらゆる作品の上に見らるる所である。巨大へ向つての努力。對照の組織的なる配置法。慧黠なる舞臺裝置。『多食』であり、假裝して居る、手品を弄して居り、隱語を喋り散してゐる。一言にして言へば、僞造にかゝる朗曼的の貨幣をば世に流通さしてゐるといふわけである。それはよく見ても、一個の機械にすぎまい。おどろくべく勉勵なる一人の職工の手で組立てられた複雑な機械であるにすぎまい。そこには全然自發性がない。清新がない。若々しい快敏なる獸性の奇蹟もない。たゞあるのは、一つの人工である……。

ニツチェがワグナーに缺如してゐると認めた以上の三點は、何よりも確かにビゼーに充ち溢れてゐることを彼は發見したのでつた。言ひ換へるならば、彼が長年獨逸に存すると信じてゐた希臘的特ることにしやう。

『この音楽を聴いた人は、如何に寛やかに、如何にも幸福を感じ、如何にも安逸で自分の家にあるやうな氣が起させられる。この音楽は、輕やかに、しなやかに、謹ましやかな步調で歩いて行く。……またこの音楽は、惡戯好きな心と、精練と、運命觀とを持つてゐる。それでゐて、實に一般になつてゐる。——といふのは、この音楽は一個人のみではなく一民族の精練をば持つてゐるからなのだ。この音楽は思ひ切つて豊かだ。また思ひ切つて精確だ。この音楽は、建設し、組織し、到達してゐる……こんなにも痛切極まる悲劇的の抑揚を人々は嘗て舞臺の上で聴いたことがあるであらうか？ 溢めつ面もなく、僞造貨幣もなく、様子振つた虚偽もない……この音楽は解放する……この音楽は、メリメから情熱のなかの論理を、線の簡素を、嚴しき必至をば得てゐるのだ。わけはこの音楽はあの熱い邦土の持つてゐる所のもの、——即ち空氣の乾燥と、空氣の『リムビテラッア』(證明)とを持つてゐる。こゝでは、あらゆる點で氣候が變化してゐる。他とは別種の徳性、別

種の官能、別種の静穩が、そこには現はれてゐる。この音楽は静穩であるが、それはアフリカの静穩である。またこの音楽は運命觀を己れの上に持つてゐる。その幸福は短かくて倏忽の間で、何等の宥恕もない。また自分は、この官能に對するビゼーの天稟を羨望しないわけには行かない。この南方的な、栗色に焦げてゐる、盡滅してしまふところのこの官能、未だ歐羅巴の如何なる邦の樂壇に於ても言ひ現はされたことのないかゝる官能に對して……』

かゝる見方を採つてゐたニツチェは、實に今後の音楽はビゼーに従はざるべからざることを豫言したと言つてもいいのである。かくして、あるゆゑに音楽は（否あらゆる藝術は！）簡素と眞實とによつて鍊金されたものでなければならぬこと——更に佛蘭西風の綺語を用ゐて言ひ現はすならば『音楽を地中海化せねばならぬこと』“Il faut méditerranéiser la musique”をば、ニツチェはあらゆる音楽家、わけて自國獨逸の音楽家に向つて要求したのであつた。『ビゼーに學べ』——これが、要するにニツチェの最大の、同時に唯一の標語であつた。實に、ビゼーこそは、——その同じ水脈にある佛蘭西の數々の音楽こそは、まこと希臘拉丁の人文の純眞なる花であつた。樅の樹と橄欖の樹の影なす下、我民族の幼少の日の夢をつゝむかの聖らけき海のほとりに、その音楽は生れ出た。

寛やかな土壤と、優しき太陽との間に、その生れ出た芽は健やかに育まれた。雅典と羅馬と巴里とは、智慧と力と光とをもつてその芽をば養つた。かくして、幹は太り、枝は延び、葉は繁り、花は咲いて、今は限りなき空をも蔽はむとしてゐるのである。

今日の佛蘭西文學の進歩

今日の佛蘭西文藝を語る

前置きの詞

自分の最初の佛蘭西への旅は大正九年だから、恰度今年で十年の昔になる。それから二度目の佛蘭西行が大正十三年、——何のことはない二十年間といふもの、自分は半分ほどは佛蘭西の土地で過してしまつたことになる。それに、この十年の間身体は佛蘭西外にあつても、暇があつて讀むと言へば佛蘭西の小説であり佛蘭西の芝居であつた。自分ながら近頃はや、佛蘭西も鼻につくと言つた感じさへしなくはない。勿論さう言へばとて、英吉利のエドモンド・ゴスが「おれは三十四年間佛蘭西文藝の研究に没頭してゐるが、どうも益々判らなくなつてくる」と言つた歎聲が、輕蔑に値するものだなどは夢にも考へてはゐない。それどころか、日昏れて道遠し、佛蘭西の古來の名著のうち何百分の一がこの一生に讀めるかをつくつくと情けなく感じてゐる身のうへなのである。然しながら百歩にして五十歩を嗤ふは、人情の常である。久し振りに日本に歸つて來て、今日の佛蘭

西文藝がどんな形で日本に紹介せられてゐるかを見聽きして先づ感じたことは、これでも自分も人前て佛蘭西文藝を語り得る資格が優にあるな、といふことであつた。殊に商賣違ひの畑にゐる自分は、ラシイヌやコルネーユやを辭引片手に一所懸命豫習して生徒の講義に資したり、さては文學青年の群を驚かすべく珍らしい本でもこつこつ翻譯して出版したりする面倒な世話がまるでないだけに、唯我獨尊、面白くなければ途中で止し面白ければ時には徹宵しても讀み續けるといふ境遇に安住できるのである。その面白さうな本、——と言へば何と言つても新刊の小説稗史だ。外交官といふ商賣は、對手國の人間の心理・風俗等のコツを飲みこみ、その國その時代を打つ大きな脈膊を感知することが大切だ、それには新刊の小説戯曲本を讀むに限る。——などと人前でも通る理窟を振り廻しながら、内心は何と言つても面白くてたまらぬので、飽きもせず新書獵りにも時を費して來たといふ次第、従つて佛蘭西現代の文藝については人が何を言はうと自分にも一かど發言權があるといふ意氣込みで赤面もせずに自分の『百歩』を吹聴に及ぼうとした譯合なのである。

勿論、佛蘭西の美酒でさへ印度洋を越して日本へ渡つた時代には味が變つてゐるといふ。その葡葡の美酒には及びもつかぬ自分の土産である。ある程度の味變りは當然と諦めて貰ふの外はな

い。それも、自分の罪といふよりは、人力を以ては如何ともしがたい印度洋の責任に外ならぬものであらうから。――

シャルル・モーラス

『三十年ほどまへの佛蘭西の大學は、それこそ擧つてソシアリストだつたものだ、それが今日では？ そのソシアリストはまるで影を没してしまつて、その代りにローヤリストだ、アクション・フランセーズだ。カムロ・デュ・ロアだ。……』

かう言はれてゐる若い佛蘭西のゼネレーションが、何によつてかうも作られたのか？ その理由は数々あらう。然し、アクション・フランセーズの首領シャルル・モーラスその人の力を、――その力の大きさを外にしては、この運動の範圍と意義とを眞に解することは困難であらう。

シャルル・モーラスの佛蘭西青年に及ぼしてゐる力は、まことに遠くて深い。彼を崇め尊ぶものは固よりその尊崇によつて、彼を憎み罵るものはまたその憎罵によつて、均しく彼の力を感じてゐるのだ。大河の流れが必ず一度は細い山間を通つてゐるやうに、佛蘭西の青年は一度は必ずこの詩

人で哲學者である激しい政論家のまへを通り過ぎて行くと言つてもいい。ロマン・ローランが、さてはアンリ・バルビュスが、今の佛蘭西青年にある力を與へてゐない、とは勿論言ふを得まい。然し、シャルル・モーラスのまへに、これ等の名を持ち出して來るといふことは、――やゝ ridicule であるであらう。純文藝の立場にあつて、今の佛蘭西の若いゼネレーションを動かしてゐるのか、アンドレ・ジイドであり、ポール・ヴァレリであり、さてはポール・クロデルであることに異議がないならば、政治哲學的立場で（それも社會科學的の立場で、とも言へないことはないであらう。）若い佛蘭西を指導してゐるのは、古くはジョレスとバレス、今日ではこのシャルル・モーラスを外にして誰があらう。

アナトール・フランスの後継者

『シャルル・モーラスこそは、アナトール・フランスの唯一の生ける後継者！』

この言葉を書いたのは、シャルル・モーラスについて部厚な一冊の著述さへもしてゐる文明批評家アルベール・ティボーデエだ。モーラスの近述 *Princes des Nées*（このモーラス張りな含蓄のある

題名を日本語に譯することは鳥渡むづかしいを數ヶ月まへN.R.F.の誌上でテイボーデエが批評してゐるある文章のなかの言葉だ。

モーラスとフランス。この二人の關係は面白い。モーラスは二十年間佛蘭西の王政復古を叫び續けて、一度も、——否一刻もその信條から離れたことのない人だ。フランスと言へば、社會主義者と自稱し、更には共產主義者とも自稱したほどの人だ。政治哲學の立場では、正しく對蹠してゐる二人である。が、シャルル・モーラスは、この明白な差違にもかゝらず、フランスを呼ぶに常に『わがメートル』の言葉を以てして躊躇はしない。フランスの逝去に際して彼の爲めにモーラスが上梓した冊子を見よ。フランスをその『表面』の現象から離して、始終變る無き一箇の秀れたる貴族主義者、傳統主義者を以て眺めてゐる。フランスの社會主義改宗乃至共產主義改宗は、貴族主義者にありがちの、——殊に享樂的のフランスにありがちの、一の氣紛れ、白日の快き夢に過ぎない、と斷じてゐるのだ。

——が、テイボーデエが、N.R.F.の誌上で言つてゐるのは、その點ではなくて、むしろ二人の文體についてだ。フランスの文章が玲瓏澄徹まこと珠の光るにも例へ得べき名文であるとするれば、最も傳統的なる佛蘭西風の名文を以て稱ぶことができるとすれば、モーラスの文章こそ、文體を持たざる現代の文壇に於いて、フランス唯一の後繼者と見做すことに不思議はなからうといふのである。

兎に角、モーラスの手になる文章ほど美事なる文體を輝かせる文章が、現代に於いて他にあるかどうかを、自分も知らない。この意味で、彼の主宰にかゝるそして彼の論説の三四段は載らない日のない日刊紙『アクション・フランセーズ』が、佛蘭西文壇での讀賣新聞になつてゐるといふ現象は、無理からぬこと、推察される。

新 文 體

フランスの文章、モーラスの文章が、若し傳統的な、本格式の文體を持つてゐるものであるとしたら、現在の佛蘭西文壇の文體に對する傾向は、むしろそれから離れつゝ、あると見ることができなくも知れない。

ポール・モーランの『夜開く』が堀口大學君の手で邦譯が出て、一時わが文壇の流行題目と化し、

遂に千葉龜雄氏あたりから『新感覺派』などといふ定義さへも貰つた新文體の運動も、佛蘭西に於いては、別段モーランが開祖でもなく首領でもない。新文體運動は、——否運動とまでは言はずその傾向は、以前からずつとあつたのである。先づその意味で、モーリス・バレスを擧げることができやう。それからマルセル・ブルーストを擧げることができやう。戦後になるとこの傾向は一層激しい。ジロードゥがそれだ。モンテルランがそれだ。モーリアックだつてそれだ。ジュール・ロマンだつてそれだ。そのほか、ヴァルリー、ラルボー、マック・オルラン、マックス・ジャコブ等々と數へて行けば、まこと盡くるを知らない。ポール・モーランは、さうした連續のなかの一人でしかない。(それも近來は『活佛』邊を境に所謂新感覺派を脱却し切つて、平明簡素の舊文體に還元した觀がある。)

美術彫刻に新様式が現はれるやうに、また音樂に新様式が現はれるやうに、文體のうへにもある革命の行はれるのは當然至極である。それがいゝか悪いかは、將來の問題だ。それにしても、明瞭、正確、均整といふやうなことを文章、文體の標語としてゐた佛蘭西が、各國に先んじて先づかうした新文體運動の發生地になつたのは面白い。

マルセル・ブルースト

ピエル・ロチが死に、モーリス・バレスが死に、今度はアナトール・フランスが後をついで死んだ。數年の間に佛蘭西は世界に向つて誇り得るこの三つの大きな天才を亡つてしまつた。——かう言つて嘆いたものは、當の佛蘭西許りではなかつた。それが今日では、おそらくバレスをのぞいては、さしてこの喪失に落膽したらしく見えぬのが、佛蘭西文壇の感想だ。その代りに、彼女の憾みは、この三つの星以外の星、——マルセル・ブルーストの一身に集つてゐる。(彼の死んだのが一九二二年だから、以上の三星の次々と消えて行つた恰度その間である。)

マルセル・ブルーストは、多少の誇張を用ゐるならば、今日の佛蘭西文壇では神様の位置に置かれてゐる。ロチもバレスもフランスも引つくるめて、十九世紀末から二十世紀初頭に互つて、眞に後世まで残る文豪は、ブルースト一人だ、とまで極語する人さへある。それほど彼の聲名は大きいし、またその影響も大きい。

彼の著作は『失はれし時を探ねて』十三卷の長篇小説の外には二三の雜文集があるのみである。

その長篇小説も、彼が死んで五六年経つて、漸く昨年頃完成出版を見たに過ぎない。この點で、彼は今日文壇で現に活動してゐる作家の一人とも見られやう。

自分は告白する。今日までに自分の讀んだ彼の作品は、『失はれし時を探ねて』の最初の四巻と、雜文集『行樂と月日と』、都合五冊に過ぎない。若し自分に多少なり纏まつた閑暇さへあれば、先づ第一に繙かうと思つてゐるものは、この『失はれし時を探ねて』の十冊近い續篇である。それほどに、自分は、彼の文體のおそろしき難澁さにもか、はらず、それに牽かれ動かされてゐる。

批評家バンジャマン・クレミユウ（彼は、外務省の官吏だ。）が昨年上梓した論集に『第廿世紀』といふのがある。巻頭に數十頁に亘るブルースト論がつてゐる。せめてこの論文の抄譯でもいゝ、わが邦にブルーストの藝術を紹介する人がないであらうか？ 尤も日本文壇は、プロとアルとの論争以外何の興味を持たないとならば、また何をか言はんである……

性 慾

ブルーストの手で開拓せられた文壇の處女地の一つは、この性慾の土地である。佛蘭西の現代文壇、

わけて戦後、の文壇の特徴の一つは、性慾を勝手に描く自由である。（否、それは文壇のみの現象に限るのは當らない。佛蘭西の若いゼネレーションの特徴自體が、この性慾の自由にもあると言つていゝではないか！）この特徴をブルーストが生み出した、とまで言ふのは當らぬかも知れない。然し、すくなくも彼は、この現在の文壇を流れてゐる大きな傾向を先づ他人に先んじて自分身で示してゐることだけは確かだ。お馴染のモラン邊のあの無遠慮な性慾描寫（殊にあの『艶やかな歐羅巴』を見よ。）などは、この傾向の末派を示したものと云へよう。

勿論、佛蘭西の文藝に性慾が公然とはいり出したのは、自然主義時代からと見做すこともできやう。然し、ゾラにしろ、モーパッサンにしろ、たゞ性慾を性慾として取扱つてゐるに止まる。従來口に筆にするを憚つてゐたものを、たゞ無遠慮に書き出したといふに止まる。性慾自身の持つ幾多の問題、幾多の謎を、喚ぎ出し撮み出すといふのではなかつた。

それがブルースト邊になると、性慾を性慾として別物取扱ひをするといふやうなことをせず、一切の日常の行動のなかに織り込めたまゝ、これを描き出すのである。自然派の作者たちが、無遠慮に性慾を書くと言ひながら、むしろそれにこだはり捉はれた形で、ある場景ある行動を殊更に細々

と書いてゐたのを、ブルーストは世にも自然な心地で自由にそれを描いたのである。その朗らかさその自由さは、ブルースト以前には到底見られないものだつた。

『戀・未知の土地』

かういふ題名で昨年の終り頃上梓された小説がある。作者はマルタン・モーリス。この小説こそ、前述の現代佛蘭西文壇の性慾的傾向を極度までに追つて書かれたものと言へやう。

標題が示してゐるやうに、この小説は従來の戀愛小説が觸れることを敢てしなかつた方面——性慾の方面を、専ら遠慮なく示さうとする野心の下に描かれたものである。性慾が夫婦の間の愛に、また愛人との間の愛に、如何なる役割を努むるか？——これが全巻を通じてのテーマなのである。

ある夫婦。あらゆる條件から申し分なく融合してゐるやうな夫婦。——ただだけをのぞいて。その一つだけといふのは、性の生活で夫が妻を満足させないといふことだつた。それも、夫以外に男を知らぬ妻は永いことそれをさうとも感じなかつた。然し不満と焦燥が自らに彼女の生活にのび寄るとなくしのび寄つて來た。その時、ある男が現はれて來た。夫を衷心から愛して些かも變

らない彼女であるのに、——その男に捉へられてしまつた。彼女の知らない『生活』が、『歡び』が、その男から與へられたのだつた。然し、彼女にとつて夫は依然としてわが神であつた。彼女の悩み。苦しみ。……かうして、結局彼女は、その男から教つた『方法』を携へて、夫の許に還り往くこととなり、目出たし目出たして幕は下りてしまふのである。

かうした意圖でかうした材料で書かれた小説だ。固より世の青年子女に讀むのを勧められるやうな性質のものではない。然しそれかと言つて人に秘して讀まねばならぬやうなものでは全然ない。むしろ好奇心を持つてこの書を手にする者があつたら、尠からず失望しはせぬかと思はるゝのである。その位に作者の態度が厳しくあり、また、その取扱ひ方が科學的であるのだ。否、一般の小説と較べれば、この書は、一の科學的論文とすら見做され得やう。それにしても、佛蘭西文藝の人間分析はついにこゝまで來たのだ。

モーロアの『氣候』

ブルーストの残した仕事の一つは、人間を一の固定したものと見ずに、絶えず動いてゐるものと

見た點にある。印象派の畫家たちが、一つの物象を固定した不動のものと見ずに光の動きのなかに絶えず變るものと見たやうに、ブルーストは、人の生活を或は時の力で或は周圍の力で或は夢の力で或は全く無意識の力で絶えず動いて止まないものと見たのだつた。

ブルーストの作つたこの仕事は、その後フロイドの唱道してゐる精神分析の學說に影響されて、今日の佛蘭西文壇のメーン・カレントの一つにさへなつてゐるやうに見受けられる。

こゝに書くアンドレ・モーロアの近刊の少説『氣候』も、この波に乗つた秀れた作品の一つと言へる。

英吉利の詩人シェリイを主人公にして書いたモーロアの『アリエル』なる小説は、今の佛蘭西文壇の流行をなしてゐる所謂『小説的傳記』の魁をなしたものとされてゐる。續いて彼は、同じく英吉利の政治家を題材として傳記小説『ディスレエリの生涯』を書いた。いづれも、洛陽の紙價を高めた程に評判をとつたものである。然し、昨年出版されたこの『氣候』に依つて、彼の小説家としての地位ははじめて確保されたと言つていゝ。ひとり彼の作品中最も秀れたものと言ふ許りではない、晩近の佛蘭西文壇に於いての秀れた作の一つであるといふことも、多數批評家の一致してゐる

ところであつた。

二人の男女。それが戀に落ちて、夫婦となる。男は、代々その祖先の血を享け繼いで恪勤にして實直。女はまた自由にして奔放、これ亦その傳統の血である。この二つの異なる氣質は、はじめは、互に相牽く因ともなつたが、やがて妻は夫の愛着にもかゝらず彼から一歩々々と離反して行く。ついに彼女は彼を捨て、おのれの性格と相牽く他の男を趁うて奔る。最後に來る女の死。

残されたる夫に、今度こそはそれと似通ふ血統と氣質とを持つた女が現はれる。然しながら、男は今や死んだ女の幽霊を探し求めてゐるのだつた。以前男に反撥してゐた女の我儘さ激しさを、今や男は、新らしく來た女に求める許りではなく、自分の身にさへも附けてゐるやうとするのだつた。以前ならば抱き合へる双方の類似點が、今や二人を邪魔してゐる許りではなく、男自身死んだ第一の女の幽霊を所々に探さうとしてゐるのだ。……

氣候の相違と氣候の推移。氣候が變るやうに人間も亦變る。こゝに題の持つ暗示がある。

ブルーストから出た脈を明かに感じさせるこの小説だけれども、文章だけはブルーストの難澁さとはおおよそ遠い平明な文章である。上梓後數旬にして數萬部を賣出したその好評の因の一つは、

一つはこの文章の透明さにあるのかも知れない。

ジューリアン・グリーン

『氣候』の作者は、佛蘭西文壇に於いて有数な英吉利文學通である。彼に依つて爲されてゐる英吉利文學紹介の仕事はなかくに多い。

かうした風な外國文學移入といふ仕事でなしに、自分自身外國人でありながら、つきとした佛蘭西の文壇人として創作的な仕事をしてゐる者は、古來この國には尠くない。現代だけでも指を屈して見よ。詩人のヴァレ・グリファンがそれだ。さては女性詩人のノアイユ伯爵夫人がそれだ。ビベスコ伯爵夫人がそれだ。東歐のゴルキイと稱はれてゐる小説家イストラッティがそれだ。それからこゝに書かうとする白面の青年ジューリアン・グリーンがそれだ。

ジューリアン・グリーンは、アメリカ人だ。然し、幼い時から佛蘭西で育つて、佛蘭西語を殆んど母國語としてゐる。年齢は二十五六そこゝ位。それが數年前『シネール山』といふ小説を書いて文壇の注意を牽き、續いて『アドリアンヌ・ムズーラ』の小説で一躍花形作者の地位を確保し、近

時『レヴィアタン』と稱する小説を書いて、最早その才能を何人をしても疑はしめない迄の域に達してゐる。年少にしてかくも名を成したるもの、『肉體の惡魔』の作者エドモン・ラディゲをのぞいては、輒近の佛蘭西文壇に他に人がない。

三つの小説、いづれも佛蘭西の田舎を舞臺とせる小説である。コスモポリットの巴里ならば、外國人以て描き得べし。痴鈍にして頑迷。田臭芬々たる田舎の空氣を外國人、——殊にアメリカ人の手を以てかくも見事に描き出すことは、到底容易ではない、否、『アドリアンヌ・ムズーラ』の一篇のごとき、そこに躍動する田舎娘、老人、不具娘、別荘のマダム等々、それを背景とせる田舎の屋敷、街道、別荘、八百屋、旅舎等々々々、その生動せる描寫はかのバルザックのトゥーレンヌ地方の田舎小説も到底これには及ぶまじと思はるゝのである。自分は卷を掩うて三嘆するの想さへ禁じ得なかつたものである。

郷土小説

ジューリアン・グリーンの小説の舞臺が田舎に始終することを説いたが、田舎を小説の取材とする

ことは、現代佛蘭西文學の特徴の一つと見らるゝ位、夥しく眼に映る現象である。氣が利いて、小意氣で、洒落た小説と言へば、直ぐと佛蘭西邊の小説と銘が打たれるのが常であるのに、今佛蘭西の才能ある作家といふ作家は、さうしたギヤランな方面には眼を閉ぢて、一むきに土臭い頑なな田園の生活のなかに土鼠のやうに鼻を突き込まうとしてゐるのである。巴里、なに巴里だつて？ そんな喰ひからの方面は、デゴブラか、カルコか、乃至は老ぼれのプレヴェ邊にでもまかして置け。自分たちは、佛蘭西の、——言はゞ心臓の眞たゞなかに齒を立てやうとしてゐるんだーこれが、彼等のさかんな心意氣なのである。

この數多い郷土小説のなかでも、一年ほどまへに上梓されたルイ・シャルドネルの『街道の人々』にもまして土臭い小説は滅多にあるまい。然し、その土臭さ、その陰氣さ、その慘めさにもかゝらず、この小説は何といふ底強い黒光りのする魅力を我々に放射することか。佛蘭西にゐること數年、巴里を外には田舎と言へば避暑地か避寒地以外にはさして知らぬ自分である癖に、この小説に描かれた山村の風物とそこに固着した土民のやうな人物とは眼のまへに映畫よりもはつきりと寫つたのである。自分は、あの人工的の戀愛が萬華鏡の渦を巻く派手な巴里小説よりも、トウーリス

トの眼の届かぬこの佛蘭西の一角の土鼠のやうな生活を描いた土臭い小説に、どれほど強い同感を起させられたことか。土の呼ぶ聲、——それは結局都市を越え國境を越えカルチュアをも越えて萬人の胸にはげしい力で訴へ來るものかも知れない。それにしても、わが日本の文壇の何と都會病者に溢れてゐることよ。同時に、如何に多くの未耕地に充たされてゐることよ——。

異國小説

郷土小説の續出が、現代の佛蘭西文學の特徴の一つとしたら、異國小説の續出も亦その新しい特徴の一つとしなければならぬ。

元來佛蘭西人は旅行嫌ひをもつて鳴つた國民であつた。然し時は移つた。今日の佛蘭西は、——佛蘭西文壇は、外國の旅行記乃至外國を取材とした小説で充ち満ちてゐると言つていい。その位に、人は好んで外國へ出掛ける。圓本のおかげで二三人がやつと巴里邊まで出掛けたといふ日本の文壇と較べれば、今日の佛蘭西文壇は些か桁が違ふ觀があらう。

近い例が、近年わが邦に見えた連中だけでも、五指に餘らう。ポール・クロードルは言はずもがな『夜開く』のポール・モーラン、『テナシテイ號』のシャルル・ヴィルドラック、『ケニックスマール』のピエル・ブノア、『御遠足』のトマ・ローカ。さてはロシア小説アメリカ小説と次々と異國小説を上梓してゐるリュック・デュルタン等々々。

が、かうした現象を目して、單に文壇人の好奇的な種漁りと許り見るのは當らない。それも絶無とは言ひ難いにせよ、眞の原因は、もつと深いところにあると見るのが至當だ。

戦後の佛蘭西は、最早あの穏やかな安逸な優雅な戦前の佛蘭西ではない。柔い椅子に身體を埋めて、甘いリキユールで唇を濡しながら、アルベール・サマンの詩でも讀まうといふやうなことは、もう『はやらない。』彼等の望んでゐるのは、動いてゐる世界だ。全力で飛びかゝる仕事だ。できれば一つの信條を持つことだ。鐵則を身にかまへることだ。(見よ、こゝに『アクシオン・フランセーズ』の魅力の因がある!) 巴里、古い巴里、さては古い佛蘭西、それはこの要求のまへに何だ。自分たちの息づかひはもつと自由ではげしい、……これが今のゼネレーションを通じての幻想であり渴望であると言へる。

佛蘭西文壇の異國小説流行(?)の原因を、自分はかう見てゐる。

『ジェローム・北緯六十度』

昨年のゴンクール賞は、加奈陀の曠野のカウ・ボーイの生活を描いたコンスタン・ウエベルの『過去に身を屈める男』他數篇に授けられた。その前年は諾威の生活を描いたモーリス・ブデルの『ジェローム・北緯六十度』に授けられた。いづれも、前記した異國小説である。

『ジェローム』が授賞せられたとき、自分はストックホルムに住ひ、諾威にも一二度赴いた時であつた。それだけに、オスロとそこの人々を材料としたこのユーモアに溢れた小説は、他人にまして面白い讀物であつた。文學的の價値がどうかうといふやうな難かしい問題を別にして、兎も角これほど面白く讀んだ作品は、あのトマ・ローカの諷刺小説『御遠足』以來ないところである。

『御遠足』は『ジェローム』の魁をなしたこの種のユーモラスティックな小説であるが、その出來榮は後者に劣る數段である。親しくスカンディナヴィアを知らない人たちには、この小説が自分ほど面白くは感じられぬかも知れぬ。然し、それにしても笑ひのすくない日本の文壇には、是非讀ま

れていゝものであり、多少は模倣されていゝものでさへある。――

ある若い佛蘭西人が諾威に渡る。そこでウニといふ若い諾威娘を戀する。然し諾威には結婚以外に戀はない。その代り戀する毎に結婚があるのだから、ウニの母親などは、五人位の夫を代へてゐる。その夫とても同様である。とゞのつまり、ウニとはまるで呼吸が合はず、その代りに永年巴里で『佛蘭西人らしい生活』をしたといふある諾威のオールド・ミスと抱き合つて、幕となるのである。

因みに言ふ。作者ブデルは少時から文學者希望で、従來の經驗職業みな他日文學者としての大成を夢みて従事し居りし由。而してこの『ジエローム』が處女作。その時の彼の年齢四十二歳、一日本風に言へば四十四歳であつた。

黒 奴 趣 味

廣く異國趣味といふ。なかには極東趣味もあれば、近東趣味もある。亞弗利加趣味もあれば、亞米利加趣味もある。この雜多な趣味のなかに、何が今日の佛蘭西文壇のメーン・カーレントをなし

てゐるか、と言へば、取りも直さず黒奴趣味である。

否この現象は單に文壇のみに限らず、社會全班に浸透してゐるカーレントだといふこともできやう。それほどに、今の佛蘭西は黒奴全盛である。一時あゝも鳴らした(?) 東洋趣味も、今日のところは、黒奴趣味に全くお株を奪はれたる觀さへある。

東洋趣味から黒奴趣味へ。

この現象も、前記した戰 後の佛蘭西人の心的傾向を見て行けば、尤も當然な推移と見做すことが出来る。東洋を象徴してゐる不動、靜觀、忍諦、慈悲等々々の哲學乃至藝術は、およそ今日の若い佛蘭西人からは縁の遠い世界のものとなつてしまつたのである。(モーランの『活佛』を讀め) 彼等の要求はむしろそれ等の反對になつてゐるのだ。動くもの、沸き上るもの、打つもの、泣くもの、怒るもの、さては殺すもの等々々々……。かくして、彼等の望むものは佛心ではなくて、むしろ獸心なのであつた。

黒奴はこの意味で彼等の新らしき神であらねばならない。黒奴のあのむきだしの自然さ、あの奔放さ、あの迅敏さ。それこそは『文明』に塗毒されざる純眞さがあり、永遠の若さがあり、未來へ

と伸びる生命自體があるのだ。

古き歐羅巴に補血する爲めには、亞細亞の血は澱みすぎ冷えすぎてゐる。若く熱く煮えたぎる血を、黒奴以外の如何なる者にこれを求めやう。——これが、彼等の心裡の聲なのである。

黒奴の踊り子ジキゼフィン・ペーカーの人氣はこゝに原因する。黒奴のジャズ・バンドの流行もこゝに原因する。シャルルストンの流行もこゝに原因する。シトロエンの亞弗利加横斷寫眞『黒き洋艦』の成功もこゝに原因する。アンドレ・ジードの『チャッドの旅』乃至ポール・モーランの『黒き妖術』等々の好評もこゝに原因する。

『シーグフリード』

ポール・モーランが黒奴短篇小説集『黒き妖術』を出して批評家の間にその鮮かなる轉身振りを賞讃せられつゝある間に、同じ外交官文士の一人ジャン・ジロドゥは、舊作『シーグフリード』とリモーランを自ら戯曲に改作してコメディ・ド・シャンゼリゼ座に上演せしめ、言はば、巴里滿都の評判を聚めたのは、恰度昨年秋のことであつた。

ジロドゥの小説は、型破りがはやる現代の佛蘭西文壇に於いても、わけて型破りの最も目覚ましいものである。ゾラ式の小説のみが、フロベル式の小説のみが、さてはフランス式の小説のみが、小説であるとしたならば、ジロドゥの作品は明かに小説とは言へぬ。それ等の間には——恐らく佛蘭西語で書かれたといふ一點だけをのぞいて——何等の類似點もないからである。それほどにジロドゥの小説は、前代未聞な作品である。

先づ世の小説なるものには筋がある。それがジロドゥの作品には筋らしいものがない。それならば感想の連続かと言ふと（乃至日本風に言へばイデオロギイとやらの——）、そこには男女の痴情の鮮やかな描寫がある。では所謂詩的小説の類かと言ふと、おそろしく芥子の利く皮肉があり、また骨に沁むやうな文明批評さへある。何のことはない、八幡の籤の果知らず、讀者はたゞ作者の引つぱり廻すまゝに（いゝ氣持で）引つ張り廻されて、とゞのつまり終末まで來て、なあんだと許り巻を閉ぢるのが、彼の小説である。佛蘭西語に Fantaisie といふ語彙がある。彼の小説を簡単に定義するとならば、まあこのフアンテージイの小説である。

こんな小説だから、戯曲に直したらどんなものになるか？——これは誰しも見當の付かぬところ

だつたと言つていゝ。それが、すばらしい出来だつたのだ。人氣は湧かざるを得ない。

この正月日本へ歸る途、巴里に立ち寄つた自分は、先づ何を指してもこの芝居を見に行つた。面白かつた。こんな面白い芝居はさうたんとあるものでないと思つた。新趣向の、形の變つた——殊に舞臺面の奇抜な芝居はする分見た。然し内側の方からこれほどまでに新奇さを示した芝居は、——ピランデロ物をのぞいては、餘り見なかつたと言つてよかつた。

『トパーズ』

『ヴァリエテ座のトパーズ！素的だぜ！』——こんな言葉を、瑞典の北の果てさへ耳にしたものだつた。巴里へ出て早速その『トパーズ』の切符を買ひに行つた。

一週間位先までは殆んど賣切れだつた。二度目に行つてやつと狭いロージュの切符が手にはいつた。數年間巴里にゐた自分も、こんな現象ははじめてだつた。

『トパーズ』の作者マルセル・バギョールは、學校の教師であつた。そして、最初に發表した戯曲が『ジャッズ』の一篇で、自分はそれを二年ほどまへにテアトル・デ・ザール座の舞臺で見えてゐる。

題が内容にぴつたりしないが、兎も角い、芝居だなどと思つた。それから二度目の作品がこの『トパーズ』で、今度はブルーヴァールの小屋まで『進出』して来て、この人氣である。近着の新聞を見ると、第三の作品『マリユウス』といふのがテアトル・ド・バリ座にかゝりまたく人氣を煽つてゐる由を傳へてゐる。

のみならず、上演後未だ一ヶ月しか経つてゐぬのに既に歐羅巴各國でこの『マリユウス』も續々翻譯上演されつゝある次第をも傳へてゐる。思ふに、彼バギョールが從來熾つた學校教師生活で日を送つてゐたことは別として僅か二三の作品だけでこれほどまでの人氣と地位とを築きあげたといふことは世にも幸運なる男の一人と算ふべきでなくて何であらう。

『トパーズ』はトパーズなる愚直にして誠實そのもの、やうな學校教師が、不圖したことから虚々實々奸策奸計の渦を巻く實業界の波瀾のなかに巻き込まれ、とゞの果が自分自身人生の裏表を悟つて大した金持ちになるといふ、たわいのない筋の芝居に過ぎないが、最初から最後まで觀客を笑はし續けながら、(それもよく考へるとやはりあのモリエルの笑ひだつた!) 容赦なく人生批判の烙印をびたり／＼押しに行くところ、何と言つても心憎きまでの手腕だと言はざるを得ない。

尤も自分個人の好向からすれば、未熟なところはあるにしろ『ジャズ』の一篇の方が面白かつた『トバーズ』は満都の人氣を博してゐるだけ、『巴里風』に、餘りに巴里風に』できてゐる。その點で、マルセーユのキャップを舞臺にとつたといふ『マリユス』の見られないのは、自分として心残りである。

其他、何、何、何、

新らしい詩人で眞に問題になつてゐる人と言へば、近頃月に一冊位の割で詩集を出してゐるレオシ・ポール・ファルグ邊をのぞいて、鳥渡他には見當らぬといふやうな詩壇の寂寥さにくらべて、(否否、シユール・レアリスムの運動はどうだと博學な日本人たちは言ひ出すかも知れない。然し巴里ではこの派の人たちが時々酔つてキャップの硝子窓を打ち破ること以外には餘り知られてゐません。)劇壇と小説界とは、百花燦爛の觀があると云つていゝほど、新人で充ち満ちてゐるのを感じる。

『シーグフリード』と『トバーズ』だけをこゝで問題にして、さうした百花燦爛の今の佛蘭西劇壇の消息をこれに打ち切るのは、勿論自分の本旨ではないけれど、第一に約束の頁も盡きるし、第二に自分邊が芝居紹介の柄でもないと思へるので、先づこの邊で筆を止める。たゞ最後に一つ。それは、例のヴィユ・コロンビエ座に籠つて佛蘭西の新劇運動を花々しくやつてゐたジャック・コッポールが、數年まへ時勢を慨して都落ちをやり、結局その一座はばらくになつた譯であるが、それが今日のコメディ・ド・シャンゼリゼ座(最近ではテアトル・ド・ラヴニユに移る)のジューベール一座、ステューディオ・ド・シャンゼリゼ座のバティ一座、それからモンマルトルの一角に寄つてゐるテアトル・ド・ラトリエのデュランの一座といふ風に分裂興行をすることゝなつたところ、近年はかうした新劇運動がすつかり有卦に入つた状態、缺損どころか毎興行跡からぬ利益があり、うっかりすると大衆本位のブルヴァールの小屋邊さへ惶て出したとのことである。かうした状態が長く續くか否か、またかうした状態がいゝか悪いか、それは別として、依然ブルゴーギユ地方で田舎巡り許りしてゐるジャック・コッポールを、今更感慨なしでは考へられないのである。

パイオニアの悲哀は、どこにもある。(昭和四年六月末稿)

愛怨遺事三篇

シャトールリアンが最後の戀

○

シャトールリアンと言へば、フランスに於ける十九世紀前半期の偉大なる小説家として、かの『レ・ミゼラブル』の著書ヴィクトル・ユーゴーと肩を並べてゐるほどの人であることは、人々の能く知る所でせう。その名著『ルネ』や『アタラ』は、他分わが國でも翻譯が出てゐるかと思はれます。所がこの有名な小説家が生前ある人に送つた手紙が、五六十通ほど纏まつて、今回巴里の新聞『フィガロ』に初めて發表せられました。この手紙の發表は、獨りシャトールリアンの愛讀者である者たちにとつて許りではなく、廣く文藝に興味を有する一般の人々にとつても實に、思ひがけないセンセーショナルな出來事と言つていいのでした。それは、今日の巴里に於ける最も大きな話題の一つであると言つても、些かも誇張ではありませんまい。自分は、この出來事をお知らせしやうと思つ

てペンを執りました。が、こゝで本論にはいるまへにシャトープリアンその人に關して一言書くことを許して頂きたいと思ひます。

シャトープリアンは、前記のやうに偉大なる小説家ですけれども、他方外交官としてまた政治家として、非常に秀れた人なのです。英國大使をつとめ、伊太利大使をつとめ、更に外務大臣をすらすらつとめたことのあるほどの人なのです。浪漫的な魅力に溢れた作品の作者として、そのみても華やかな人氣の集まる所へ持つて来て、かうした素晴らしい外交舞臺の立役者をつとめた譯です。當時その評判と言つては大したものでした。誰もが知つてゐるかのフローベールの有名な小説『ボヴァリー夫人』のなかに、ボヴァリー夫人が田舎の單調低級なる生活のなかから、杳かに巴里の華やかな外交官の生活といふものを夢中に戀する章句があります。就中このシャトープリアンの當時の生活といふものは、多くの人々、わけても感動的な若い女性たちの眼には、まるで詩そのもの、夢そのものとも映つてゐたものでした。

このシャトープリアンに、彼がわざ／＼その死後に刊行せしめた膨大な著書があります。題して『墓の彼方の手記』と言ひます。見らるゝ通り題までが、死後の刊行を示してゐるわけです。この作品は、彼の政治上、社交上並びに文學上に亘る彼の數々の追憶を集めたもので、非常に興味ある、今日でも人々が争つてこれを讀むてゐる所のものであります。これに依つて人々は、シャトープリアンの生活が如何に華やかだつたかを、——わけて如何に無數の讚美者に、殊には數多くの美しい伶俐な女性たちに柔しく取巻かれてゐたかを、如實に知ることが出来るのです。ボヴァリー夫人ならずとも、そこに描かれてゐる數々の華やかな情景に、不覺羨望の溜息の洩れ出るのを禁じ得ない者は、尠くはないでせう。

所が、この『墓の彼方の手記』のなかに、最初から最後まで本名を現はさないで、唯『オクシタニヌヌ Occitannienne (西の國の婦人といふほどの意)』とのみ呼ばれてゐる一人の若い女性のことが描かれてゐるのです。然も、この女性とシャトープリアンとの間の交渉は、巻中でも最も光彩があるのです。それは詩的と言つていゝのか、また戯曲的であると言つていゝのか、兎に角それのみで實に立派な一篇の文藝作品を形作つてゐると言つて差支へないほどなのです。それだけに、一

層世人は、このオクシタニエンヌが事實如何なる女性であつたかと、その本體を確めようと努めたものでした。が、結局本體がどうしても判らぬので、これはシャトープリアン自身の製造にかゝるもので、實在の女性ではあるまい、と言ふことに大體相場が極つてしまひました。

所が、それから彼は百年近くも経たうといふ今日になつて、突然多年の疑問であつたこの本體が判明したのです。その本體を世に明かにしたものは、右に書いたシャトープリアンの五六十通の手紙がそれなのです。彼から「オクシタニエンヌ」に送つた手紙がこれなのです。「オクシタニエンヌ」の遺族の手で、今まで秘せられてたこれ等の手紙がはじめて公表せられたのです。

かくして、「オクシタニエンヌ」その人の本體がこれで判明した許りではなく、「墓の彼方の手記」のなかでは充分に言ひ現はされなかつた箇所、または事實をわざと強調したやうな箇所等まで、この機會に剩す所なく事態明白に及んだ譯なのです。

今「墓の彼方の手記」のなかに描かれた「オクシタニエンヌ」の物語を先づ紹介し、續いて、今回發表せられたる手紙を骨子としてこの物語の箇所を正誤して行くといふのが、ほんたうの順序でせうけれども、一般の讀者の煩を慮り、こゝではこの二つを綜合してしまつて、單にオクシタ

ニエンヌとシャトープリアンとの間に醸されたる美しく哀しい事實譚の紹介だけに止めたいと思ひます。



フランスの西南、ピレネーの山脈に近い所にトール・Thore といふ川が靜かに流れて居ります。この澗んだやうな淋しい流れの岸に、オートリヴ Hauterive の古城が繪のやうに聳えてゐるのです。この嚴めしい古城のなかには、一人の年若く麗しき女性が、優しい夢見がちの日と夜とを送つてゐるのでした。この女性こそは、レオンチヌ・ド・ヴィルヌーヴ Léontine de Villeneuve と呼ばれて、この古城の持主なる彼女の母と二人、華やかにまた淋しい日を送つてゐる十七歳の花朧かしい姫君でした。

それは恰度今から百年ほど前に當る、千八百二十年だつたのです。

レオンチヌは、當時の若い殆んど全ての女性のごとく、シャトープリアンの熱心なる崇拜者でした。彼の著作、——わけてもその『基督教の神髓』や『紀行』やは、繰返し讀んで、如何

なる章句でも暗に誦ずることができるとして。それ許りではなく、シャトープリアンを取圍む數多くの情話に對してもまた、世の多くの女性と同じく、その胸のなかに不覺熱い感情の波を高めずにはゐられなかつたのでした。かくして、彼女はこの嚴めしい淋しい古城のなかにあつて、シャトープリアンの名が育くむ艶やかな光と色とのなかにうつらうつら夢見續けてゐたやうなものでした。

遂にある日のこと、レオンチーヌは、己れの崇敬の的なるシャトープリアンに、思ひ切つて一通の手紙を出さうといふ考になりました。その親しい友のコラリーといふ十五歳になる少女と二人して。そのなかで、如何に自分たちは彼を崇拜してゐるか、できれば自分たちの城へ来て、我々を見、また庭にある古い櫛の大樹を詩に歌つて頂きたい、なぞといふやうな愛らしい稚い言葉の數を書き並べました。

この當時、シャトープリアン自身は、如何ほどの年配であり、また如何なる仕事に従つてゐたてせうか？ 彼は、千七百六十八年の生れですから、當年五十二歳になつてゐる譯です。兩三年前自ら保守黨を創立して、政治界の重鎮を以て居り、その聲望は大したものでした。従つて、絶えず巴

里の政界の渦中にあつて、その繁忙は言葉に絶えるほどでした。彼が伯林へ、次いで倫敦へ、佛蘭西大使といふ重大なる使命を帯びて出掛けることになつたのは、恰度その翌年——廿一年に當つてゐる譯です。

かゝる渦中にあつて、流石に詩人として彼は、そゞろ閑寂靜和なる詩の世界を戀しく思はぬ譯には行きませんでした。彼が當時その情人たるレカミエ夫人に送つた手紙のなかには、當時のこの詩人の感懐が切々と述べられてゐるのを見ることができます。

かゝる際に、彼の手許に届いたのは西の方の少女から來たこの匿名の手紙だつたのです。彼は、テーブルのまへで何氣なくその封を開いてその手紙に眼を通しました。そして、微笑を唇に浮べながら、見るともなく窓外に眼を放ちました。窓の外の樹の葉越しの青い空を——。

が、それだけでした。微風が樹の葉を通り過ぎたやうに、彼女の手紙は、彼の心のなかを跡も残さずにそのまゝ通り過ぎてしまつたのでした。

それから月日は事無く七年ほど経つてしまひます。彼は、もう六十といふ年齢近くに達しました。この間に彼は獨逸及び英吉利に大使として赴任し、さては外務大臣の榮職に就くことにもなりました。西班牙との戦争を始めることになつたのも、彼の外務大臣在職中の大きな出来事でした。この年——千八百二十七年の十一月、マドモアゼル・アデル Adèle と、その名前だけを認めた手紙が巴里にゐる彼の手許に届きました。その手紙には先づ、「匿名の手紙で有名な人々を疲れさせる大勢の女性」の一人で自分もあることを濟まぬことと思ふ、といふ詫びの言葉を豫め書き記し、然し、自分は決して濫りにかゝる女性を眞似てゐるのではない。自分の貴方に對する感情には特殊のものが存してゐると附け加へて、次のやうな言葉を書き續けてゐます。——「……貴方こそは、私の魂のなかに最初の情熱の芽を育んで下さつたので、私はいたつてつらい者で、私にいたしました。隠退生活のなかに生ひ育つた一人の若い女に過ぎないので、私にいたしました。それが、貴方のお書きになつたものに依つて未だに知らなかつた大いなる樂しみの源を發見することができ、やうになつたので、……」續いて、この手紙には、己れの『夢』は、實にシャトープリアンの注意を牽くといふことにあること、(政治上の)彼の意見に加擔するといふことにあること、(政治上

の)彼の心配事を察してやるといふことにあること、さては(政治上に於いて)彼に感謝を捧げざるべからざる人々の忘恩の行爲等に對して更に憤るといふにあること、……等にあると述べ、この『夢』の實現を圖ることこそ、自分にとつて何よりの仕事であると書き記し、「……今後は、貴方にとつて私が全くの他 人ではないといふことを現はさうとしてゐるので、……」と、結んでゐるのでした。

この手紙とともにシャトープリアンの手許には、もう一通の女文字の手紙が届きました。それも、彼には未知の女性からでしたが、こちらはちやんと明かにド・ヴィシエ侯爵夫人と署名がしてあつて、等しく彼に對する愛敬の言葉が書き並べられてゐるのでした。

彼はこの二つの未知の女性からの手紙を手にして、今更に『永遠の若さ』が己れの胸を動かすのを、我不知感じました。彼は霧時躊躇ひましたが、頓がて微笑とともに、テーブルに向つてペンを執りました。ひとしくこの二人の未知の女性へ向つて。——

ド・ヴィシエ夫人に對する返事には尊敬と媚態とを交へたる雅やかなる言葉を以て書いた彼は、他方の匿名の手紙の主に對しては、何等の氣兼ねなく自由に書き得たのでした。彼は、このアデル

と呼んでゐる女性が、ほんの十五歳位にしかならぬやうにさへ感じました。

『……マドモアゼル。貴女は、私の爲めに、休息かそれとも出来れば忘却かのほかには、お望みになつてはいけません。私は、忘却と仲違ひになるやうなことがあつては大變と心配してゐる所なのです。それと仲善くすることさへできれば、私の残りの生涯をやつても惜しくありません。……私どもが何日か相會ふ日があるとしたら、マドモアゼル、私は屹度、貴女の手紙のやうな優雅と情愛とに富んだ若く美しい『オクシタニエヌ』を見るに違ひないでせう。そして貴方は、頭髮の眞白な、最早心臓にしか騎士を持つてはゐない、一好々爺を御覽になるに過ぎないでせう。だから、マドモアゼル、私どもが會ふことは止めにしませう。貴方が幻滅を感じられる時には、私は美しい幻を見るといふことになつては大變ですから。……』

この手紙は、巴里から遙かにトーレの河岸の城のなかなる麗はしいレオンチヌ・ド・ヴィルヌーヴの許まで送られたものであつたことは、今更言ふまでもありません。

アデル——實はレオンチヌは、日頃尊崇して止まない大文學者であり大政治家であるシャトーブリアン自身の手から、思ひがけなくかうした返信が直ちに與へられたのですから、その歡びが

如何に大きかつたかは想像するに難くありません。これに對して彼女は、また直ちに手紙を認めました。この手紙を手にしたシャトーブリアンは、愈々この手紙の主『オクシタニエヌ』が、淨らかに熱情に富みまた伶俐なる女性であることを確信するやうになりました。そして、七六年以前英吉利に大使として駐在中、優しいチャロット・イーヴといふ若い女性から結婚を求められようとしたのをすげなく振り切つてしまひ、其あとで限りない佻しさを感じたことであつて以來、依然として數多い女性からの媚笑は彼を取り巻いてはゐるものの、かくのごとく若い女性の心臓から響き來る清らかな響きといふものは、嘗て彼まで届いたことはなかつたことを想ひ起しました。彼は、忽ち、言ひ難い惱みをすら覺えて來るのを禁めることができませんでした。翌くる年の一月に、彼女と書いた彼の手紙の中の言葉を、讀んで御覽なさい。

『……マドモアゼル。貴女がちやんと署名した手紙をお寄こしになりました今日となつては、私どもの通信は、私にとつて益々窮屈なものとなつて來ました。私は最早、貴女に對し漠とした事柄について物を言ふことは能きなくなりました……』

それならば、何を彼は彼女に言はうとしてゐるのでせう。——彼は彼自身それを言ふ代りに、彼の

女をして言はしめようとしたかに見えます。次の手紙の言葉を讀んで御覽なさい。

『……貴女は、御自分の夢を歎息してゐらつしやる。が、むしろその夢を大切に保つてゐらつしやい。一體夢をほかにして何があとに残るでせう、私は、全く現實の年配に達してゐるわけですが、それでもなほ日日己れの空想を惜んで居ります。たゞ、私は、痴愚の者と見られない爲めに、それを聲高く言ふのを敢てせぬだけです。否、できればわが青春の一瞬時のためには、わが長い生涯の一切の知慧までも捨てていいとさへ考へてゐるのです……』

未知の若い女性に叫び掛けてゐるこれ等の言葉のなかに、人知れぬ深い悩みと憧れとの熱い聲が籠つてゐるのを、——六十にも達しようとしてゐる人の、痛ましい心の願ひの籠つてゐるのを、誰しも氣が付かずにはゐられないではありませんか？ 従つて、人一倍伶俐な性のアデルにとつては、かうしたシャトールブリアンの言葉の意が、たゞちに判らぬ筈はどうしてありませう。然しながら、彼女にとつては、シャトールブリアンは『光榮』と『神聖』とにつゝ、まれた『神』そのものだつたのです。地上のものとしてよりは、寧ろ天上のもののごとく、心からの淨らかな崇敬の念を捧げてゐる人物だつたのです。その言葉は、地上の想を語るものではなくて、常に高い聖らかな

世界の想を語るものとしてより他には、諒解できなかつたのです。——

二人の間の度重なる消息は、終に三箇月ののちには、この夏ピレネーの水の邊りて相見ようといふ所まで、二人を押し進めて行きました。しかもわが多情なる詩人は、同時にド・ヴィシエ侯爵夫人に對しても、かゝる會見を約してゐるではありませんか！

シャトールブリアンにとつては、この未知の女性に會ふといふことは、心秘かに魅力に富んだ可愛らしい若い『戀人』に會ふといふことを意味するものでした。然も、わがアデルにとつては、それは、この有名なる作者の爲めに理想的な伴侶として、妹ともなり姪ともならうといふ清らかな心の願ひを現はすものに他ならないのでした。二人は、互ひに『愛する』Aimerといふ言葉を用ひてゐます。しかもこの同じ言葉は、それを用ひてゐる二人にとつて、夫々に異つた意味をつゝ、むてゐるのでした。

然し、若いアデルの心の願ひが誠實なものであるがごとく、シャトールブリアンの心とて、決して浮華なものではなかつたのです。彼は、その心臓の獨りてに燃え出すのを、如何ともするこゝとが能きなかつたのです。彼は、自分を脅かす運命の恐しさをすら感じたのです。むしろ苦惱に

充ちてゐる次のごとき手紙の言葉を讀んで御覽なさい。――

『……私は貴方に、不幸を與へるだけでせう。……私に親しくしてゐた總ての人々は、後で悔いてゐるのです。總べて苦しんでゐるのです。總べて早世してゐるのです。總べて死するまへにはその理性を多小とも失くしてゐるのです。ですから誰か私に親しくしやうとしてゐる場合には、私は恐怖に捉へられてしまひます。……私は、自己の内部の生活をまた外部の生活を決定することができないのです。私にとつては、自分の心を、また運命をも、自由には處理できないのです。……かくして彼は、寧ろこの若い女性を見ようといふやうなことを、斷然止してしまはうとすら考へたのです。『あ、若しか自分が、物を愛することなんぞができぬ冷酷な自我主義であつたら、どんなによかつたらう！』とまで、言つて居ります。彼は、つとめてこの『冷酷な自我主義』にならうとしました。が、心が既に崩れかけてゐるのを、どうともすることはできませんでした。』

シャトーブリアンにとつて、かくも深い惱みの種ともなり他方また強い歡びの種ともなつてゐたその夏の水邊の會合は、ある思ひ掛けのない出來事の爲めに實現せられずに終ひました。それは、間もなく彼が、伊太利駐節の大使に任命せられて、羅馬に赴かねばならなつたが爲めです。

羅馬に赴いた彼と、オートリーヴの古城に日を送つてゐる彼女との間に、依然手紙の往復が續いてゐたことは言ふまでもありません。さうした手紙の一つで、彼女は此頃自分に一つの結婚談が持ち上つてゐることを書き、(彼女はもう二十四歳となつてゐます)それに對する彼の意見を尋ねてゐます。率直と媚態とを交へた典麗なこの手紙をまへにして、わがシャトーブリアンは、心から湧き上る嫉妬の感情を如何ともすることができませんでした。羅馬に於いて彼が書いてゐる告白の言葉のはしを讀んで御覽なさい。――『……どうして自分は、レオンチーナに結婚せぬやうになどと言ふことができやう。自分は、わが責任となることは避けなければならぬ。……』また、更に彼女に書き送つた次の意味の言葉を、讀んで御覽なさい。――

『……貴女には、青春があり、長い未來がある。貴女を取巻いてゐる一切のものは、これから始まるだけである存 在です。それなのに私には、凋枯と皺との時が、未來の代りに過去が残つてゐるだけです。これから終らうとしてゐる存 在が、私の周圍にはあるだけなのです。それなのに私は、恰かも自分が二十歳の年頃の人間で、もあるかのやうに、若々しい幻を描いてゐたことに、今更氣が付きました……』

憐れなるわが老詩人は、悟性と理性の力を用ゐて、我と我身を誦むこの情熱の炎に對し、強ひて闘はうとつとめてゐるのでした。然し、既に傷いた彼の心臓は、この激しく侵し寄せてくる情熱の炎のまへには、たゞ力無く折れようとするだけでした。

○

二箇年羅馬に日を過したシャトープリアンは、閑を得て再び巴里の土地を踏むこと、なりました。千八百二十九年の晩春のことです。彼は當時最早六十一二歳に達してゐました。

彼は何を措いても先づわがアデルに會ふことを願ひました。巴里に止まること約一箇月半のうちに、彼は、恰かも休暇を得た學校生徒のごとくに躍り上る心を強ひて抑へながら、ピレネーをさしての旅に上りました。七月も半ば過ぎて、もう自然は限無く眞夏の装ひをつけようとしてゐました。

ピレネーの山脈に續くコートレの水邊に彼が着いたのは、七月の末でした。わがアデルも、伯母に連れられて、上流社會の者たちの避暑地となつてゐるこのコートレに來てゐたことは言ふまでもありません。かくして、二人はこゝに初めて相見ることとなつたのです。二人は、普通の茶の席

で、大勢の人々のゐるサロンで、(雙方の知合であるド・ラ・ロシエフコー侯爵夫人の邸に於いて、(す)相見ること、なつたのでした。

(シャトープリアンが、このコートレを立ち去つたのは、八月の半ばすぎですから、彼は二十日間近くも、レオンチーナと相見相語ることができたわけです。彼女の伯母は、彼女に對して充分の自由を與へてゐましたし、また彼女自身誰に對してもシャトープリアンが『私のお友達』であることを公言するのを當然としてゐた位ですから、二人は何等の氣兼ねもなく俱に歩き俱に語ることができたのでした。かうしてゐる際に、二人の間がどういふ風に過ぎたか? レオンチーナが書き遣した手記(これはコンフィダンス『Confidences』と名づけて、矢張り今回シャトープリアンの手紙と同時に公表せられました。)に依れば、――

『……私たちはあらゆる事柄について、親しく語り合ひました。私は、常に祭壇のうへにわが香爐の煙を受けてゐる神様を置いてゐました。この人は、私に何等の怖れをも起させませんでした。何故といふに、この人の話にもまたそれに答へる私の返事にも、私を惱ますものは一切無かつたからです。この人は、私が度々馬鹿なことを口にしては微笑させるほどに、ほんたうに『いい人』でし

た。……』とあります。六十歳を過ぎたこの老詩人と未だ二十五六歳にしかならぬこの女性との交情は、師弟としての親しさ、さては親子としての親しさ以外には、別にあり様筈はなく人々の眼に映るのは當然の事でありませう。事實また、かうして親しく會ひ親しく語り合ふ二人の間は、すくなくもレオンチーヌにとつては、これに他ならぬのでありました。

シャトーブリアンは、再び羅馬に送るべき日のことを考へて、ある日レオンチーヌに、羅馬行きを勧めて見ました。彼は『永遠の都』のなかで、レオンチーヌを含めて總ゆる友だちを、——かのレカミエ夫人をも加へて、自分の周圍に集めて、楽しい社交を作つて見ようといふ空想染みた企圖すらも心に抱いてゐるのでした。レオンチーヌは、羅馬の町に多く見出される尼寺の一つに客となつてそこに起臥し、日に夜に彼を見に来ては、彼の心を勵まし、また慰めて呉れる……が、その爲めには、レオンチーヌの結婚するといふ機會は、棄てることとしなければならぬ。

シャトーブリアンのこの提議は、彼女を困しめたやうには見えませんでした。彼女は微笑とともに、それを容れるかにさへも見えたのでした。然し、直ちに彼の心は苦しい自責の念で充たされねばならなかつたのです。かうして彼女に結婚の機會を捨てさせて、彼は如何しようとするのか！この老齡

をもつて尙も彼は、彼女の青春に、愛に、未來に、酬い得られると思つてゐるのか！かういふ聲を聽いては、悔と慚愧の念の爲めに顔の赤らむのを感じずにはゐられなかつたのです。かうして彼の心は、人知れず望みと惱みとの混錯した感情の渦巻のなかに果もなく動搖せしめられてゐるのでした。

かゝる日を送りつゝある折、このコートレに居いた巴里からの通信は、シャトーブリアンにとつて、不意の襲撃とも言ふべきものでした。それは、彼の政敵ド・ポリニャック公爵が新内閣を組織したといふ報知だつたのです。この新内閣成立の結果、彼は羅馬大使の職務をも辭さねばならぬ羽目となるわけだつたのです。彼はこの不快なる報知を手にした日の翌日、レオンチーヌを訪ね、この年少の女性に對してその憤怒、その不安、その困惑をありのまゝに訴へました。彼はかうも、言ひました。——『自分は大使の職を辭してもいい、單なる一遊士として再び羅馬に赴きませう。そして、あの詩人タッソーの「く」なつたといふサン・オヌフレの寺院の一室を借り受けて、そこでつつましく生活しませう。……』

かうして事件の爲めに打ち挫かれてゐるこの老人の顔を見その聲を聴きながら、わがレオンチーヌは、あはれみの念で心が一杯になるのでした。彼女は遂に、自分の若さを未來を捨てても、この

老いたる偉人の爲めに努めてやらう、といふ念慮に壓せられぬわけには行きませんでした。彼女は、彼が嘗て申出てた彼とともに羅馬に赴くといふことを、はつきりと承諾いたしました。

然し、かうなるとわがシャトーブリアンは、却つて彼女のかうした申出を拒まずにはゐられなかつたのです。彼の理性は、年若き彼女を頽齡の彼の犠牲としてはならぬことを、今までも限りなく訓へてゐたのでした。彼は、この秀れた理性の聲の説くまゝ、彼女に縷々語り出しました。彼女もまた、その言葉に連れて己れの内心に響いてゐる眞の聲を、——己れの若さと未來とに對するその希望に充ちてゐる聲を、はつきりと聽きとることができました。かうして彼女は、容易にその羅馬行の申出を撤回することとなりました……。

八月の十九日、巴里をさして愈々コートレを離れようとする日の當日の朝、あわたししいなかに、彼はレオンチーヌに宛て、紙片に申認めました。——『もう嘆かないで下さい。人生のなかには決して固定せるものもなく停止してゐるものもないといふことを思つて下さい。私は再び貴女を見るてせう。私たちは再び會へるでせう。私は、見ざる昔と比べて何百萬倍とも知れぬ愛をレオンチーヌに感じながら今出發するわけです。私は彼女にボルドーから、さては巴里から書きませう。……』

八月の卅日に彼は巴里へ到着しました。そして早速、ド・ポリニヤック公爵の許へ大使を辭すると、いふ辭表を差出しました。あゝ、かくして、コートレの水邊で彼の夢見てゐた羅馬の新しい生活は、霧のやうに消えてしまつたわけだつたのです。わが『オクシタニエンヌ』が鐘の鳴りひびく僧院から日毎に花を持つては大使館邸の彼の許へと會ひに来るといふその美しい夢は、永久に實現せられずにしまつたわけだつたのです。——

一方レオンチーヌにはまた新しく結婚の話が持ちあがりました。相手といふのは、此前の時と引續いてド・カステルバジャック De Castelbajac 伯爵と呼ばれる名門の貴公子でした。當時彼女には、この人と結婚を望むだけの積極的の意向が無かつた爲めに、沙汰止みとなつてゐたその話が、今日また再燃したわけでした。それだけに彼女にとつては、この結婚の最終の決定は躊躇せられませんでした。彼女は、言ふまでもなく、シャトーブリアンその人の意見を尋ねて來ました。

シャトーブリアンの感情は、常にレオンチーヌの結婚に付いて、言ひやうのない反感と懊惱とを覺えずにゐられなかつたことは事實でした。然し、理性は遂にその感情を抑へて、彼をして賢い忠告者となさざるを得ざらしめました。御覽なさい、その年の十一月の半ばに書いた彼の手紙の一句

を。

「……レオンチーナは結婚せねばなりません。若しも彼女が、何物もの拘束を受けずして自由にするといふ決意を自らしたとならば、私は喜ばしく感ぜざるを得ません。私の側の僧院での生活といふやうなことは、私の生活に適はしい一つのロマンスに過ぎぬものだったのです。……レオンチーナには、おのれと一緒に長い間歩き続けることができ年若い伴侶が必要なのです。……」

が、この言葉のうちにも、——結婚せよとす、めるこの賢い言葉のうちにも、嵐の如く惱ましく亂れた彼の心のひそかに覗いてゐるのを、誰れが否定しませう。彼は、彼女に結婚をす、めながら、心ではその勧めに従はぬやうにと祈つてゐるのではなかつたでせうか？ 然も、レオンチーナは、この言葉をそのまゝに受け取つてしまひました。彼女は、シャトープリアンの勧める言葉そのまゝに、愈々、ド・カステルバジャック夫人を名乗ること、なつてしまつたのです！

○

レオンチーナの結婚後に於いても、シャトープリアンは尙ほ二十通にも餘る手紙を彼女に與へて

居ります。然しながら、この手紙のなかには、兎もすれば浮ぶ彼の心の曇りがそのまゝに現はれ出てゐるのは、致し方ありませんでした。彼女がある政治上の意見を彼に書き送つたときに、彼が與へた返事のなかの言葉を讀んで御覽なさい。——

「レオンチーナがこの度かうも間違つた判断をしたといふことは、私には許し得ないことです。私は、彼女が私の日頃思つてゐるよりは物事をよく理解してゐないことを、知りました。これは、既に結婚の影響です。二年まへの彼女ならば、確かにもつとよく判断したからです……！……」

あ、彼の心を絶えず占むるのは、かのコートレの水邊の夏の思ひ出でした。千八百三十二年になつて、なほ彼はかう書いてゐるのを御覽なさい。——

「如何にしてコートレの時は再び戻つて來ないのであらう？……」

が、コートレの訣別は、二人にとつては眞に永遠の訣別だつたのでした。夏が逝いて、秋が來たのでした。二人の間には時とともに次第次第に悲しい霧が立ち罩めて來たのでした。……

その後引續いて六年間といふもの、二人の間の手紙の往復は全く絶えてゐました。が、卅八年の夏（それはシャトープリアン七十歳の折でした）彼は南佛を歩いてゐた砌り、折柄トゥールズの

町に住つてゐた彼女夫妻を訪ねる爲めに、この町に立ち寄つて数日間足を止めたことがありました。

この際、ド・カステルバジャック伯爵夫妻は、彼の爲めに——彼の名譽の爲めに『盛大』なる饗宴をすら張りました。が、かうした饗宴のなかにあつて、一際深くわが老詩人の眼に浮んだ悲しみの色を、伯爵夫人は氣が付いたでせうか？ 兎まれ、十年の昔彼がコートレを立ち去る砌りにわが『アデル』に紙片を残して行つたやうに、この度も彼は『アデル』の爲めに次の言葉を書き記した紙片を残して、淋しく、トゥールーズの町を立ち去つたのでした。

『……貴女は、變つたのは、たゞ私の外面許りだといふことを知られたでせう。が、私とは反對に貴女は、すっかり内面だけが變つてゐられる。……』

然しながら、彼の心には兎もすれば懐しいコートレでの面影のみが、彼女の上を想ふ毎に先づ心に浮び上るのでした。そして、佻しい現實の姿を床しい過去の色彩で塗つてしまはうとするのでした。千八百四十年に、彼女夫妻の上にある財政上の破綻が生じて、永年持つてゐたオートリヴの古城を一時賣物に出さうかとしてゐる際に、彼は彼女に手紙を送つて、彼がその古城を彼等の爲

めに買つて遣ることができぬのを心から残念に思つてゐるといふ、優しい情愛に充ちた言葉を述べてゐるのを見ることができます。

が、襲ひ来る老の波の爲めに、彼の筆はその言葉のごとく、次第々々に働き難いものとなつてまゐりました。かくして、千八百四十二年の十月廿二日の日附を持つたたどしい文字にて認められた短かい手紙を最後にして、彼は遂にわが『オクシタニエンヌ』に書き送ることができなくなつてしまひました。……

○

この最後の手紙が書かれてから五年経つた四十七年の十月のある朝、パリはリュ・デュ・バックの質素な彼の住居を訪ふ者がありました。九十歳にも近い老齡の彼はその時、長椅子のうへに縮まり、暖爐の小さな焰と明け開けた窓からはいつてくる太陽の光とに温められてゐる所でした。訪ふて来た客は、實に彼女とその夫とてした。その邂逅の砌り彼の感動を、彼女は己れの手記のなかでかう書いてゐます。——

「……あゝ！彼の額は常にその榮冠を持つて居りました。私は、彼が二つの手を私の方に伸べて「貴女ですか！」、「C'est vous!」と言つたときの、その面貌の表情を永久に忘れることがないでせう。……」

數日後もう一度彼女は（今度は獨りて）彼を訪ねました。彼女はその手記に書いてあります。――「……私が暇乞を――最後の――告げました時に、彼は言ひました「私は貴女をほんとうに愛してゐました！」が、すぐと續けて言ひました「私はいつても貴女を愛してゐます！」涙が私の眼にのぼりました。……」

それから十箇月ほど経つて、わがシャトープリアンは終に不歸の客となつてしまひました。

○

レオンチーヌからシャトープリアンへと送つた數々の手紙は、當時一切彼の焚く所となつてしまひました。が、シャトープリアンがレオンチーヌに送つた手紙全部は、彼女自身の手記と、もに、ド・カステルバジャック伯爵家の筐底にその後固く秘め置かれたまゝ、今日に及んだわけです。それは、

亡きレオンチーヌの遺志でもあり、またその子孫に當る同家（今日の當主は、レオンチーヌの孫にあつてゐます）の世間に對するある思惑からであつたことは、容易に想像せられます。所が、本年になつて、ヴィクトル・ジロー Victor Giraud といふ知名な文學者が多年疑問となつてゐるオクシタニエヌの正體につき種々考證を重ねた結果、初めて、このレオンチーヌの名を世に公にするに到つたのです。伯爵家では、かくのごとく事實の一端が公表せられた以上は、むしろこの際進んで全部の文獻を發表して、一方事實を明かにすると、もに牽いて一般文壇の啓發に資するに若くはないと考へ、今回のごとき舉に出づるに到つたわけなのです。かくして世人は、シャトープリアンがその遺著『墓の彼方の手記』のなかに描いてゐる夢のごとく美はしい一つのエピソードの正體を最も明確に知り得た計りでなく、恐らくこの偉大なる人間の一生を通じての最も哀切なる魂の悲劇を（恐らく彼の作品以上に羅曼的なる）親しく讀むことができたわけです。我々はこの意味で、カステルバジャック家の措置を多とすると、もに、多年この問題の考證研究に従事して遂にその目的を達し得たヴィクトル・ジロー氏の人の立派なる功績に、ふかく感謝しなければならぬと思ひます。

（一九二五・一・巴里にて）

『浪に揉まるる巖のごとく』

— 詩人ピエル・ロチと女王カルメン・シルヴァ —

○
アンダイエ Hendaye といふ名前は、フランスの方からスペイン指して旅したことがある人ならば、知らずにゐられない場所だ。といふのは、この町はこの二つの國の恰度境になつてゐるのだから。税關のしらべ、旅券のしらべ、——かうした爲めに汽車は暫らくこの場所に停止する。多くの旅人は往然のまゝ、今更に窓の外を眺めるに相違あるまい。そして、松の多い丘を、丘越しのピレネーの連峰を、これも松の樹の這うてゐる海邊の巖を、その巖に續く碧い入江の水を、水越しの陸を、その陸の丘陵に立つ寺院の姿を、つくづく美しいものに眺め入るであらう。それに空が、旅人の足のもう南歐についてゐることをはつきり示してもするやうに、きのふ離れて來た巴里の空とは違つ

て何と眩しく輝いてゐることであらう。……

またこのアンダイエの名は、『お菊さん』を繙いたことのある極東から來た旅人の耳には一きは懐かしく響くに違ひあるまい。それは、こゝにこそ『お菊さん』の著者ピエル・ロチの住み馴れた家があつたのだから。こゝでこそ、わが情痴の詩人が繪のやうなバスクの山と海とに取圍まれた自然と人生とにひたりながら、快くも物悲しい冥想と制作との日の數々を送つてゐたのだから。

自分は、この町を何年かまへにも汽車の窓から眺めて通つたものであつた。一度降りて風光の秀れたこの静かな海村を見て置かう、詩人の棲家の邊りを彷徨いても見よう、——かうした考へは、その時からあつた。それが、この春ふとしたことでスペインまで出掛けねばならぬ用事が出來、その歸り途に半日計り暇があつたので、かねてからの願ひを果さうと、恰度美しく晴れた日の正午近く、巴里へと直行する汽車を後にして、この土地にはじめて足を踏み入れたのであつた。

○
驛の近くの繪葉書屋で、ロチの住家は？ ときくと、店の外まで出て教へて呉れる。埃つばい大

路をすこし行くと、大きな鐵橋がある。その鐵橋を渡つて、直ぐ左に折れる。だらだら坂を降り切つたところに、ペンキ塗りの建物を背にして制服をつけた税關の役人が、香氣さうにパイプで煙をはきながら小犬と一緒に日向ぼっこしてゐる。すぐ前が海だ。ロチの家は？ とまた尋ねる。片手のパイプで、すぐうしろの高見になつた繁みの邊を指して、すぐそこだと訓へて呉れる。税關小屋の横道の小さな坂道を一寸上つて行くと、……ロチの家として繪葉書に出てゐる通りの建物があつた！ 道からは半分崖の方に下つてゐる建物がそれだ。扉も、門もしまつたまゝ。おや、ピアノの音がなかからきこえる、と思つたのは實はその隣りの家からだつた。ロチも生前やはりこの隣家のピアノを聞いたのだな、と思ふと何かなしに鳥渡立ち止まつて、耳をすます氣にもなる。二階建のこの中古の人の棲まぬ建物を圍んで庭には樹と草花とが初夏のよそほひを凝して豊に繁つてゐた。建物は眞正面に海に向いてゐる。右手についてゐる小徑を足許に氣を配りながらだらだら降りて行くと、海邊の石ころ地に出る。ロチの家は、すぐ頭の上になる。家のなかから直ぐこの石ころ地に降りられる徑が出来てゐる。

そこに立つて暫らく建物の様子を眺めてから、その邊のあり合せの石に腰を卸した。そして、ボ

ケットから煙草を出した。陽の照り翳りする海を見ながら、海越しに見える前面の陸のうへに建てられた形のいい寺院の姿を眺めながら、自分は無心になつて煙をはいた……。

無心——しかし心はいつか自然とロチのことに戻つて來た。自分は、一時間近くもぼんやりと、この石のうへに腰を卸してゐたものだつた。(おゝ。この石のうへにロチ自身も屢々腰を卸ろさなかつたとは誰が言へやう！)

年少の時に讀んだあの『氷島の漁夫』が頭に泛ぶ。『お菊さん』『日本の秋』さては『お梅さん』と言つた数々の日本紀行が——我々にも最早異國になつたとも言へる亡びた昨日の日本の姿が、それからそれへと泛ぶ。スタムブルの悲しい廢滅の跡を描いた『東邦の幻』が『アジアデー』が、『幻滅』が、さては脆くも破れ果てた夢の町を歌つた『ジュレサレム』が泛ぶ。今自分の足が踏んでゐるバスクの土地を背景としてゐる哀篇『ラムンチョー』が泛ぶ……。

長い間に讀むともなく讀んでゐた数々の彼の作品が、そのなかの物悲しげな眼尖の人物と溜息を洩してゐる自然とが、それこそ『幻』となつて急に自分の頭のなかに動き出すのを感じた。自分分は、眼をあきながら夢を見てゐる想ひであつた。

アンダイエの訪問から間もなくのことであつた。巴里の街のなかのぶらぶら歩き、不圖足を止めた本屋の店頭で、自分の眼はゆくりなくもある雑誌の表紙に刷られてゐる目次に牽かされた。「ビエル・ロチとカルメン・シルヴァ」——これが、その目次のなかの題であつた。カルメン・シルヴァと言へば、日本にあつても知る人は鮮くあるまい、あの大戰の始まつた頃にみまかつた、詩人女王として聞えてゐるルーマニアの女王エリザベスの雅號である。「未だ曾て世に公にせられざりし想ひ出とその資料と」、——かう傍註してあるだけでも、最近に『ロチの土地』を踏んで來た自分にとつては何がなしに興味を引くものがあつた。自分は、この雑誌を手にして、家へ歸つた。

……頁を切りながら讀みはじめた自分は、一頁二頁三頁と進むうちに、それこそその文章のなかにすつかり吸ひ寄せられてしまつた。そこに描かれてある事實は、——この世の最も確かな事實でありながら、ロチ自身が美しくも哀しくも描き出した夢の世界のそれとすこしの相違さへなかつたのではないか？ 否、ロチその人、カルメン・シルヴァその人が現實の人であるだけに、さて

は、その物語が嚴かな一國の宮廷を背景としてゐるだけに、讀者の興味はむしろ一しほ緊切であり、直接であるとも言へる。

兎も角自分は、この想ひ出の記を言は、息も吐かず一気に讀んでしまつた。終末が餘りに速かに來たことさへも感じた。自分はあのアンダイエのロチの棲家の下で海のまへにぼんやりと煙草を吹かしてゐるやうに、再びこの文章をまへに、限りのない追憶と、郷愁の想ひとをくりかへしたのであつた。

この一篇の文章の筆者は、身親しく詩人女王に仕へてゐたレオポルド・ステルンと稱ばるるルーマニア人である。掲載せられた雑誌といふのは、『フランス評論』七月號にほかならない。自分の以下の文章は、この雑誌を手にし得ない多くのわが讀者の爲めになされた、粗末な解説に過ぎないものであることは、改めてことはるまでもないであらう。また以下の文章中に自分は自分とは書いてあるのは、筆者ステルンを指してゐることも亦言ふを要しまい。

今日のフランスの文壇にあつて秀れたる閨秀文學者の一人として相當盛名を諮はれてゐるエレーヌ・ヴァカレスコ嬢が、ルーマニア人であることは、わが日本に於いても知る人は鮮くあるまい。

この人は一時カルメン・シルヴァ、——否ルーマニア女王エリザベスの傍近く奉侍せる女官の一人であつたが、曾てこの女王の制作になる『エホヴァ』、『Jolova』と題した詩を、佛譯したことがある。出來上つたその佛譯の冊子を彼女は女王の允しを受けて、ピエル・ロチに送つたのが、言はゞこの詩人と女王との間の『橋』を築くこととなつたのであつた。

『エホヴァ』を受取つたロチは、その翻譯者に多大の賛詞を呈するとともに、この作品にあふるる魅力・直感の力に強く打たれたる旨を、ヴァカレスコ嬢あてに言ひおこつた。そして、自著『氷島の漁夫』に、あつき獻詞を書き記し、これを女王に捧げられたきおもむきをも書き添へておくつたのであつた。

『氷島の漁夫』は女王の心を動かさずには置かなかつた。この氣高き悲しみを盛れる作品があらゆる讀者の心を捉へるは不思議はないとしても、その生涯にふかき悩みを味つた者の身には一しほ迫るものがある。人類の魂のなかの悲しみを、人類が永遠に探し求むべき理想を、しかも辛うじ

て見出したたりと思ふ瞬間に早くも去り行くその理想の影を、かくまで讀む者の胸に迫る筆をもて描き出す作者を、なやめる過去を持つて誰が愛せぬわけに行かう。

陽に誇る牡丹の花のごとき女王の身にも悲しみの過去があつた。彼女は、この世なる唯一人の愛兒をば過去に失つてゐるのだつた。彼女が掌中の珠と愛し育てた王子の死が彼女の心に残した空虚は、その後如何なるものに依つても充たされることはなかつた。爾來悲しみの厚きヴェールは、女王の全存在を蔽ふてゐた、と言つてもよかつた。彼女の書いた詩を讀んだことがあるものは、これほど熱き母性の愛とその涙をもて歌はれた詩が他にあるかを、疑はずにゐられまい。彼女自身の言葉に言ふ。——この世に存在する最も美しき言葉こそは、『母』なる言葉！ と。

『氷島の漁夫』が、この女王の心を強く動かしたのは、當然すぎるほど當然であつたと言つていい。同時に、この書が女王の心にその著者と相識るを得たいといふ望みを起さずには到つたのも、些かも不思議はないと言つてよからう。

この望みは、間もなくロチの許へと通じられた。同時に女王の賓客としてルーマニアへ來るやう正式な形で勸誘状も發送されることになつた。

、ロチはこの懇ろな招待に加ふるに、當時女王が己れの著『氷島の漁夫』を自ら獨逸語に翻譯されたことをさへ聞き知つてゐた。彼は、忝くこのお招きを御受けすることとした。

かくしてロチがルーマニア宮殿の離宮となつてゐるシナイアへ着いたのは一八八七年の秋であつた。女王との初対面はこゝで行はれたのである。

女王は、當時を追憶して自分（ステルン）に語られた。——『その生涯の大半を荒浪のうへで過し、異常な冒険のかずかずを経験してゐるのにもかゝらず、この人（ロチ）は内氣でした。

新しい人の前では常にこの人は蝸牛が匿れるやうに、その心を堅くしめてしまふのです。その心を開かせ、その舌をほぐさせるためには、長い時間か、それとも特別の好意が必要なのです。

で、わたしたちは何時間も知らない人同志のまゝで過しました。が、結局わたしの腹藏のないおしゃべりが、間もなく凍つた氷を溶かすことになりました。最初の日の晩、わたしたちの話振りを傍で誰か聽いてゐる人があつたとしたら、おそらく二人は昔からの友達だと思ひ誤つたこととせう。

ロチはあとになつてわたしに申しました。わたしの聲が彼に打ち勝つたのだと。それならわたしを牽き附けたものは何かと言へば、彼の眼でした。その眼は子供のやうに善良さに充ち、愛着に

充ちてゐました。その眼は、彼が出逢つたあらゆる惱み、彼が流したあらゆる涙がそのまゝ、判るやうな眼でした。その眼は、彼がかくさうとしてゐるにも拘らず、はつきりとその心の美しさが寫つてゐる眼でした。……』

この日から續いて二人の男女の姿がシナイアの年経た森のなかに朝夕見らるるやうになつた。二人は恰かも長年離れてゐた古い友達同志が久し振りで邂逅したさまにも似てゐた。追憶の數々が二人の唇から洩れてゐるのであつた。

カルメン・シルヴァは、一刻も忘れ得ないその母の悲しみを物語つた。

女王は自分に語られる——。

『その時、わたしはロチの眼に涙が——ほんとうの涙が輝くのを見ました。彼はその愛してゐた母のことを語り出しました。それから、その幼時を、その少年期の苦い一切の想ひ出を。かうした言葉毎に、かうした打明け話毎に、二人の間の極く新しい友誼が、二十年も續いた友誼に變つて來るのでした。

彼は、その母についての最初の想ひ出として持つてゐるものを、わたしに話しました。

それは、彼が三歳になつたある朝のことだと言ひます。長い病氣から漸く治りかけた頃だつたさうです。母が彼に花と果實とを持つて來ました。彼は今になつてもはつきりとその時母の肩にしてゐたシヨールの色を覚えてゐると言ひます。そして、母に床のそばに坐られて感じた安心の思ひを、覚えてゐるとのことです。

わたしはロチに、かうした一切の想ひ出を詩にお書きなさいと勧めたものでしたが、詩は自分の得意とするところではないと答へました。然し散文でこの幼時の想ひ出を書かうと約束しました。實際その約束通り、彼は『二幼児の物語』と題して、シナイアの散歩で語つたその想ひ出を公にしました。

この作品こそは、ロチの書いたものうちで最も美しい一つと思ひます。殊にその母について書いた章節は、おそらく母を題とした一切の世の作品のなかで最も美しい頁と思ひます……。

ロチはシナイア離宮を訪ねてからあと間もなく、わたしの作品をフランス語に譯して公表しました。『モシユとババ』 Mochou et Baba 『小兒ミシユ』 Michou, l'enfant がこれです。ロチにとつて他人の作品を翻譯をやつたといふことは、これが初めて最後のわけです。——』

○

一九〇八年の三月のはじめ、エリサベス女王のお召して自分は、首都ブカレストの宮殿のなかにある女王の特別圖書室のなかで、拜謁した折である。(女王は平素儀式めかない接見にはこの圖書室を用ひられた。)その砌、女王は、『氷島の漁夫』の獨逸譯の頁を捲つてゐられた。

型通りの御挨拶から、自然話はビエル・ロチの作品のことに落ちた。女王は、熱心な調子で、ロチの作品のうち一番傑作なのは『ラムンチョー』だらうと、言はれた。

自分は恰度最近に『幻滅』を讀んだばかりだつた。で私は『幻滅』の方が好きでございませう、と答へたものだつた。

この言葉を聽かれた女王の眼は、見る見る悲しみのいろに曇り、暫らくの間はお言葉さへも無かつた。やがて、その眼尖は遠き邦——想ひ出の數々の邦より歸り來たもののごとく漸く自分の方へ向けられた。そして唇を開かれた。——『わたしもこの『幻滅』の傑作だといふことは聽いて知つてはゐますが、が、未だ讀んでゐないのです。如何して讀んでゐないかと言ふと……わたしはこの

本を持たぬからです！」

この不思議な説明の仕方、それと怨みがましいその時の聲音、自分は鳥渡女王に答へる言葉が出なかつた。この本を持たぬから、私は読んでゐない！ だつて、ブレカストのどんな本屋にでもこの本は店頭にずらりと並んでゐるではなかつたか！ 女王が一言仰しやれば直ちにお手許に届くのは、判り過ぎたことだ。それなのに……

女王は、自分の當惑を推了されたらしく、悲しみの聲音のまゝ、續けられた――。

『昔はロチはその著書が出る毎にすぐわたしに贈つて呉れたものです。その贈りが絶えてから、二十年になります。』

女王は再び口をつぐまれた。が、お手許の『氷島の漁夫』の獨逸譯を自分の方に差出しながら、再び言葉を續けられた。――

『一體翻譯の仕事といふものは自分の心に神興はあふれながらもそれを紙に見事に寫し得ぬ人の爲す業か、さては己れの名を著名なる作家の名と並べて書架に連ねられんことをのぞむ青年の爲す業かに外ならぬと言へるでせう。わたくしが、その前者にも後者にも屬してゐぬことは、知る人ぞ知

りませう。それなら、何故『氷島の漁夫』を譯したかと言へば、わたしが書くことができるだらうと思はるものとロチ自身の書いたものとを比較して、結局ロチの書いたものに一層の美しさがあることを卒直に認めただからに外なりません。この靜穩な雰圍氣のなかに幾許かの時を送りたいといふ望み、ロチに依つて達せられた思想の高所にまで自分自身を高揚させやうとする望み、さては特に、この秀れたる作者の著書に依つて獨逸文學を豊かにしやうとする望み、――この望みがわたしを翻譯者としたわけなのです……。

かゝるわたしですもの、ピエル・ロチの作品を彼の手から直接受けるといふことが、限りなく貴かつたといふことが、お判りでせう。わたしにとつては、彼の作品はわざわざわたしの爲めに書かれたやうな氣さへするのです。わたしはこの人の書物のことを周圍の者たちと話すのさへ不本意に感じることはありません。かうしたわたしが、ロチの著書を金を出して本屋の店頭から買ふなどと言ふことは、あらゆるシャルムを破つてしまふことではありませんか！ 思つてもいやです！

が、ダムボヴィツア河畔のこの忠實な愛讀者を彼が忘却してしまつてから何といふ長い時が経つたこととせう。……』

女王は、かうした謎のやうな言葉が自分に理解できないのを急に悟られたらしい、熱いそして強くひびく聲音で、おのれの心を自分のまへに露はに開かれはじめたのであつた。

『相互に招く尊敬と讃賞との上に築かれた友情が、我々を結びつけたのです。』

ロチは一八八七年にシナイアの離宮に賓客となり、更に一八九〇年にブカレストの宮殿に賓客として見えました。そして最後に我々が相見したのは翌くる年一八九一年ヴェネチアに於いてでした。この水郷でこそわたしは、—— 悩みに充ちてこそ居れ、高きもの秀れたものに渴いてゐたわたしの心は、ロチの魂の底ふかく藏されたる一切の寶をば認めることができたのです。我々の友情は、何等の染みのない二つの良心の結合であつただけ、どれほど美しいものであつたこととせう。それに兎もすれば筆を持った者同志に有り勝ちな狭量とか嫉妬とかは、二人の間には全く知られないこととしたもの……。

わたしは、自分の書いたものを屢々ロチのまへで讀みました。これ等のあるものは後になつて公にしましたが、またあるものは紙屑にまるめてしまつてシナイアの森のなかへさしてはヴェネチアの沖の青い浪のうへへ捨ててしまひました。この讀誦の間、ロチはいつも好意に充ちた讃賞を自分

分に示して呉れたものでした。併し、この讃賞はおそらくはわたしの書いた作品そのものためと言ふよりも、この讀誦に牽かされて彼の感じ易い、寛大なそして伶俐な心が更に高所を夢見た爲めだと思つてゐます。

ロチがブカレストの宮殿に滞在してゐる折のことでした。ルーマニア宮廷のなかに一つの愛のロマンスが起りました。そのロマンスの美しさは、ふかくロチを動かさずには措かなかつたのです。

それは、皇太子がわたしの傍の女官の一人を戀されたことなのです。この愛を見てわたしは母らしい心持でそれを育くむ氣持になりました。また國王陛下御自身も、最初のうちは好意に充ちた同意をば示されたものでした。しかし、それに反して、わたしの周囲の人たちは、この優しい牧歌をばいい眼をしては見なかつたのです。

いつか人々は二つの黨派に分れるやうになりました。數の上では大勢の人々がこの結婚に反對といふことになりました。そして結局わたしはほんの二三人の人たちとともにその相手に立つといふことになつてしまつたのです。……

今日になつて見ると、この愛のロマンスの結果、一番ふかくまた一番ながく苦しんだものは他な

らぬわたしだつたといふことになりました！

あゝ、その時のことを憶ひ出すと、今まで折角忘れやうとつとめて来た心の古傷がまた開く氣持がします。この話はもう止めませう……。

が、何故その惱ましかつた時代のことを今話し出したかと言ふと、この時代にこそわたしとロチの間の友情の終りが来たからに外なりません。終り！ 然しそれは表面だけのことで、實際では一刻と雖もその繼續を止めなかつたことは申すまでもありません。

ロチは、偶然このロマンスの傍觀者として立ち合つた形になりました。またこの出来事の結果、わたしが苦しんだこともよく承知することになりました。わたしが犠牲になつたといふその不正に對する憤懣の念から、わたしに對して人々の意地悪さが發明したあらゆる荒唐無稽の風説に對する慷慨の念から——最も意地悪くない人てさへもわたしが馬鹿になつたと申しました——ロチはフランスへ歸るや否や、この無辜な者の爲めに世にも美しい辯護の文章を書いたのです。「追放されし女」と題する本がそれです。その巻頭にある『カルメン・シルヴァ』の一章を讀んでも御覽なさい、現存する人間についてこれほど甘美な色で、これほど寛やかな眼で描き出したものが他にありませう

か！

しかしロチは、この愛の物語には王者の惱み歡びが縊り交つて居ること、それらは自からなる忘却の浪に委すべく決して公に書くべきものではないといふことを、忘れたのでした。王にとつて、また王妃にとつて、人並みの心を持つといふことは許されぬことなのです。假に持つたらどんな不幸が来るか！ 王者は、たとへその魂に死の刻印がついたときでも、常に永遠に微笑の假面をかぶつたまゝでゐなければならぬものなのです。

ロチがこの『追放されし女』のなかに描き出したものは、シナイアの、ブカレストの、さてはヴェネチアのあらゆる想ひ出のなかにある一人の夢見勝ちなる物悲しき幻滅の女王だつたのです。その女王の姿を通して、今まで人々が大聲に語るを憚つてゐた、宮廷内の祕事をばまざまざと描き出したのです。

ロチは、わたしに味方せんとして却つてわたしを一層不評と憎悪とのまへに暴露することになつてしまつたのです。

ブカレストの宮中は、この著書の爲めにどんなに騒ぎを大きくしたか想像が付きませう。殊に、

出来事は外國の都市の新聞にまで掲載されるやうになつてしまひました。かゝる騒ぎは勿論國王カロール陛下を御不興にせずには措きません。ビエル・ロチとの交渉を絶てとわたしに仰せられたのは無理からぬことでありませう。

これが、二十年に亙つて最早ロチを見ぬのは固より彼から一行の文字さへも受取れなくなつた理由なのです。——』

こゝまで語り續けられた女王の面輪に、この時、不意に、言はゞ子供が悪戯をする時に泛べる微笑に似たものが泛んだ、と見受けると等しく、女王は唇を開かれた——。

『いい考へが浮びました。一つあなたからビエル・ロチに、わたしが『幻滅』を讀みたがつてゐるといふことを書いて下さい。そして一部おくつて呉れるやうにと！』
自分は、女王にお約束したうへ、御前を退去した。

翌くる日、自分は、ビエル・ロチあてに手紙を認めた。その手紙には、きのふの女王との接見の

こと、女王が彼に對して保つてゐられる眞摯で深い友情のことを縷々述べた上、『幻滅』の送本を女王が望んでゐらるること、ペンを結んだ。

一九〇八年の四月卅日、ロチから『幻滅』一部を送つた旨通知があつた。その本を手にするや否や、自分は早速女王に謁見を願つて、御手渡した。女王は、心からの歡びをもつてこの書を受取り、第一頁に書いてある著者の書いた献詞を讀まれてから、唇を開かれた——。

『あゝ、長い年月を経てから、こゝに再びロチの書いた文字を見ました。それにしても、あの時以來、何といふ多くの事柄が過ぎ去つたこととせう！ 恰度十七年まへのわたしに比べて、今日のわたしはどんなに變つたこととせう。あの日以來、踏み來つた途は！ その途々で落ちて來た多くの夢は！……』

『幻滅』！この言葉こそ取りも直さずわたしの今日の感想です。あゝ、若しわたしが今までの思ひ出の記を書くとしたら間違ひもなく『幻滅の女』といふ題にします』

この時の女王の眼には思ひなしか自分には一滴の涙が光つたやうに思はれた。
『わたしの返事をロチに届けることにして下さい』

かう女王は言つて、御自身の一枚の寫眞を持つて來られ、それに、左のやうな文句を、朗らかに正しい筆勢もて認められた。

“Mille fois merci, et tout mon souvenir, comme un roc dans les Hots.”

『限りなき感謝と浪に採まるる巖のごときわがあらゆる憶ひ出とを』

この數語のうちに、わが女王カルメン・シルヴァのロチに對する友情が浪に打たるる巖のごとく、離別に堪へ世の姦曲に堪へ、二十年の歲月を閱みして些かも變らぬのを見ることができやう。

○

これ以來、一八九一年から一九〇八年の間絶えてゐたロチから女王への獻本は再び續けられることとなつた。それ等の本はいづれも直接自分へ宛てて送られた。

自分がこれ等の本を女王のまへに捧呈するとき、その歡びは限りなかつたと言つてよかつた。先づ女王は、言はゞ古い墓地から掘り出したタナグラの像を古物蒐集家が愛撫するやうに、その本を両手のなかで暫く愛玩せられる。それから熱のあるやうな手附きて頁を切られる。時とすると、氣

ままに開いた頁を高聲で讀みはじめらる……。

女王の聲の抑揚と魅力とは何を以てたとへ得やう。それを聴く者は數刻にして現實を忘れてしまふと言つても過言ではあるまい。女王の唇から洩れる其等の言葉は、限りなく優しい音樂に化するかに見える。ロチ自身も、このことを『追放されし女』のなかで書いてゐる——。

『陛下が宮廷の婦人たちのまへてわが著書のなかの數節を讀まるのに自分は臨んだことがあつたが、自分はそれが自分の書いたものだといふ氣がしなかつた。——といふのは、それ等の章節は遙かに美しくまた姿を變へて自分のまへに現はれたから。』(同書第十三頁)

また言ふ。——

『彼女(女王)は、寺院の靜かなる音樂のごとくに、聴く者の心を揺り慰むるやうに讀まれる。聴く者はたゞその聲音さへ耳にすればいいとの感じまで起させられる。よしやその讀ませられる本が面白からぬものであらうとも、聴くを依然悦びとするに違ひあるまい……』(同書第十頁)

カルメン・シルヴァからも亦その著書は間違ひなくロチの許に届けられた。『アリウンド』Alimundeと題した本を送られたときに、ロチが女王に宛てた手紙は以下の如きものである——。

「……陛下より小生へお送り遊ばされた『アリウンド』に對して衷心から感謝いたします。拜讀いたしました。曾て得知らぬ高らかなる静和と優雅とを感じました。小生は、僅かなる自由の時を割きて御作品を緩やかに拜見しました。小生は、あのヴェネチアのゴンドラのうへで陛下が『心の書』の數節をお読み遊ばした遠い昔のことをゆくりなく思ひ出しました。かのゴンドラの宵以來、既に世紀の四分の一は經つてしまつたのでございます。あゝ、わが生涯は殆んど全部わが背後のものとなつて了ひました。この世にて再び陛下に拜するの折なく、御聲を再び耳にするの機なく、わが生涯が終ることかと今更身に沁みて考へられます。

ヴェネチア以來、如何に多くの事物が小生のなかに、また小生の周圍に變り果てたこととてございませう。また如何に多くの親しい面輪が消え失せたこととてございませう！ しかも幾多の新らしき面輪が虚無から泛び上りました。

小生はこの書箋のなかに一砲兵下士官の寫眞をお入れいたしました。これは小生の息サミュエルでございます。あのシナイアの女王のお机のうへに置かせられた六ヶ月の幼兒と同人なのでござります……。

陛下に向つて最大の尊敬を披瀝仕ります。

ピエル・ロチ

女王は、この手紙を涙をもつて讀まれた。そして自分に向いて言はれた。——
『わたしはあなたにこの手紙のコピーを取ることをお許ししますから、わたしがこの世を去つたあとで、ロチとわたしとに關する幾つかの憶ひ出を加へてこれを公表なさい。われ等が持つかゝる美をすこしても他人に頷つことは、われ等の義務とも思ひます。わたし限りに藏つて置くにしては美し過ぎると思ひます。……』
自分が今回この稿を起したのは、この女王のお言葉に依つてであることは、言ふまでもあるまい。ともかく送本は引續ききちんきちんと行はれることとなつた。

一九一二年の十二月のことである。ブカレスト宮殿のなかで行はれた晝の音樂會に招かれた自分は、その終りに近づいた頃、女王から何等の前振れとしては無しに以下のやうな御指圖を受けた。

これを自分に仰せらるるまでには、女王は充分にもお考へになつた末と見えた——。

『是非もう一度ピエル・ロチをこのブカレストへ呼びたいと思ひます。それが容易でないことはよく別りますが、あなたならばそれを試みることできやうと思ひます。あらゆる障礙に打克つためには、先づもつて國王陛下とピエル・ロチとの間の融合に到達することが肝腎です。その爲めには今が恰度いい時機のやうに考へました。わたしの考へた方法といふのは、かうです——。

あなたも御承知の通り國王は今回學生圖書館を増築することになつてゐます。このことに國王御自身大層身を入れておいてのことはまたあなたの御承知の通りです。この増築が愈々完了したといふ曉には、公式な式典があることと思ひます。どうか、あなたから、ロチあてに手紙を書いて、彼の全著作を特別装釘とし、自筆の献詞を入れて寄贈するやうに言つて遣つて下さい。その本が届いたら、あなたは著者の尊崇の言葉を持つて國王陛下に御渡しなさい。それから事件は獨りて進行させよう。かくして凍氷が破れ、普通りにロチがこの國に来ることができるやうに、わたしは切に望みます。』

一九一三年の正月、自分はこの女王の意思を實行した。二週間経つて自分の手許にロチからの返

事が届いた。それを讀むと、——

『雜事にかまけて返信が遅れたことを御宥し下さい。その上、御断りの返事を差上げるといふことを、お詫びする次第です。』

小生は久しい以前から最早國王の御好遇には遠ざかり居る者です。従つてお申し出での如き送本を爲すとすれば、陛下は甚だ怪訝に覺し召され、御受納遊ばさぬは必定と存ぜられます。

さはれ女王陛下に對しては常に變らぬ讚仰の念を抱き居ります。過般もその御著作の一つを頂き深く感佩いたし居るところです。願はくば陛下に小生のふかき感謝の詞をお傳へ下さるやう。敬具』

この返事は女王に失望を與へたが、それでも落膽されなかつた。自分に命じて、もう一度ロチに書くやう、——それには、國王はその贈り物を拒絶されるが如きことはあり得ぬ計りではなく、必ず歡んで御受納になるに相違ない旨を言ひ送るやう、にとのことであつた。

然し結局今度の返事も以下の如き言葉で終つてゐた。——『……國王陛下御設置の圖書館に小生の著書を贈呈するの件は、其後更に熟慮いたしました。熟慮を重ねるほど益々不可能なることを感じ來る次第です。従來の國王の小生に對する御態度を思ひ合せれば、小生の著書贈呈の擧が必ず

國王をお驚かし申すこと疑ひを容れませぬ。國王は必ずや小生を目して傍若無人の徒となし受納をお断りのことと存ぜられます。

但し若し尊臺自身に於いて小生著書御希望とあらば、御指定を俟つて欣んで御送りいたす所存で居ります。

敬具

カルメン・シルヴァは、この二度の断りの手紙でも所志を捨ててしまはれなかつた。更に別途の方法を考へ出さるることとなつた。

やがて夏が来た。自分はお呼びを受けてシナイアの離宮に参内した。散歩からお歸りになつた國王陛下のまへで、女王陛下もおいでの席上、自分は、今度御増築の王立圖書館の爲めにフランス翰林院士ピエル・ロチの著書を御受納遊ばすか否かをお尋ねした。

國王は、自分の心中を探るがごとき眼尖にてちつと自分を眺められた。自分はこのお眼尖に逢つて身のすくむ感じがした。國王は我等の小さな目論見を洞破されたかに見えた。自分は、女王からのお助け船をも豫想しながら、國王の御返事を唾を呑んで待つたものであつた。

自分の方を暫く見詰められてから、國王は手にお持ちになつたステッキで絨氈のうへにぐるぐ

と唐草模様を描かれ、さてそのうへ世にも自然な調子でかう自分に話しかけられたのである。――

『あなたは、シナイアへ一寸だけ立ち寄つたのかね、それともこゝでずっと夏を越すのかね？』

かうした時間の間、お側にゐられたカルメン・シルヴァは、と言へば、國王陛下の日常の御動作の隅々までも御承知のこととして、自分が陛下のまへに開陳した質問にも、さてはそれに對する（自分には思ひ掛けない）陛下の御返事ぶりにも、一向お氣に止めてはゐられぬらしい素振りを現はしておいでになつたものだつた。たゞお膝のうへにおおのせの本の扉のうへを視凝めておいでなまゝであつた。

いくら待つても國王のお言葉はこれだけであつた。勢ひ自分は、シナイアに何時まで滞在するかといふやうなことの會話に移るほかに方法はなかつた。ピエル・ロチのことを新しく持ち出すことはもうできなかつた……。

かくして我々の計劃は憐れにも水泡に歸してしまつた。従つて、ピエル・ロチがルーマニアに再び來るといふ望みは全く失はれてしまつたのである。

一九一三年、女王はその七十年御誕辰の式を挙げられた。

前記シナイア離宮の出来事を知らう筈はないロチは、この祝典に當つて以下のやうな書箋を女王へ當てて送つて来た。

「遠くより、杳か杳か遠くより、常に小生は陛下の御生涯の吉凶夫々を注意して怠らない者でございます。

小生は今次七十年目の嚴かなる日附を心得て居りました。この日こそカルメン・シルヴァのお眼に陽の輝きがはじめて映り、爾來、その静麗な内心にその輝きの消えざることをご心得て居りました。これ等一切に、小生の心は感動と感謝と充ち居る次第でございます。わが想ひ遠く離れ居るだけ、この場合、更に附加すべき言葉を存じませぬ。たゞ、陛下の膝下に跪坐し恭獻する小生の深甚なる尊崇の念を御受納下さいませぬことを願ふの外はございませぬ。

頓首

この書箋を受け取られた女王は、ロチに送るやうにと一葉の寫眞を自分に渡された。それはこの

七十年御誕辰の機會に方々から贈られた花の浪のなかに立たせられた女王の姿であつた。その寫眞の下に、鉛筆をもてかう書かれた。

『數多く向けられし愛情のなかのわが七十年の誕辰。』

エリザベス

この寫眞を自分に差出されながら、女王は言はれた——
 『この寫眞をロチへ送つて下さい。おそらく彼の眼尖はこの寫眞に寫つてゐる老女の姿のうへに滑りながらも、そのかみ、わが賓客として彼が來てゐたときの、同じわが誕辰の日に居合せてこれとひとしい花の浪に埋つてゐたときの、今の姿とは違ふわたしの姿を想ひ出して呉れることと思ひます。すつかりあの時の通りです……たゞ變つたのはわたしだけです……！ あのときから二十年近くになります……！』

翌くる年は一九一四年だ。この年にあの空前な人類殺戮の歴史がはじまつたことは言ふまでもあるまい。

わが女王カルメン・シルヴァが永久にこの世を去られたのは一九一五年、この大戦の勃發間もなくのことであつた。夫君カロール第一世陛下の崩御されたのと、その間僅か數月の相違でさへあつた。一九一七年ピエル・ロチは身は老いて到底軍務に服する力は無かるべきにもかゝらず、重ねて願ひに依つて特に戦線に立つを許され、伊太利國境の戦地に屯する身の上であつた。かくしてある日、彼は憶ひ出のこもるヴェネチアの水のうへにあつた。こゝでこそ、三十年の昔彼とカルメン・シルヴァとの最後の邂逅が行はれたのではなかつたか？ 今は既にこの世にない女王の面影を偲びつゝ、あの薄寒い水郷をあちこちと彷徨する老いたロチの心ほど、身に沁みるものはどこにあらう……。彼の『獨逸の醜惡』を讀んだものは、そのなかの次の頁を、深き感慨なくしては讀み得ぬに違ひない。

『……自分の宿は、ホテル・ダニエリ Danieli にとつてあつた。この宿は、戦争がすべての外國からの巡遊客を追ひ散らしてしまつたあとに残つて開いてゐる唯一のホテルであり、同時にヴェネチアの華麗な宮殿のなかの一つとして歴史的のモニュメントである計りではなく、この場所こそは實に今を去る昔わがルーマニアの女王のお側近く自分が楽しい日を送つた所に外ならぬのであつた。指

折り數へればそれは最早三十年以前の昔となつてしまつてゐる……。

それにしても、お氣の毒な女王！ 女王の一生はたゞ長い榮華につゝまれた惱みに過ぎなかつた。さればこそ、こゝで眺める一切のものに喚び起さるる女王への憶ひは、言ひやうなき憂愁の想ひである。女王は、誠實で善良で、人事のあらゆる不幸に限りのない同情を持ち續けられ、最も貧しきもの最も卑められたるものをわが心に抱きて暖めんとせられてゐた。これを知らんと思ふものがあれば、行きすがりにわが女王の一瞥の眼尖を見ただけで事足りやう。今は不倶戴天の敵の蹂躪にまかせ居る土地なる墓に眠つてゐられるお氣の毒なるわが女王は、恰度獨逸がその假面を脱ぎ捨てて惡魔の面相を世界に示せる世にも淺ましき幻滅より遁れんとして逸早くこの世を去つてしまはれた譯だ。かくも美しかりし御魂が、この罪惡、この邪猛、この反逆、この虚偽に直面されたとならば、どれほど惱ませられたことであつたらう。……』(同書第一三四頁—第一三五頁)

然し、かくも強く女王をいたんだロチ自身でさへもがこの世の人ではなくなつてしまつてゐる。残つてゐるものは、と言へば、それこそ『浪に揉まるる巖』のごとく、三十年間の長き歲月にも堪へ數々のこの世の事變にも遭遇してなほ離れなかつたこの二人の美しい友情が、彼等の死後もま

た忘却の浪のかなたを越えて、いつまでもこの世の感じ易いものの胸にやさしく響くその音を絶つ
まいこの憶ひ出の一篇のみではなかつたらうか——（一九二七・冬・北歐の水都にて）

『ポンペイ最後の日』

——リットン卿とその妻ロジーナ——

○

一八〇七年のこと、ブルワー將軍はその妻と三人の男の子を残して突然この世を去つた。寡婦となつたミセス・ブルワー・リットンはその子供たちを連れてロンドンへと遣つて來た。そして、大きい方の二人は學校へ遣り、一番可愛がつてる末子のエドワードだけは自分の手で育て上げることにした。

エドワードは、まこと母親に似て幼くから物事に感じ易かつた。母親がゴールドミスやグレイやの詩を読むのを飽きもせず傍にゐて耳を澄してゐた。七歳になつたかならぬに、亡くなつた父親の遣した本の山のなかに、日の暮れるまで我を忘れて過すことさへあつた。

十四歳のことである。イエリングの村で日を送つてゐたとき、彼はそこを流れる河の縁で幾度か世にも優しい面輪と出逢つたのであつた。エドワードはとても話し掛ける勇氣はなかつたが、度々の邂逅ののち、その少女はエドワードには、ゑみ、顔を赧らめたのだつた。少女は賭博好きの父親と一緒に貧しい小屋に棲んで居り、時とすると何週間も一人ぼつちで捨てて置かれることすらもあつた。騎士を夢見てゐたわが少年は、この美しくて不幸な少女が夢寐にも忘れ得ないものとなつたのであつた。

暮れ方になるとエドワードは果實を買つてこの河岸へ遣つて來た。樹蔭でその少女と一緒に喰べる爲めであつた。しかし、ある日、いくら待つても少女は來なかつた。その次の日も、また次の日も。少年はとうとう少女の小屋まで行つて見た。扉を開けて出て來た老婆が言ふには、父親と娘とは何處かへ出掛けて了ひ、誰もその行先は知らぬとのことであつた。

この小さな悲劇は、エドワードの性格を深く變へることとなつた。メランコリーになり、寂寞と森林とを愛し、兎もすればバイロンの詩を口誦む彼を人々は見るとやうになつたのであつた。

○

二十五の歳、エドワードは花の巴里へ渡つた。年若くて巴里に渡つた誰しもが成るやうに、彼もいつか立派な洒落者になつてしまつたのであつた。若し彼に物を書く野心と趣味とがなかつたならば、人々がその將來を心配するほどに、社交と饗宴との華やかな空氣のなかに溺れ切つてしまつたのであつた。

母親のミセス・ブルワー・リットンは、この巴里の社交界に於ける息子の「成功」を、その知合たちの寄こして呉れる手紙で知つて、ひそかに悦んでゐた。エドワードにはリットン家の貴族的な血がちやんと流れてゐるのだ！このうへは彼がロンドンへ歸つて來るのを待つて、早速恥かしからぬ家柄の娘と花やかな結婚式を擧げさせることにしやう。——これが、母親の先づ第一の心願ひであつた。

然しエドワードにとつては結婚などは問題でなかつた。

『自分には魂の愛などは永劫に死んでしまつてゐるのだ』とも書いた。『餘りに早く花開いた感情